

梶子遺跡 19・20 次

本文編

2019

浜松市教育委員会

例 言

- 1 本書は静岡県浜松市中区南伊場町 33 番地の 1 ほかにおける梶子遺跡 19・20 次調査の発掘調査報告書である。当発掘調査の報告書は、本文編（第 1 分冊）、写真図版編（第 2 分冊）、古環境調査編（第 3 分冊）の 3 部で構成される。本書は第 1 分冊に相当する。
- 2 発掘調査は、東海旅客鉄道株式会社浜松工場の建替工事に先立ち実施した。現地発掘調査及び報告書刊行作業は、ジェイアール東海コンサルタンツ株式会社と浜松市との委託契約により浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務を浜松市教育委員会の指示のもと、浜松市から委託を受けた株式会社ノガミが実施した。調査にかかわる費用は、全額ジェイアール東海コンサルタンツ株式会社が負担した。
- 3 発掘調査にかかわる面積と期間は、以下の通りである。

調査面積 約 6,643 m²

委託期間 平成 28 年（2016 年）4 月 1 日～平成 31 年（2019 年）3 月 29 日

- 4 現地調査は、井口智博、鈴木京太郎（浜松市市民部文化財課）の指示のもと、株式会社ノガミが実務を担当した。調査体制と担当の詳細は別表に記す。整理作業は井口の指示のもと、上田優喜、藤本隆之が実務を担当、秋山真好、小村正之、山中悟朗、高尾将矢が補佐した。
- 5 本書の編集は上田が行った。執筆者は下記のとおりである。

第 1 章	5	上田優喜
1	6	上田優喜
2	7	藤本隆之
3		
4		
5		
第 2 章		
1		
2		
3		
4		
5		
第 3 章		
1		
2		
3		
4		
第 4 章		
1		
2		
3		
4		
第 5 章		
1		
2		
3		
4		
第 6 章		
1		
2		
3		

遺物写真撮影は、木簡及び墨書土器の赤外線写真を独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所写真室が行い、遺物集合写真を井口が、その他を小村が行った。

- 6 調査にかかわる諸記録及び出土遺物は、浜松市市民部文化財課が保管している。

凡 例

- 1 本書で用いる座標値はすべて世界測地系に基づく。方位（北）は座標北、標高は海拔高である。
- 2 土層・土器の色調は『標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議局監修）に準拠した。
- 3 遺構、遺物の略記号は以下の通りとする。
SH：掘立柱建物 SK：土坑 SD：溝・自然流路 SS：貝塚 SP：小穴
SX：遺物集積・性格不明遺構
- 4 遺構番号は検出層位にかかわらず、調査区小区画・遺構種別ごとに連番を付した。
- 5 本書に掲載された遺構図、遺物実測図の縮尺はそれぞれの図面に明記した。
- 6 本文中に使用した土器の型式名や用語及び編年観は、以下の文献に基づき記載した。

弥生土器 ： 鈴木一有 2009 「鳥居松遺跡出土遺物にみる弥生時代後期の土器編年」
『鳥居松遺跡第5次 弥生時代編』（財）浜松市文化振興財団

古式土師器： 鈴木一有 2002 「古墳時代前期に関する諸問題」
『恒武西宮遺跡』（財）浜松市文化協会

土師器 ： 鈴木敏則 1998 「第5章 第3節 古墳時代土器編年の概要」
『梶子北遺跡 遺物編（本文）』（財）浜松市文化協会

須恵器 ： 鈴木敏則 2005 「第5章 第1節 出土須恵器について」
『東若林遺跡』（財）浜松市文化振興財団

- 7 本書では、掲載遺物実測図中に以下のようなスクリーン・トーン、記号を用いた。なお、赤彩・朱墨書・朱墨痕についてはその都度、図中に示した。

[遺物断面]

 須恵器  灰釉陶器・緑釉・青磁  土製品・石製品

[遺物表面]

 墨書  朱墨書  墨痕  朱墨痕  赤彩
 灰釉陶器・緑釉・青磁

[遺物記号]

 ヘラケズリ方向  ヘラ記号  回転糸切  静止糸切

目 次

例 言

凡 例

第1章 序 論

1 調査に至る経緯	1
2 調査の方法と経過	2
3 地理的・歴史的環境	6
4 梶子遺跡の調査歴	12
5 確認調査・工事立会	17

第2章 調査成果

1 基本層位	21
2 A区の調査	23
3 B区の調査	41
4 C区の調査	45
5 D区伊場大溝兩岸の調査	49

第3章 伊場大溝の調査成果

1 伊場大溝の層位	73
2 伊場大溝形成以前の遺構と遺物	76
3 伊場大溝Ⅷ層の調査	79
4 伊場大溝Ⅶ層の調査	86
5 伊場大溝Ⅴ層の調査	124
6 伊場大溝Ⅳ層の調査	179
7 伊場大溝Ⅲ層の調査	321

第4章 20次の調査成果

1 A区の調査	329
2 B区の調査	330
3 C区の調査	332
4 D区の調査	333

第5章 考 察

1 伊場大溝について	334
2 伊場遺跡群から出土したナスビ形曲柄鍬の系譜について	343
3 梶子遺跡出土墨書土器の検討	349
4 梶子遺跡19次調査出土木簡の概要	369

第6章 総括

1 発掘調査の成果	375
2 特筆すべきことがら	376
3 今後の展望と課題	377

出土遺物観察表

報告書抄録

挿 図 目 次

Fig. 1 梶子遺跡の位置	1	Fig. 31 A区 遺構外 出土遺物(1)	38
Fig. 2 梶子遺跡 調査区位置図	4	Fig. 32 A区 遺構外 出土遺物(2)	39
Fig. 3 調査区及びグリッド配置図	5	Fig. 33 B区 上層遺構全体図	42
Fig. 4 現地調査・整理作業状況	5	Fig. 34 B区 SD01 実測図	42
Fig. 5 浜松市南部の地形模式図	6	Fig. 35 B区 土層断面図・下層遺構全体図	43
Fig. 6 梶子遺跡周辺の地形区分図	7	Fig. 36 B区 SD02 実測図	44
Fig. 7 古代の伊場遺跡群周辺	10	Fig. 37 B区 遺構外 出土遺物	44
Fig. 8 伊場遺跡群周辺の荘園分布図	10	Fig. 38 C区 遺構全体図	46
Fig. 9 梶子遺跡周辺の遺跡分布図	11	Fig. 39 C区 SD01・SK01・SX01 実測図	47
Fig. 10 伊場遺跡群全体図	13・14	Fig. 40 C区 SX01 出土遺物	48
Fig. 11 梶子遺跡全体図	15・16	Fig. 41 D区 グリッド配置図・土層柱状図	50
Fig. 12 確認調査・工事立会箇所	17	Fig. 42 D区 遺構全体図	51・52
Fig. 13 確認調査土層柱状図	18	Fig. 43 D区 下層 遺構全体図	54
Fig. 14 確認調査出土遺物	18	Fig. 44 SD1005・1010・1011・1015・ 1017・1018 実測図	55
Fig. 15 工事立会の状況(C地点)	20	Fig. 45 SD1006～1009 実測図	56
Fig. 16 工事立会の状況(E地点)	20	Fig. 46 SD1001・1012～1014・1016 実測図	57
Fig. 17 基本層序位置図	22	Fig. 47 SD1008・1016 出土遺物	57
Fig. 18 土層柱状図	22	Fig. 48 SK1006～1008・1012・1013 実測図	58
Fig. 19 A区・18次F区 遺構全体図	25・26	Fig. 49 遺構外出土遺物	59
Fig. 20 SD01・07 実測図	27	Fig. 50 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 北東部拡大図	60
Fig. 21 A区 SD14～16・19 実測図	28	Fig. 51 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 北中央部拡大図	61
Fig. 22 A区 SD20～24・26 実測図	29	Fig. 52 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 南東部拡大図	62
Fig. 23 A区 SD07・15 出土遺物	30	Fig. 53 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 南西部拡大図	63
Fig. 24 A区 SK13・41・49・50 実測図	31	Fig. 54 SH01・SH02 実測図	64
Fig. 25 A区 SK73・85・102・104 実測図	32	Fig. 55 SD02・76・77・301～303・312実測図	65
Fig. 26 SK41・73 出土遺物	33		
Fig. 27 A区 SK49 出土遺物(1)	34		
Fig. 28 A区 SK49 出土遺物(2)	35		
Fig. 29 A区 SK49 出土遺物(3)	36		
Fig. 30 A区 SK49・50 出土遺物	37		

Fig. 56	SD77・312・303 出土遺物	66	Fig. 93	VII層 出土遺物(14)	105
Fig. 57	SD03・05・19～24・26～29・33・45・47・52～ 59・68・96・99・100・134～146実測図	66	Fig. 94	VII層 出土遺物(15)	106
Fig. 58	SD273・274・275～284・295・ 296・SP92 実測図	67	Fig. 95	VII層 出土遺物(16)	107
Fig. 59	SD97・201・275 出土遺物	67	Fig. 96	VII層 出土遺物(17)	108
Fig. 60	SD220・SK02・04・10・11 実測図	68	Fig. 97	VII層 出土遺物(18)	109
Fig. 61	SK04・11 出土遺物	68	Fig. 98	VII層 出土遺物(19)	110
Fig. 62	SP155・157～159・162・163・180実測図	69	Fig. 99	VII層 出土遺物(20)	111
Fig. 63	SP185・186・236・237・238実測図	70	Fig. 100	VII層 出土遺物(21)	112
Fig. 64	SP12・157・159・214・234 236・238・253 出土遺物	71	Fig. 101	VII層 出土遺物(22)	113
Fig. 65	遺構外出土遺物	72	Fig. 102	VII層 出土遺物(23)	114
Fig. 66	大溝トレンチ2 土層堆積状況	74	Fig. 103	VII層 出土遺物(24)	115
Fig. 67	伊場大溝土層断面図	75	Fig. 104	VII層 出土遺物(25)	116
Fig. 68	SD315 出土遺物	76	Fig. 105	VII層 出土遺物(26)	117
Fig. 69	SD315 実測図	77	Fig. 106	VII層 出土遺物(27)	118
Fig. 70	伊場大溝形成以前の遺物	78	Fig. 107	VII層 出土遺物(28)	119
Fig. 71	SD314 実測図	80	Fig. 108	VII層 出土遺物(29)	120
Fig. 72	D区伊場大溝VIII層	81・82	Fig. 109	VII層 出土遺物(30)	121
Fig. 73	SD314 出土遺物	83	Fig. 110	VII層 出土遺物(31)	122
Fig. 74	VII層 出土遺物(1)	84	Fig. 111	VII層 出土遺物(32)	123
Fig. 75	VII層 出土遺物(2)	85	Fig. 112	D区伊場大溝V層	125・126
Fig. 76	D区伊場大溝VII層	87・88	Fig. 113	V層における遺物出土位置	127・128
Fig. 77	VII層における遺物出土位置	89・90	Fig. 114	SX03 実測図	129
Fig. 78	SS14 実測図	91	Fig. 115	SX03 出土遺物	130
Fig. 79	SS14 出土遺物	91	Fig. 116	SS03 実測図	131
Fig. 80	VII層 出土遺物(1)	92	Fig. 117	SS03 出土遺物(1)	132
Fig. 81	VII層 出土遺物(2)	93	Fig. 118	SS03 出土遺物(2)	133
Fig. 82	VII層 出土遺物(3)	94	Fig. 119	SS03 出土遺物(3)	134
Fig. 83	VII層 出土遺物(4)	95	Fig. 120	SS08 実測図	135
Fig. 84	VII層 出土遺物(5)	96	Fig. 121	SS08 出土遺物	135
Fig. 85	VII層 出土遺物(6)	97	Fig. 122	SS09 実測図	136
Fig. 86	VII層 出土遺物(7)	98	Fig. 123	SS09 出土遺物	137
Fig. 87	VII層 出土遺物(8)	99	Fig. 124	SS10・SS11 実測図	137
Fig. 88	VII層 出土遺物(9)	100	Fig. 125	SS11 出土遺物	137
Fig. 89	VII層 出土遺物(10)	101	Fig. 126	SD313 実測図	138
Fig. 90	VII層 出土遺物(11)	102	Fig. 127	V層北西部 出土遺物(1)	140
Fig. 91	VII層 出土遺物(12)	103	Fig. 128	V層北西部 出土遺物(2)	141
Fig. 92	VII層 出土遺物(13)	104	Fig. 129	V層北西部 出土遺物(3)	142
			Fig. 130	V層北西部 出土遺物(4)	143
			Fig. 131	V層北西部 出土遺物(5)	144
			Fig. 132	V層北西部 出土遺物(6)	145

Fig. 133	V層北西部	出土遺物(7)	146	Fig. 173	SX01西部	出土遺物(7)	192
Fig. 134	V層北西部	出土遺物(8)	147	Fig. 174	SX01西部	出土遺物(8)	193
Fig. 135	V層北西部	出土遺物(9)	148	Fig. 175	SX01西部	出土遺物(9)	194
Fig. 136	V層北西部	出土遺物(10)	149	Fig. 176	SX01西部	出土遺物(10)	195
Fig. 137	V層北西部	出土遺物(11)	150	Fig. 177	SX01西部	出土遺物(11)	196
Fig. 138	V層北西部	出土遺物(12)	151	Fig. 178	SX01西部	出土遺物(12)	197
Fig. 139	V層北西部	出土遺物(13)	152	Fig. 179	SX01西部	出土遺物(13)	198
Fig. 140	V層北西部	出土遺物(14)	153	Fig. 180	SX01西部	出土遺物(14)	199
Fig. 141	V層北西部	出土遺物(15)	154	Fig. 181	SX01西部	出土遺物(15)	200
Fig. 142	V層北西部	出土遺物(16)	155	Fig. 182	SX01西部	出土遺物(16)	201
Fig. 143	V層北西部	出土遺物(17)	156	Fig. 183	SX01西部	出土遺物(17)	202
Fig. 144	V層北西部	出土遺物(18)	157	Fig. 184	SX01西部	出土遺物(18)	203
Fig. 145	V層北西部	出土遺物(19)	158	Fig. 185	SX01西部	出土遺物(19)	204
Fig. 146	V層北西部	出土遺物(20)	159	Fig. 186	SX01西部	出土遺物(20)	205
Fig. 147	V層南東部	出土遺物(1)	162	Fig. 187	SX01西部	出土遺物(21)	206
Fig. 148	V層南東部	出土遺物(2)	163	Fig. 188	SX01西部	出土遺物(22)	207
Fig. 149	V層南東部	出土遺物(3)	164	Fig. 189	SX01西部	出土遺物(23)	208
Fig. 150	V層南東部	出土遺物(4)	165	Fig. 190	SX01西部	出土遺物(24)	209
Fig. 151	V層南東部	出土遺物(5)	166	Fig. 191	SX01西部	出土遺物(25)	210
Fig. 152	V層南東部	出土遺物(6)	167	Fig. 192	SX01西部	出土遺物(26)	211
Fig. 153	V層南東部	出土遺物(7)	168	Fig. 193	SX01西部	出土遺物(27)	212
Fig. 154	V層南東部	出土遺物(8)	169	Fig. 194	SX01西部	出土遺物(28)	213
Fig. 155	V層南東部	出土遺物(9)	170	Fig. 195	SX01西部	出土遺物(29)	214
Fig. 156	V層南東部	出土遺物(10)	171	Fig. 196	SX01西部	出土遺物(30)	215
Fig. 157	V層南東部	出土遺物(11)	172	Fig. 197	SX01西部	出土遺物(31)	216
Fig. 158	V層南東部	出土遺物(12)	173	Fig. 198	SX01西部	出土遺物(32)	217
Fig. 159	V層南東部	出土遺物(13)	174	Fig. 199	SX01西部	出土遺物(33)	218
Fig. 160	V層南東部	出土遺物(14)	175	Fig. 200	SX01西部	出土遺物(34)	219
Fig. 161	V層南東部	出土遺物(15)	176	Fig. 201	SX01西部	出土遺物(35)	220
Fig. 162	V層南東部	出土遺物(16)	177	Fig. 202	SX01西部	出土遺物(36)	221
Fig. 163	V層南東部	出土遺物(17)	178	Fig. 203	SX01西部	出土遺物(37)	222
Fig. 164	D区伊場大溝IV層		181・182	Fig. 204	SX01西部	出土遺物(38)	223
Fig. 165	IV層における遺物出土位置		183・184	Fig. 205	SX01西部	出土遺物(39)	224
Fig. 166	SX01	出土位置図	185	Fig. 206	SX01西部	出土遺物(40)	225
Fig. 167	SX01西部	出土遺物(1)	186	Fig. 207	SX01西部	出土遺物(41)	226
Fig. 168	SX01西部	出土遺物(2)	187	Fig. 208	SX01中央部	出土遺物(1)	228
Fig. 169	SX01西部	出土遺物(3)	188	Fig. 209	SX01中央部	出土遺物(2)	229
Fig. 170	SX01西部	出土遺物(4)	189	Fig. 210	SX01中央部	出土遺物(3)	230
Fig. 171	SX01西部	出土遺物(5)	190	Fig. 211	SX01中央部	出土遺物(4)	231
Fig. 172	SX01西部	出土遺物(6)	191	Fig. 212	SX01中央部	出土遺物(5)	232

Fig. 213	SX01中央部	出土遺物(6)	233	Fig. 253	SX01東部	出土遺物(1)	274
Fig. 214	SX01中央部	出土遺物(7)	234	Fig. 254	SX01東部	出土遺物(2)	275
Fig. 215	SX01中央部	出土遺物(8)	235	Fig. 255	SX01東部	出土遺物(3)	276
Fig. 216	SX01中央部	出土遺物(9)	236	Fig. 256	SX01東部	出土遺物(4)	277
Fig. 217	SX01中央部	出土遺物(10)	237	Fig. 257	SX01東部	出土遺物(5)	278
Fig. 218	SX01中央部	出土遺物(11)	238	Fig. 258	SX01東部	出土遺物(6)	279
Fig. 219	SX01中央部	出土遺物(12)	239	Fig. 259	SX01東部	出土遺物(7)	280
Fig. 220	SX01中央部	出土遺物(13)	240	Fig. 260	SX01東部	出土遺物(8)	281
Fig. 221	SX01中央部	出土遺物(14)	241	Fig. 261	SX01東部	出土遺物(9)	282
Fig. 222	SX01中央部	出土遺物(15)	242	Fig. 262	SX01東部	出土遺物(10)	283
Fig. 223	SX01中央部	出土遺物(16)	243	Fig. 263	SX01東部	出土遺物(11)	284
Fig. 224	SX01中央部	出土遺物(17)	244	Fig. 264	SX01東部	出土遺物(12)	285
Fig. 225	SX01中央部	出土遺物(18)	245	Fig. 265	SX01東部	出土遺物(13)	286
Fig. 226	SX01中央部	出土遺物(19)	246	Fig. 266	SX02 実測図		287
Fig. 227	SX01中央部	出土遺物(20)	247	Fig. 267	SS01・SS02 実測図		288
Fig. 228	SX01中央部	出土遺物(21)	248	Fig. 268	SS01 出土遺物(1)		289
Fig. 229	SX01中央部	出土遺物(22)	249	Fig. 269	SS01 出土遺物(2)		290
Fig. 230	SX01中央部	出土遺物(23)	250	Fig. 270	SS04・SS05・SS06 実測図		291
Fig. 231	SX01中央部	出土遺物(24)	251	Fig. 271	SS02・SS04 出土遺物		292
Fig. 232	SX01中央部	出土遺物(25)	252	Fig. 272	SS05 出土遺物		293
Fig. 233	SX01中央部	出土遺物(26)	253	Fig. 273	SS06 出土遺物(1)		294
Fig. 234	SX01中央部	出土遺物(27)	254	Fig. 274	SS06 出土遺物(2)		295
Fig. 235	SX01中央部	出土遺物(28)	255	Fig. 275	SS06 出土遺物(3)		296
Fig. 236	SX01中央部	出土遺物(29)	256	Fig. 276	SD311 実測図		297
Fig. 237	SX01中央部	出土遺物(30)	257	Fig. 277	SD311 出土遺物(1)		298
Fig. 238	SX01中央部	出土遺物(31)	258	Fig. 278	SD311 出土遺物(2)		299
Fig. 239	SX01中央部	出土遺物(32)	259	Fig. 279	SD311 出土遺物(3)		300
Fig. 240	SX01中央部	出土遺物(33)	260	Fig. 280	IV層 出土遺物(1)		303
Fig. 241	SX01中央部	出土遺物(34)	261	Fig. 281	IV層 出土遺物(2)		304
Fig. 242	SX01中央部	出土遺物(35)	262	Fig. 282	IV層 出土遺物(3)		305
Fig. 243	SX01中央部	出土遺物(36)	263	Fig. 283	IV層 出土遺物(4)		306
Fig. 244	SX01中央部	出土遺物(37)	264	Fig. 284	IV層 出土遺物(5)		307
Fig. 245	SX01中央部	出土遺物(38)	265	Fig. 285	IV層 出土遺物(6)		308
Fig. 246	SX01中央部	出土遺物(39)	266	Fig. 286	IV層 出土遺物(7)		309
Fig. 247	SX01中央部	出土遺物(40)	267	Fig. 287	IV層 出土遺物(8)		310
Fig. 248	SX01中央部	出土遺物(41)	268	Fig. 288	IV層 出土遺物(9)		311
Fig. 249	SX01中央部	出土遺物(42)	269	Fig. 289	IV層 出土遺物(10)		312
Fig. 250	SX01中央部	出土遺物(43)	270	Fig. 290	IV層 出土遺物(11)		313
Fig. 251	SX01中央部	出土遺物(44)	271	Fig. 291	IV層 出土遺物(12)		314
Fig. 252	SX01中央部	出土遺物(45)	272	Fig. 292	IV層 出土遺物(13)		315

Fig. 293	IV層 出土遺物(14)	316	比較概念図	338
Fig. 294	IV層 出土遺物(15)	317	Fig. 310 伊場大溝 各調査 層位毎規模	
Fig. 295	IV層 出土遺物(16)	318	底面標高 比較グラフ	339
Fig. 296	IV層 出土遺物(17)	319	Fig. 311 古代～中世伊場遺跡群 水系図	340
Fig. 297	IV層 出土遺物(18)	320	Fig. 312 ナスビ形曲柄鍬(左)と	
Fig. 298	D区伊場大溝Ⅲ層	323・324	直柄風呂鍬(右)(S=1:8)	343
Fig. 299	Ⅲ層における遺物出土位置	325・356	Fig. 313 ナスビ形曲柄鍬の生成過程	345
Fig. 300	Ⅲ層 出土遺物(1)	327	Fig. 314 伊場大溝出土のナスビ形	
Fig. 301	Ⅲ層 出土遺物(2)	328	曲柄鍬とその層位(S=1:8)	345
Fig. 302	A区 遺構全体図	329	Fig. 315 梶子19次出土のナスビ形曲柄鍬と	
Fig. 303	B区 遺構全体図	330	河田宮ノ北遺跡出土例(S=1:8)	346
Fig. 304	B区 出土遺物	331	Fig. 316 梶子19次出土のナスビ形曲柄鍬	
Fig. 305	C区 遺構全体図	332	の反柄装着状況推定図(S=1:8)	346
Fig. 306	D区 遺構全体図	333	Fig. 317 古代における反柄装着鍬の	
Fig. 307	伊場大溝 位置図	334	地域色(S=1:10)	347
Fig. 308	自然堆積河川の浸食過程	337	Fig. 318 梶子遺跡19次調査出土木簡(1)	373
Fig. 309	伊場大溝 断面(溝幅)		Fig. 319 梶子遺跡19次調査出土木簡(2)	374

挿 表 目 次

Tab. 1	梶子遺跡19・20次調査体制	3	Tab. 5	19次調査D区・15次調査B-1区	
Tab. 2	梶子遺跡における発掘調査一覧	12	土層対応表	49	
Tab. 3	19次A・C区 18次F-1区		Tab. 6	墨書土器集計表	355
	土層対応表	23	Tab. 7	出土墨書土器一覧	356
Tab. 4	19次A区 18次F-1区 遺構対応表	24			

第1章 序 論

1 調査に至る経緯

梶子遺跡は、伊場遺跡群を構成する遺跡の一つである。遺跡の範囲は、ほぼ東海旅客鉄道株式会社浜松工場の敷地と重なっており、過去には国鉄浜松工場内遺跡と呼ばれていた。

遺跡は、1962年に旧国鉄浜松工場内の工事現場から出土した弥生土器片が、浜松市郷土博物館に持ち込まれたことにより、存在が明らかになった。梶子遺跡とその周辺は大正時代から厚く盛土がなされており、当初は遺跡の規模や性格について把握することが困難であったが、1970年代後半以降、浜松工場の建物新築等により本格的な発掘調査が行われるようになった。

梶子遺跡では、これまでに浜松工場の施設建設に関連する発掘調査と、工場外周の市道沿いの排水路改修や下水道工事に伴う発掘調査が行われ、徐々に遺跡の性格が明らかになりつつある。過去の発掘調査の結果から、弥生時代の東西1km近くにも及ぶ広大な居住域をもつ環濠集落の存在や、飛鳥・奈良・平安時代の木簡や墨書土器などの古代文字資料が多数出土したことから、隣接する伊場遺跡とともに当地に古代敷智郡の郡家が存在したことが明らかになっている。

浜松工場は、永らく東海道新幹線の定期検査場としての役割を担ってきたが、工場の老朽化とその耐震性の強化が課題となっていた。2005年に東海旅客鉄道株式会社より工場の全面的な建替と改修計画が示され、埋蔵文化財の取扱いについて協議を行った。また、協議と並行して範囲確認調査を複数回実施し、工場地下の埋蔵文化財の埋没状況について調査を行った。この結果、開発による埋蔵文化財への影響がある箇所については、本発掘調査を実施することとなり、2011年度から現地発掘調査を開始した。

2016～2017年度の現地発掘調査及び2018年度の整理・報告書刊行作業は、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行い、実務を株式会社ノガミに委託して実施した。調査面積の合計は、6,643 m²である。

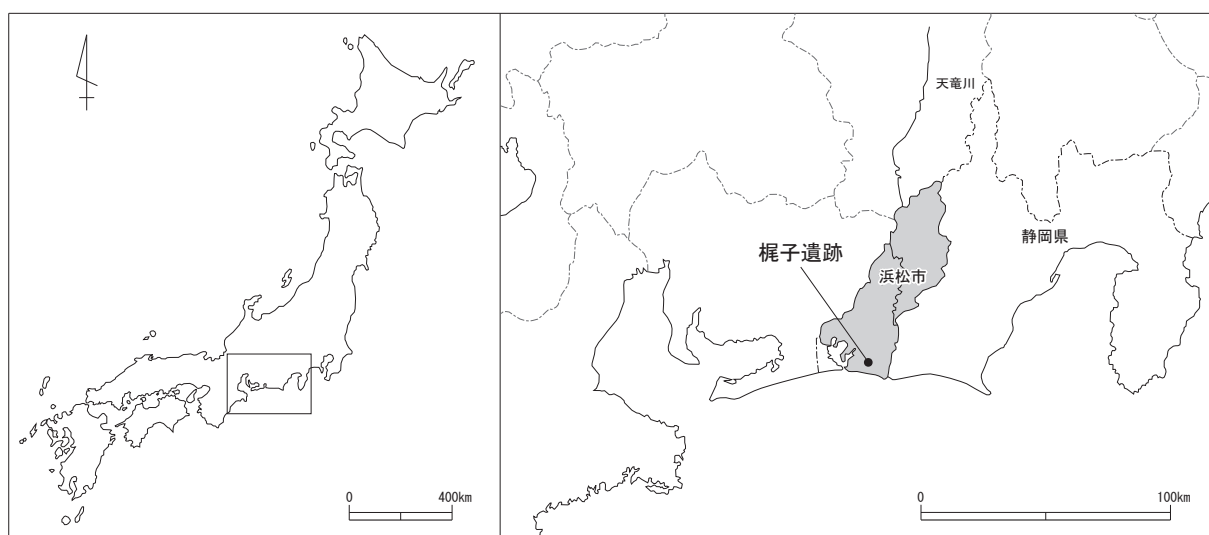


Fig.1 梶子遺跡の位置

2 調査の方法と経過

調査地区の設定 今回の調査対象地は工場内の各所に分散しており、調査次、調査地区ごとにA～D区の調査区名称を付した。調査は、工事の工程上の理由から各調査区を小区画に分割して行う必要が生じたため、小区画には調査順に枝番を付した。各調査区の面積は19次調査のA区で1,162㎡、B区で104㎡、C区で86㎡、D区で5,221㎡、20次調査ではA区21㎡、B区33㎡、C区13㎡、D区3㎡になり、調査総面積は6,643㎡である。

グリッドの設定 調査を開始するにあたり、世界測地系に基づく平面直角座標第Ⅷ系を用いて10m間隔のグリッドを設定した。原点は、グリッド北西隅（X=-143,900、Y=-72,700）とし、東西方向にアルファベット、南北方向に数字を用い、各々を組み合わせて呼称した。

表土の除去 調査地はJR東海浜松工場内であり、全域に盛土が施されていたため、各調査区すべてにおいて、最初に重機（バックホー）を用いてそれらの除去作業を行った。重機のバケットには平爪を装着し、慎重に掘削を行った。調査で発生した排土は、汚染土と非汚染土に選別しながらベルトコンベアーを連ね、遺構に干渉しない艦砲弾炸裂穴などに仮置き後、場外へ搬出してそれぞれ処分した。

遺構の掘削 遺構の確認は、表土除去後、人力による遺物包含層掘削と遺構検出、精査を行った。包含層掘削には主にスコップと四本鋤、遺構の検出には鋤簾、三角草刈ホーを使用した。検出した遺構は移植ごと、竹ベラなどを用いて慎重に掘り下げた。遺構については適宜、断面ベルトの設置、または半裁掘削して、埋土堆積状況の把握に努めた。遺構内からの出土遺物は状況に応じて写真撮影や出土状況図を作成して、取り上げを行った。

図面作成 遺構平面図は、設定した基準点を基にトータルステーションを用いて計測して記録作成を行った。調査区壁面や埋土の特徴的な遺構は主にトータルステーション、オルソ画像を用いて土層断面図を作成した。また、遺物の出土状態は必要に応じて手実測、オルソ画像を用いて平面と立面を図化した。

写真撮影 写真撮影は主に6×7判を用い、フィルムはモノクロ（フジ・ネオパン ACROS）とカラーリバーサル（フジ・プロビア 100F）を使用した。また、一部4×5判を用い、モノクロとカラーリバーサルでの撮影を行った。カラーリバーサルフィルムについては35mm判での撮影も行った。作業工程記録などのメモ写真にはデジタルカメラも併用した。高所からの撮影にはローリングタワーや高所作業車、ラジコンヘリを使用した。

整理作業 出土遺物の洗浄など基礎整理作業の一部については現地調査の段階から並行して行った。本格的な整理作業と報告書作成作業は、現地調査終了後の2017年7月から2019年3月まで、梶子遺跡発掘調査事務所において、出土遺物の復元、実測、図面編集、トレース、原稿執筆などの報告書作成業務を行った。報告書に掲載しない遺物については、先行して平成30年（2018年）6月19日に浜松市文化財課職員立会のもと川名収蔵庫へ収めた。出土遺物については報告書の挿図番号順に収納し、浜松市地域遺産センターにて保管している。

Tab. 1 梶子遺跡 19・20 次調査体制

平成 28 年 4 月 ～ 平成 28 年 6 月	代理人兼主任調査員	福山 俊彰	
	調査員	村端 和樹	
		秋山 泰利	
		金内 元	
	計測員	小熊 晋介	
平成 28 年 7 月 ～ 平成 29 年 2 月		儘田 聡	
	代理人兼主任調査員	秋山 泰利	
	調査員	村端 和樹	
		秋山 真好	平成 29 年 1 月～
		小村 正之	平成 29 年 2 月～
	計測員	儘田 聡	
		小熊 晋介	～平成 28 年 9 月
平成 29 年 3 月 ～ 平成 29 年 6 月		安達 貴則	平成 28 年 12 月～
	計測補助員	高尾 将矢	平成 29 年 2 月～
	代理人兼主任調査員	藤本 隆之	
	調査員	村端 和樹	
		秋山 真好	
		小村 正之	
		山中 悟朗	
	調査補助員	上田 優喜	平成 29 年 4 月～
平成 29 年 7 月 ～ 平成 30 年 3 月	計測員	儘田 聡	～平成 29 年 6 月
		安達 貴則	
	計測補助員	高尾 将矢	
	代理人兼主任調査員	藤本 隆之	
	調査員	秋山 真好	
		山中 悟朗	20 次調査
		小村 正之	
平成 30 年 4 月 ～ 平成 31 年 3 月	計測員	安達 貴則	
	調査補助員	上田 優喜	
	調査補助員	高尾 将矢	
平成 30 年 4 月 ～ 平成 31 年 3 月	代理人兼主任調査員	藤本 隆之	
	調査員	上田 優喜	
		小村 正之	

調査参加者

現地調査 相沢健一郎・青谷紗千子・縣弘二郎・足木伸久・足立典正・足立まゆみ・石岡幸・伊藤均
 岩崎直之・植田喜明・内海洋司・大石捷郎・大川聖悟・大城光明・太田清・大林稔・大村真治
 加藤章行・川添昌徳・木下益男・久保木進・小出和明・小出水総一郎・斎藤賢一・佐藤政秀
 澤木延文・澤田万里・島袋彰男・新庄克己・菅原岬・杉山道雄・鈴木薫・鈴木清・鈴木均
 鈴木三四昭・鈴木義則・須部公夫・須山力一・瀬尾正・早田雅一・高部起則・竹内偉夫・田中勤
 辻健治・土屋純・出野純次・外山芳宏・長嶋津・永田峰久・永津良子・野本徹・橋爪宏之
 藤田健司・藤原豊廣・古林廣二・前嶋知幸・松本兼生・宮崎丈史・宮崎好廣・村松毅・百部紀久夫
 森慎太郎・山口義信・山崎彰子・山下加奈子・山下翔・山本留美子・渡辺時次

整理作業 青谷紗千子・荒川和哉・石岡幸・上村むつ子・内山敦世・河嶋明美・北野恵子・佐藤里恵
 澤田万里・菅原岬・田邊磯子・永津良子・中村玲子・長谷川房枝・藤森紀子・堀麗・水島絵里
 峯尾明良・峯野洋子・森下朋子・山崎彰子・山下加奈子・山邊和則・山本留美子

— 4 —

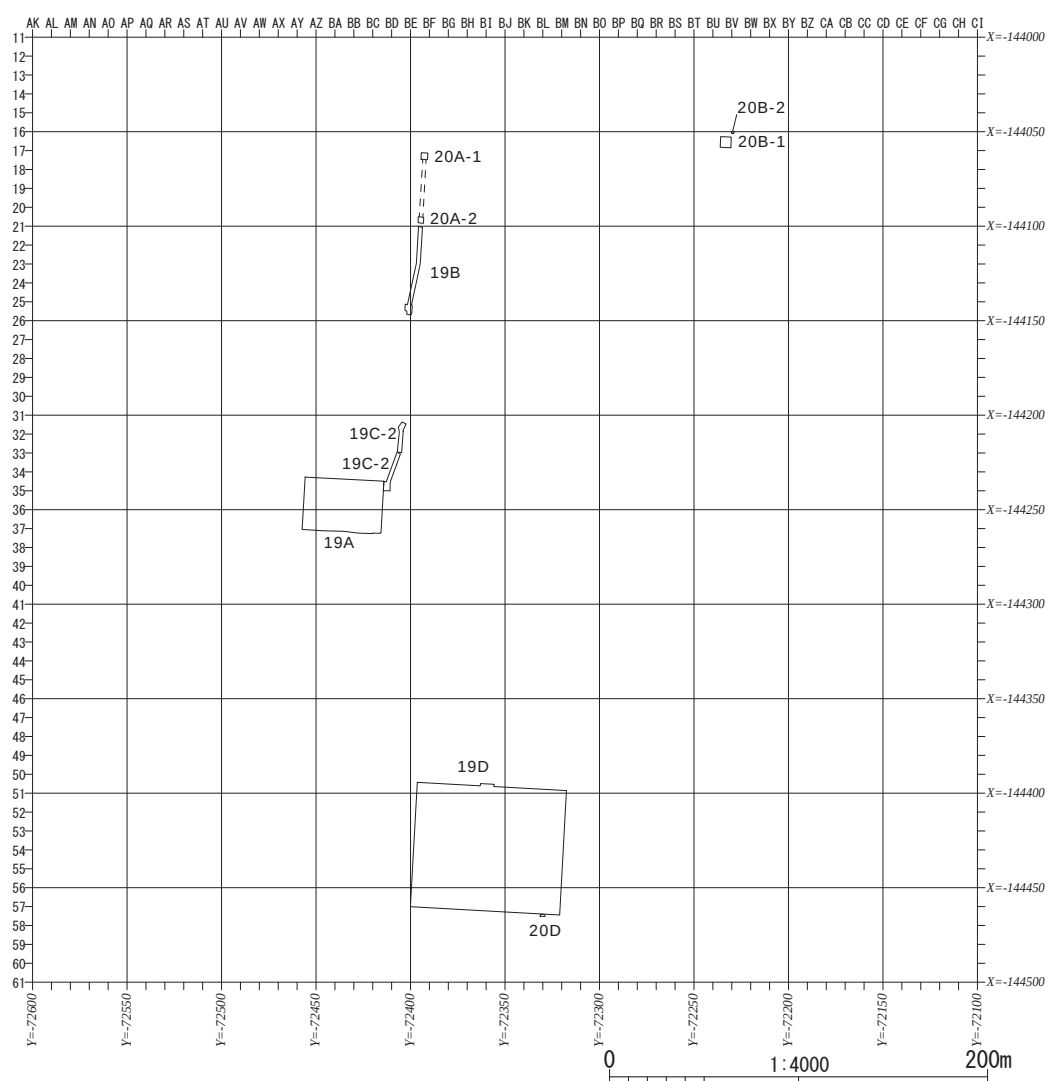


Fig.3 調査区及びグリッド配置図



Fig.4 現地調査・整理作業状況

3 地理的・歴史的環境

(1) 地理的環境

浜松市は静岡県西部に位置し、東に天竜川、西に浜名湖、南は遠州灘、北は赤石山地に囲まれている。天竜川は長野県の諏訪湖を源流として赤石山地を南下し、扇状地を形成する。扇状地の西側に洪積地である三方原台地があり、その西端に浜名湖が位置する。また三方原台地の南縁の崖裾には東西約7km、南北約3～4kmに及ぶ沖積地が広がる。この沖積地は遠州灘に面し、浜松低地と呼ばれる。本遺跡は、扇状地と三方原台地に隣接する浜松低地北東部に位置する。

浜松低地上には海岸線に並行するように東西に伸びる6列の砂丘が段階を追って発達している。最も内陸側の第1浜堤列は、約8,000年～7,000年前に形成された三方ヶ原台地南端の海蝕崖直下の砂州を指している。第2・第3浜堤列は、南下していく海岸線を追いながら約5,000年前には形成されたと推定されている。このあと南に向かって第4・第5・第6浜堤列が続く。この浜堤列間にある低地は、天竜川やその支流の氾濫平野となっており、沼地等の湿地ができ粘質土や植物遺体を含む有機質土等の低湿地堆積物が堆積している。これらの浜堤列は天竜川寄りとなる東で6列を数えるが、西に向かうにつれ収束、浜名湖畔では3列を数える。そして、東海道が第3浜堤列上に、第1浜堤列上は雄踏街道、第4浜堤列上には掛塚街道が延びており、浜堤列は交通の要所として機能していた。

梶子遺跡は伊場遺跡群に属し、遺跡群のほぼ中央に位置する。遺跡群の北に位置する第1浜堤列上には中村遺跡、梶子北遺跡、三永遺跡があり、南側の氾濫平野上に位置する城山遺跡、伊場遺跡、九反田遺跡、鳥居松遺跡、曙東遺跡が含まれる。梶子遺跡を挟む第1・2浜堤列間の低地は、東の天竜川より運ばれた大量の土砂が流入してやや標高を高くする氾濫平野と、西に向かって標高を下げ現在の堀留川へと続いていく後背低地の境となる。氾濫による土砂の堆積と自然堤防で天竜川か

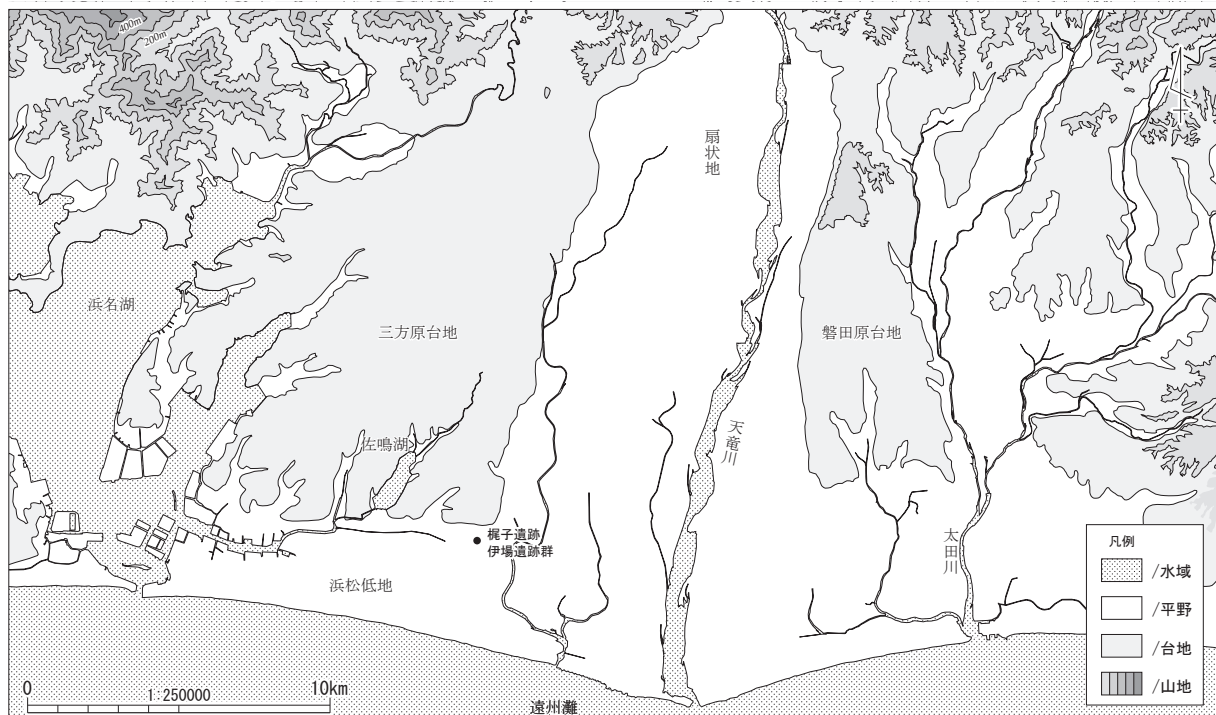


Fig. 5 浜松市南部の地形模式図

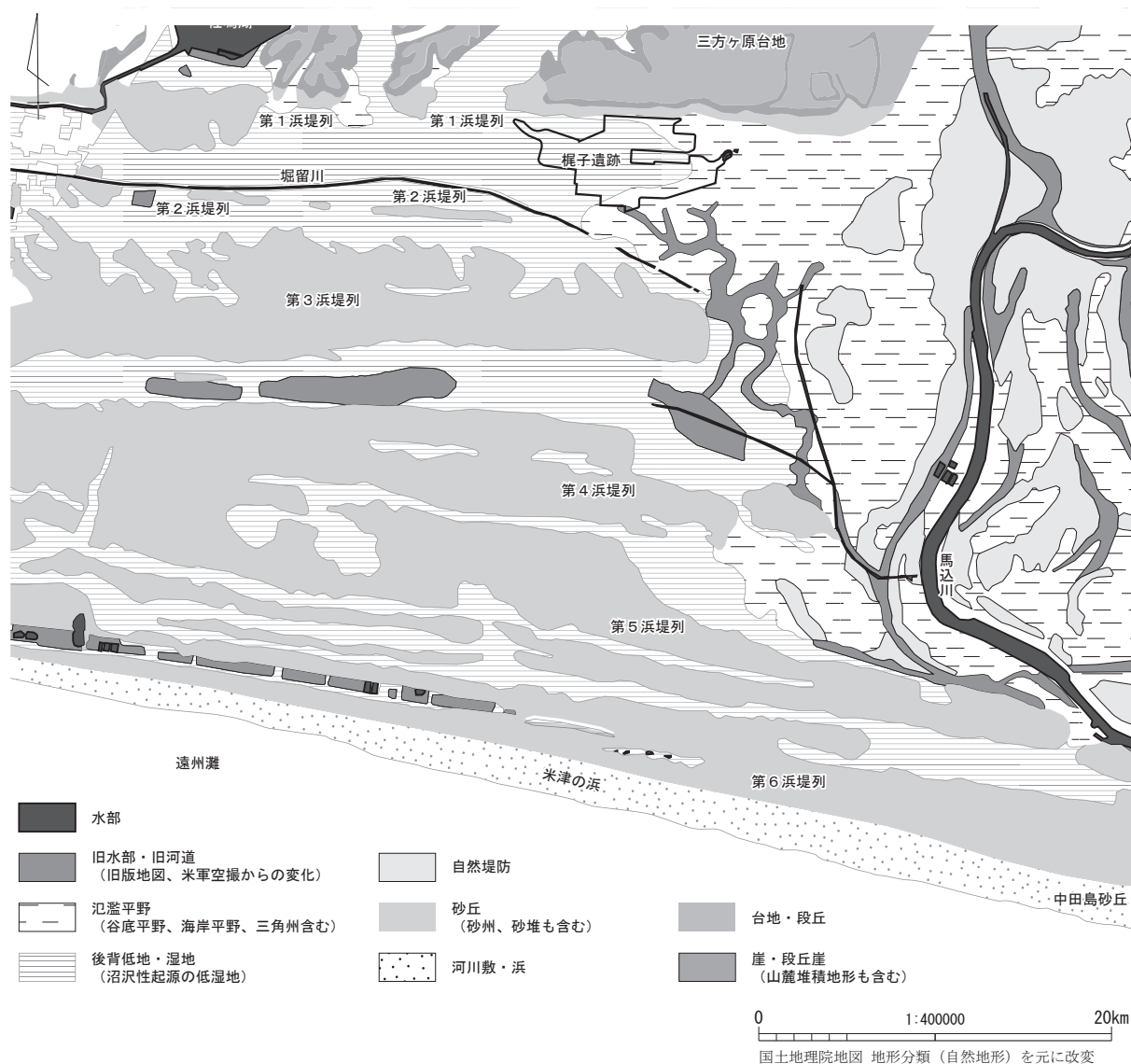


Fig. 6 梶子遺跡周辺の地形区分図

らの水流が減少したことにより、部分的な微高地を形成する。梶子遺跡では、弥生時代中期後半から後期の遺構が確認され、低地と微高地上での土地利用に明確な違いがみられることが今までの調査で判明している。微高地上の居住域は環濠により周囲を区画され、遺構の密度が高いのに対して環濠の外に広がる低地では遺構は希薄である。中央部や環濠の南部には水田耕作の痕跡が見られた。しかし、古墳時代から古代にかけては洪水による粘土層が厚く堆積し、低地と微高地に広がる生活域を埋没させたと考えられる。以降、古墳時代中期の伊場大溝周縁や本遺跡の南において敷智郡家が設置される奈良時代から平安時代初頭までは、積極的な土地活用が行われた痕跡は見つかっていない。その後は、近世に至るまで一帯は水田や水耕栽培の地として利用された。当遺跡の立地は、生活環境が自然環境の変化に大きく左右されていたと言える。

(2) 歴史的環境

旧石器時代 浜松市内で遺物が出土した遺跡は、梶池遺跡（浜北区）でナイフ形石器と細石刃核、東平遺跡（西区）や次郎太夫前遺跡（中区）において有舌尖頭器が出土している。前平Ⅱ遺跡では

市内最古となる約 20000 年前のナイフ型石器の出土が確認されている。また、根堅遺跡（北区）では約 18000 年前の層と約 14000 年前の層からそれぞれ人骨が出土している。いずれも三方ヶ原台地に位置する地点である。また、天竜川東側に所在する磐田原台地でも同様に旧石器時代の遺跡が散見される。

縄文時代 縄文海進時、浜松低地の殆どは海面下であったと考えられる。梶子遺跡周辺の砂堤列上では、梶子北遺跡と中村遺跡で前期末から中期初頭の焼成遺構と考えられている礫群が確認され、城山遺跡では前期末～中期前半、中村遺跡、城山遺跡、若林町村西遺跡でそれぞれ縄文時代前期の遺物が、高塚遺跡では中期の遺物が出土している。貝塚を伴う縄文時代後期から晩期の集落遺跡で知られる蜷塚遺跡を筆頭に、中期から晩期にかけての集落を伴う遺跡の多くは三方ヶ原台地上で確認されている。浜名湖南部の湖底では新居弁天沖遺跡やゼゼラ遺跡など中期から晩期にかけての遺跡が調査されている。

弥生時代 弥生時代になると天竜川沿いに発達した平野上において生産活動がはじまり、天竜川西岸の宮竹野際遺跡では前期の条痕文土器、晩期から弥生時代前期併行の土器が確認されている。中期には遺跡数は大きく増加する。浜堤列東端に属する伊場遺跡群においては、第 1 浜堤列上の梶子北遺跡や中村遺跡、三永遺跡で東西 800 m に及ぶ範囲に多数の方形周溝墓が検出されるなど弥生時代中期の生業域と墓域の広がり確認されている。梶子遺跡（6・8 次）や梶子北遺跡からは、環濠と考えられる溝や多量の木製品等が出土しており、中期後葉には定住的な生産活動が開始されたことを示している。現在、浜堤列の西端となっている浜名湖畔でも、舞阪町天白遺跡、甕ヶ原遺跡、白石山遺跡、大山Ⅰ遺跡や弁天島湖底遺跡、スモテ遺跡（湖西市）などが密集している。しかし、浜堤列中央部では弥生時代中期の中田尻遺跡を除いてこの時代の遺跡は確認されていない。弥生時代後期に入り、梶子遺跡や南西の城山遺跡では湿地である浜堤列間低地域において水田耕作が行われた痕跡が確認され、当該期の掘立柱建物等の居住施設も検出されている。また、周囲に長大な環濠を有する大規模集落が営まれるようになり、弥生時代後期前半は伊場遺跡群が最も範囲を広げた時期（山中Ⅱ～Ⅲ式期）とみられる。伊場遺跡に三重の環濠を有する集落が出現し、さらに南東の鳥居松遺跡でも若干の時期差で（山中Ⅱ-2 式～欠山式期）環濠集落が営まれるようになる。後期後半に入ると、伊場遺跡、梶子遺跡周辺では遺物の出土が少なくなる。該当時期の土層断面図には厚い粘土層の堆積が観察できる。天竜川平野においても集落の縮小や廃絶が確認され、自然環境の変化に起因するものであると考えられる。

古墳時代 古墳時代前期は、方形周溝墓に伴って大量の古式土師器が大量に出土した天竜川西岸の恒武西宮遺跡や、伊場遺跡群に属し第 1 浜堤列上に位置している梶子北遺跡と隣接する下山田遺跡、佐鳴湖の南西に位置する大平遺跡、第 5 浜堤列上の堤町村東遺跡、第 1 浜堤列の西端に位置する鹿小路遺跡、西脇遺跡があるが遺跡数としては少ない。梶子遺跡 10 次 B 区では、前期の水田や 8 次 B 区では方形周溝墓が検出されているが、遺構、遺物は散見的であり集落としての範囲的な広がり認められない。これは、弥生時代後期後半からの自然環境の悪条件が継続し、定住・生産活動が困難であったためと考えられる。また、前期集落の古墳は確認されていない。古墳時代中期になると、佐鳴湖の北側台地に狐塚古墳、妙法塚古墳が、南側に入野古墳群が出現し、そのうちの入

野古墳は直径 44 m、高さ 5.9 m の大型円墳である。伊場遺跡群内の第 1 浜堤列上に位置する三永遺跡、中村遺跡と浜堤列間低地に位置する梶子遺跡、城山遺跡、伊場遺跡では竪穴建物を持つ集落が営まれるようになる。この時期に伊場遺跡群を貫流する伊場大溝が形成されたと考えられる。大溝は伊場遺跡南東の鳥居松遺跡にも流域が確認でき、5 次調査では大溝から金銀装円頭大刀が出土しており、周囲に集落の中心地が形成されていたことを示している。これらの遺跡群の集落は、古墳時代後期にかけても継続し、城山遺跡 7 次調査では、伊場大溝の南側に掘立柱建物と竪穴住居を複数検出している。佐鳴湖畔西側でも浦前遺跡群が出現し、東若林遺跡等の集落が伊場遺跡群南西の第 3 浜堤列上を覆うように派生していく。同様に浜名湖東岸でも甕ヶ原遺跡、大山 I 遺跡が確認され、古墳時代中期から後期にかけての集落増加の過程を窺うことができる。古墳は佐鳴湖周辺に蜷塚古墳群、根川山古墳群、第 4 浜堤列の東端に田尻古墳群、根本山古墳群が構築されるほか、天竜川西岸となる浜松城跡付近から赤石山地の麓までの三方ヶ原台地の崖部では数多の古墳群や横穴が連なり、埋葬の過程を窺うことができる遺跡となっている。

奈良・平安時代 7 世紀の律令体制における国郡里制の実施で浜松市には、遠江国の渚評（敷智）郡、引佐郡、浜名郡、亀玉郡、長田郡（長上郡、長下郡に分割。のち長上郡に統合）が置かれるようになる。過去の調査から、敷智郡衙は伊場遺跡群、引佐郡衙は井通遺跡群、浜名郡衙は吉美遺跡群、長上郡衙は宮竹野際遺跡を包括する永田遺跡群とこれらの遺跡は出土遺物や遺構から郡衙に関連すると考えられている。律令の時代になると低地の第 3 浜堤列上の若林町村西遺跡、高塚遺跡、八王遺跡、高塚村村西遺跡、高塚村村東遺跡、第 4 浜堤列上の小沢渡村中遺跡、小沢渡村中東遺跡、新橋町村中遺跡、浜名湖東岸砂堤上の大山 II 遺跡や北浦遺跡、浜名湖対岸となる新居においても遺跡が増加していく。伊場遺跡群では、敷智郡衙の核となる官衙関連施設とみられる遺構や遺物が数多く出土している。遺物では伊場遺跡群の北西から南東へ流れる伊場大溝から、木簡や墨書土器などの文字資料が多数出土し、年号、行政関連文書、地名、人名、吉祥文字、祭祀系文字と多岐に渡る。紀年銘木簡（梶子 12 号）には、西暦 679 年を示す「己卯（つちのとう）年」と記され、飛鳥時代後期には既に渚評（敷智）郡家に関連する施設が存在したことが確認されている。政庁の官職名を表すものとして、郡家の長官を示す「大領」（梶子北 1 号）とある木簡や、「大主帳」、「郡鑑取」と書かれた墨書土器が伊場遺跡から出土している。布を納めたとみられる複数の人名とともに「一斤」（伊場 95 号）という重さが記されたものや「□廣万呂田租二石一斗」（伊場 41 号）と米の量が記され税に関する木簡も出土している。城山遺跡からは、帯金具、唐三彩陶枕などの当時貴重品とされる遺物が出土しており、有力者の存在を示唆している。梶子北遺跡では掘立柱建物群が 9 世紀より築造されるようになり、北西に角を持つ L 字形に配置された掘立柱建物 14 棟が検出されている。中には 1 辺が 10 m を超す大型の建物も確認されている。規則的に建物群が配置された空間を持つことから、当時の郡庁もしくは官舎など官営的施設と考えられる。城山遺跡周辺においては、10 世紀頃までは掘立柱建物が認められる。伊場遺跡と鳥居松遺跡の間に位置する九反田遺跡でも伊場遺跡、鳥居松遺跡と共通する「稲万呂」と書かれた墨書土器が出土している。当時の敷智郡衙に関連する施設が広範囲にわたって営まれていたことが窺える。律令期の駅路である古代東海道は当地域において、古代東海道と断定できる遺構は確認されていない。ただし、浜名湖南岸を通る古

代東海道沿いの伊場遺跡群からは、栗原駅を示す「栗原」（伊場 97 号）と書かれた木簡や、「栗」「栗原駅長」と記された墨書土器など、律令の駅制と伝制に関連する遺物が出土している。水運としては、伊場遺跡で出土した木簡に「浜津」（伊場 19・30 号）の文字が認められ、「和名類聚抄」の平安時代後期版に「浜津」の記述が、室町時代版には「浜松」となっていることから、奈良時代には「浜松」の元となる地名「浜津」が伊場遺跡群周辺に出現しており、湊としての津の存在を示している。鳥居松遺跡 9 次調査では杭と横木で作られたテラス状の空間に、栈橋や階段を設けた護岸工事の例も確認されており、潟湖の港湾施設があったことが窺える。

中世以降 平安時代中期になると各地に荘園が形成され、浜松では浜松庄（荘）池田荘、都田御厨、美園御厨、羽鳥荘、市野荘、蒲御厨、川勾荘、村櫛荘、刑部御厨、浜名神戸、尾名御厨、長上荘、長下荘などの荘園が成立していった。その頃の集落は、第 3 浜堤列上や第 4 浜堤列上に多くみられるほか、花学院境内遺跡である弘仁 12 年（861 年）に建立された西鴨江寺の北東台地に下山 IV 遺跡、大畑遺跡、大畑 II 遺跡がある。また、そのさらに東に位置する佐鳴湖西岸においても、弥生時代、古墳時代の廃絶した集落上に、村前山東遺跡、太平遺跡群、天の峰遺跡などがふたたび形成される。当時、荘園領有の多くは寺社であり、浜松市の北に位置する宮口古窯群の吉名 1 号窯では寺院の塔頂部に使用される法輪が出土しており、寺院への瓦などの供給源であったと考えられる。伊場遺跡群は浜松荘域に含まれる。この浜松荘は当時天竜川本流であった現在の馬込川左岸を東端として、西は浜松市西区雄踏町に至る広大な範囲に広がっていたと推定される。伊場遺跡群は、平安時代に入ると急速に衰退していく。平安海進期の海水準の上下変動で生活環境が不安定になったことなどが起因したと考えられる。第 1 浜堤列上の三永遺跡、梶子北遺跡、中村遺跡では鎌倉時代の掘立柱建物や井戸が確認されているが、遺構・遺物ともに希薄であり、敷智郡家は 10 世紀末には消滅したとみられている。伊場遺跡群では、戦国期の遺構として城山遺跡と梶子 11 次調査において幅 5 ～ 7 m 程の大型区画溝を確認しており、居館の周囲に巡らされた堀であると推定されている。堀全域からは漆塗の木製品、内耳鍋や陶器、かわらけ等が多数出土しているが、居館としての建物跡は確認されていない。この堀の廃絶後には積極的な土地利用の痕跡は確認されておらず、水田等の生産活動的な土地利用にとどまる。

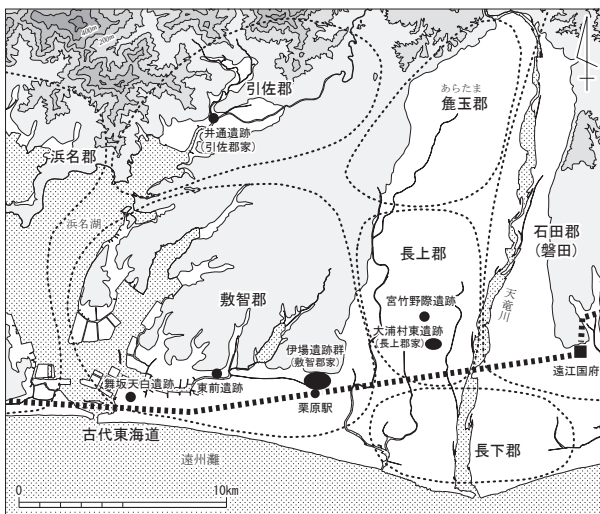


Fig. 7 古代の伊場遺跡群周辺

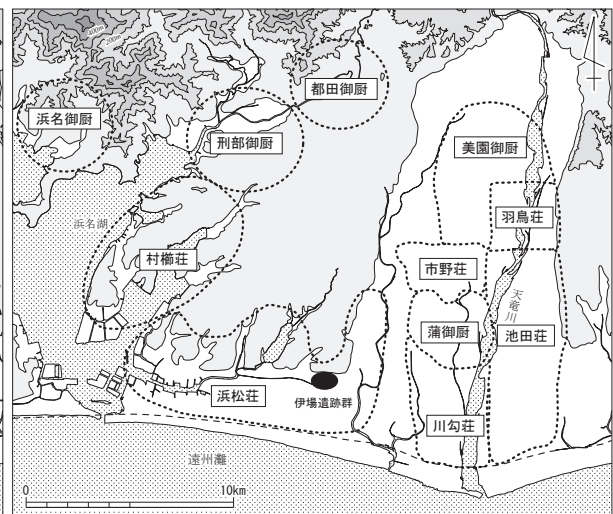


Fig. 8 伊場遺跡群周辺の荘園分布図



伊 場 遺 跡 群		26 戊新畑Ⅰ遺跡	中世	52 苗引Ⅱ遺跡	古代	78 高塚町村中遺跡	古墳～古代
1 梶子遺跡	弥生(中)～近世	27 蜷塚遺跡	縄文	53 苗引Ⅰ遺跡	古代	79 日晩遺跡	古墳～古代
2 中村遺跡	縄文(前)～中世	28 蜷塚古墳群	古墳	54 苗引Ⅳ遺跡	古代	80 増楽町村中遺跡	古墳～古代
3 梶子北遺跡	縄文(前)～中世	29 蜷塚西平遺跡	縄文	55 村前山東遺跡	古墳(後)・平安(初)	81 増楽遺跡	古墳～古代
4 三永遺跡	弥生(中)～中世	30 赤宮神遺跡	奈良	56 村前山遺跡	平安(初)	82 増楽町村北遺跡	古代
5 城山遺跡	縄文(前)～中世	31 小蔵遺跡	古代	57 前山遺跡	縄文(後)～鎌倉	83 井村遺跡	古墳(後)・奈良
6 伊場遺跡	弥生(後)～平安	32 又七遺跡	古墳～奈良	58 神ヶ谷町向山遺跡	縄文	84 東野宮遺跡	古墳～中世
7 九反田遺跡	古墳～中世	33 新古遺跡	古墳～中世	59 明善遺跡	縄文(中)	85 若林町村西遺跡	縄文・古代・中世
8 鳥居松遺跡	弥生(後)～平安	34 向イ平遺跡	縄文	60 作原遺跡	古墳(後)	86 東若林遺跡	古墳(後)～鎌倉
9 暖東遺跡	弥生(後)	35 龍門池遺跡	縄文	61 浦前Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ遺跡	古墳(後)	87 村裏遺跡	弥生・古墳(後)～中世
10 神田遺跡	奈良	36 富塚地蔵平遺跡	古墳	62 浦前Ⅲ遺跡	古墳(後)・鎌倉	88 村東遺跡	古墳(末)～中世
11 高柳遺跡	古代～中世	37 桶田遺跡	古墳・中世	63 浦前Ⅰ・Ⅱ遺跡	古墳(後)・鎌倉	89 八幡山遺跡	中世
12 浅間遺跡	平安	38 東嶋横穴	古墳	64 浦前Ⅶ遺跡	古墳(後)	90 かわら塚遺跡	古墳～中世
13 堀之内遺跡	奈良	39 妙法塚古墳	古墳	65 大平北Ⅰ遺跡	縄文・古墳(後)・鎌倉	91 小沢渡町村中遺跡	奈良～中世
14 旭町遺跡	弥生(後)	40 狐塚古墳	古墳	66 大平北Ⅱ遺跡	古墳(後)・鎌倉	92 小沢渡町村中東遺跡	奈良～中世
15 浜松城跡	中世～近世	41 東平遺跡	縄文	67 大平北Ⅲ遺跡	中世	93 新橋町村中遺跡	奈良・中世
16 作左山横穴	古墳	42 神ヶ谷町山の神遺跡	縄文(後)	68 大平遺跡	古墳(前・後)	94 旧大通院境内遺跡	中世
17 浜松城内古墳	古墳	43 神ヶ谷町中平遺跡	奈良	69 入野町村前遺跡	中世	95 堤町村東遺跡	古墳・奈良・中世
18 曳馬野古墳群	古墳	44 神ヶ谷町東遺跡	縄文	70 入野古墳	古墳(中)	96 米津町村中遺跡	奈良・中世
19 高林東遺跡	古墳～奈良	45 根川山遺跡	縄文	71 八反田遺跡	古墳・古代	97 新橋町村東遺跡	古墳～中世
20 白山神社古墳	古墳	46 根川山古墳群	古墳	72 浜地遺跡	古墳	98 田尻遺跡	古墳・奈良・中世
21 住吉B古墳群	古墳	47 根川遺跡	縄文・古墳	73 大島遺跡	古代	99 田尻古墳群	古墳(後)
22 歌謡遺跡	縄文	48 安行平遺跡	縄文	74 高塚遺跡	縄文・奈良～中世	100 白羽貝塚	中世
23 東平遺跡	弥生(後)	49 大野遺跡	弥生	75 八王遺跡	奈良～中世	101 西脇貝塚	中世
24 下山田遺跡	弥生(中)～中世	50 天の峰遺跡	弥生(後)・鎌倉	76 高塚町村西遺跡	奈良～中世	102 大畑貝塚	中世
25 戊新畑Ⅱ遺跡	中世	51 苗引Ⅲ遺跡	弥生	77 高塚町村東遺跡	奈良～中世	103 浜松城下町遺跡	奈良～近世

Fig. 9 梶子遺跡周辺の遺跡分布図

4 梶子遺跡の調査歴

梶子遺跡は、伊場遺跡群を構成する遺跡の一つである。伊場遺跡群は、伊場・三永・中村・梶子北・城山・九反田・啜東・鳥居松・梶子遺跡を総称した縄文時代から近世までの複合遺跡群である。本遺跡を含めた範囲は東西 2.3 km、南北 1.2 km に及び、これまでの調査成果の蓄積によりそれぞれが密接にかかわり合った遺跡であることが明らかになってきている。

梶子遺跡の調査は、1962 年に国鉄浜松工場内の工事現場から弥生土器が出土し、浜松市博物館に持ち込まれたのが発端となり、1976 年に浜松市教育委員会主体で 1 次調査が行われた。当初は、国鉄浜松工場内遺跡と称されていたが、国鉄民営化を契機に遺跡西部の小字名から梶子遺跡と称されるようになった。発掘調査は主に工事施設の建設に伴い断続的に行われ、今回の調査を合わせて 23 回の本発掘調査が行われている。ただし、発掘調査次数の付与が当初は JR 東海浜松工場内の調査に限っていたため、1983 年 11 月と 1994 年 12 月に行われた市道沿いの調査には付与されていない。

主な調査成果として、弥生時代では後期前半の環濠集落が確認されている。居住域を囲む環濠の規模は、現在確認されている範囲で東西 550 m、南北 100 m に及ぶ。環濠内には梁行 1 間、桁行 3 間の規格に則った多数の掘立柱建物が検出され、高床式倉庫群と考えられている。17 次調査では方形周溝墓を確認した。遺物は弥生時代後期の良好な土器一括資料が出土しており、伊場遺跡や鳥居松遺跡から出土したものを含めた資料検討から当該期の西遠江の土器編年の大綱が示されている。その他、7 次調査では後期の土坑から銅鏃と銅鐸片、15 次調査では後期の環濠から絵画土器が出土している。銅鐸片は近畿式銅鐸の飾耳片、絵画土器は鹿を描いたもので、これらは当該期の集落における祭祀儀礼を知る上で貴重な史料である。古代では 9・11・13 次調査において 7 世紀代の掘立柱建物、16 次調査において 10 世紀前半の井戸などが検出されている。遺物は 6 次調査において平行する 2 条の溝から木簡、9・13・18・21 次調査では伊場大溝から 7 世紀から 9 世紀にかけての木簡や墨書土器の文字資料が豊富に出土し、遺跡近傍に所在したと推定される敷智郡家に関する多くの情報が得られている。

Tab. 2 梶子遺跡における発掘調査一覧

遺跡調査名	調査期間	調査面積	調査主体	主な時代	報告書	発行年
梶子 1 次	1976. 12	40 m ²	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内発掘調査略報（非公式刊行物）	1976
梶子 2 次	1977. 1 ～ 1977. 5	200 m ²	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内発掘調査略報Ⅱ	1977. 6
梶子 3 次	1978. 2 ～ 1978. 3	288 m ²	浜松市教育委員会	弥生・古墳	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅲ	1978. 3
梶子 4 次	1978. 12 ～ 1979. 2	520 m ²	浜松市教育委員会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査概報Ⅳ	1979. 9
梶子 5 次	1979. 10 ～ 1979. 12	360 m ²	浜松市遺跡調査会	弥生	国鉄浜松工場内遺跡発掘調査報告書Ⅴ	1980. 1
梶子 6 次	1982. 5 ～ 1982. 12	1747 m ²	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内（梶子）遺跡第Ⅵ次発掘調査概報	1983. 5
梶子 7 次	1982. 10 ～ 1983. 3	1401 m ²	浜松市遺跡調査会	弥生～平安	国鉄浜松工場内遺跡第Ⅶ次発掘調査概報	1983. 12
梶子 1983	1983. 11 ～ 1984. 2	233 m ²	浜松市遺跡調査会	弥生	梶子遺跡調査概要	1984. 3
梶子 8 次	1990. 8 ～ 1990. 12	2493 m ²	（財）浜松市文化協会	弥生・奈良	梶子遺跡Ⅷ	1991. 12
梶子 9 次	1992. 7 ～ 1992. 12	2000 m ²	（財）浜松市文化協会	弥生～平安・戦国	梶子遺跡Ⅸ	1994. 3
	1993. 3 ～ 1993. 4	40 m ²	浜松市教育委員会		梶子遺跡Ⅸ付録	1994. 5
梶子 1994	1994. 12 ～ 1995. 1	31 m ²	浜松市教育委員会	弥生～奈良	梶子遺跡（その 2）	1997. 5
梶子 10 次	2001. 1 ～ 2002. 8	2252 m ²	（財）浜松市文化協会	弥生～平安	梶子遺跡Ⅹ	2004. 2
梶子 11 次	2008. 6 ～ 2008. 11	1195 m ²	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡 11 次	2010. 3
梶子 12 次	2008. 5	188 m ²	（財）浜松市文化振興財団	弥生～鎌倉	梶子遺跡 12 次	2008. 9
梶子 13 次	2010. 5 ～ 2010. 11	1606 m ²	（財）浜松市文化振興財団	弥生～戦国	梶子遺跡 13 次	2012. 3
梶子 14 次	2011. 6 ～ 2012. 3	1871 m ²	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡 14 次	2013. 3
梶子 15 次	2012. 4 ～ 2013. 3	4399 m ²	浜松市教育委員会	弥生～戦国	梶子遺跡 15 次	2014. 3
梶子 16 次	2013. 4 ～ 2014. 3	4754 m ²	浜松市教育委員会	縄文～近世	梶子遺跡 16 次	2015. 3
梶子 17 次	2014. 4 ～ 2015. 3	2016 m ²	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡 17 次	2016. 3
梶子 18 次	2015. 4 ～ 2016. 4	1656 m ²	浜松市教育委員会	弥生～中世	梶子遺跡 18 次	2017. 3
梶子 19 次	2016. 3 ～ 2017. 7	6573 m ²	浜松市教育委員会	弥生～平安	本報告書	2019. 3
梶子 20 次	2017. 10 ～ 2018. 1	70 m ²	浜松市教育委員会	平安～中世	本報告書	2019. 3
梶子 21 次	2014. 10 ～ 2015. 1	498 m ²	浜松市教育委員会	弥生・奈良・平安	梶子遺跡 21 次	2015. 3

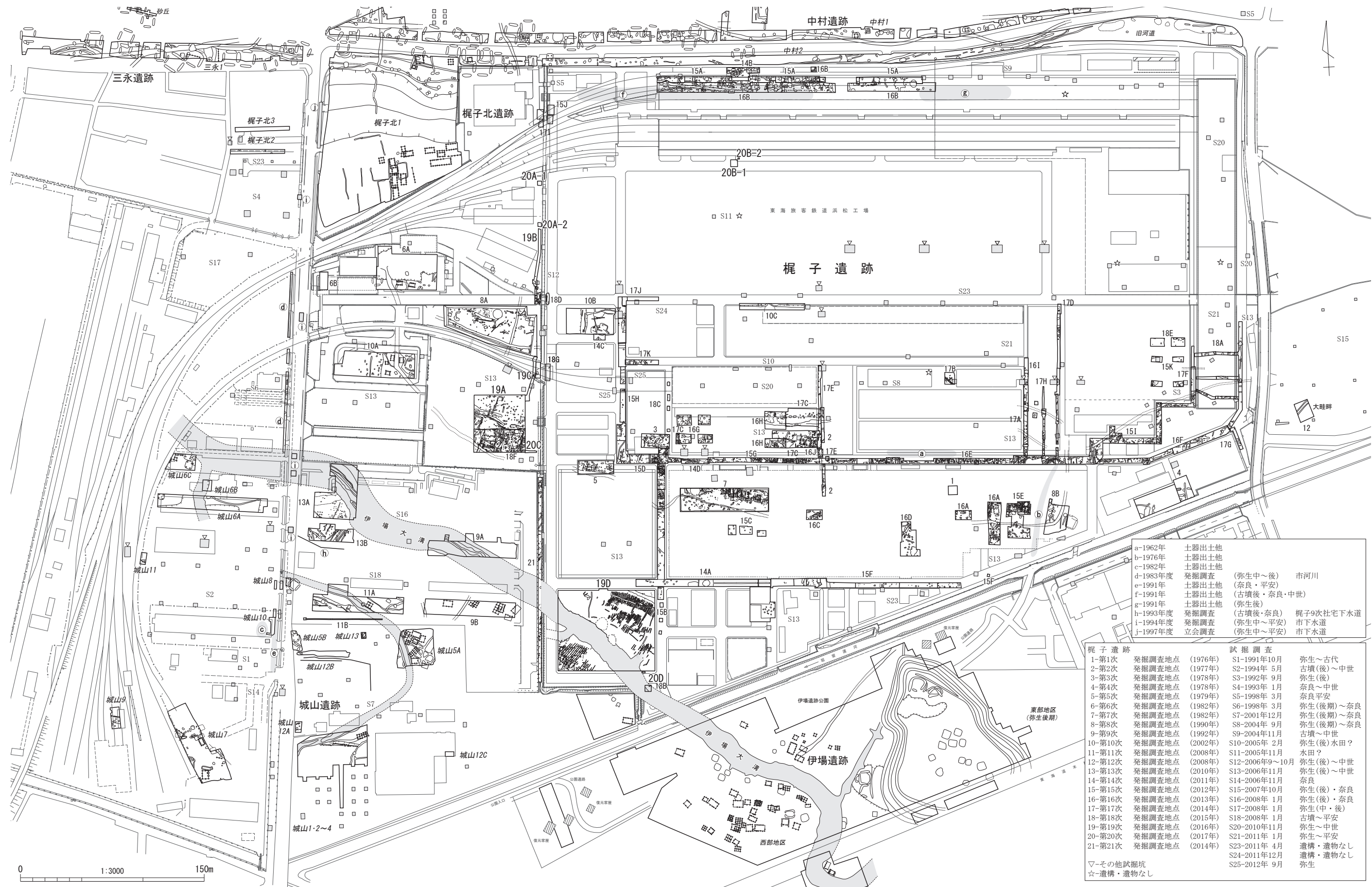


Fig. 11 梶子遺跡 全体図

5 確認調査・工事立会

(1) 確認調査

概要 浜松工場建替に伴う本発掘調査が進行する中で、調査予定箇所のうち、工場北側の主棟一帯については、既設の建物や施設の存在により、埋蔵文化財の埋没状況が明確にできていない範囲が存在した。このため、埋蔵文化財の有無と埋没状況を確認するための確認調査を実施した。調査は既設建物の解体に合わせて、2017年4月13日・5月24日・9月20日の3回に分けて計8箇所の調査坑を設定して実施した。

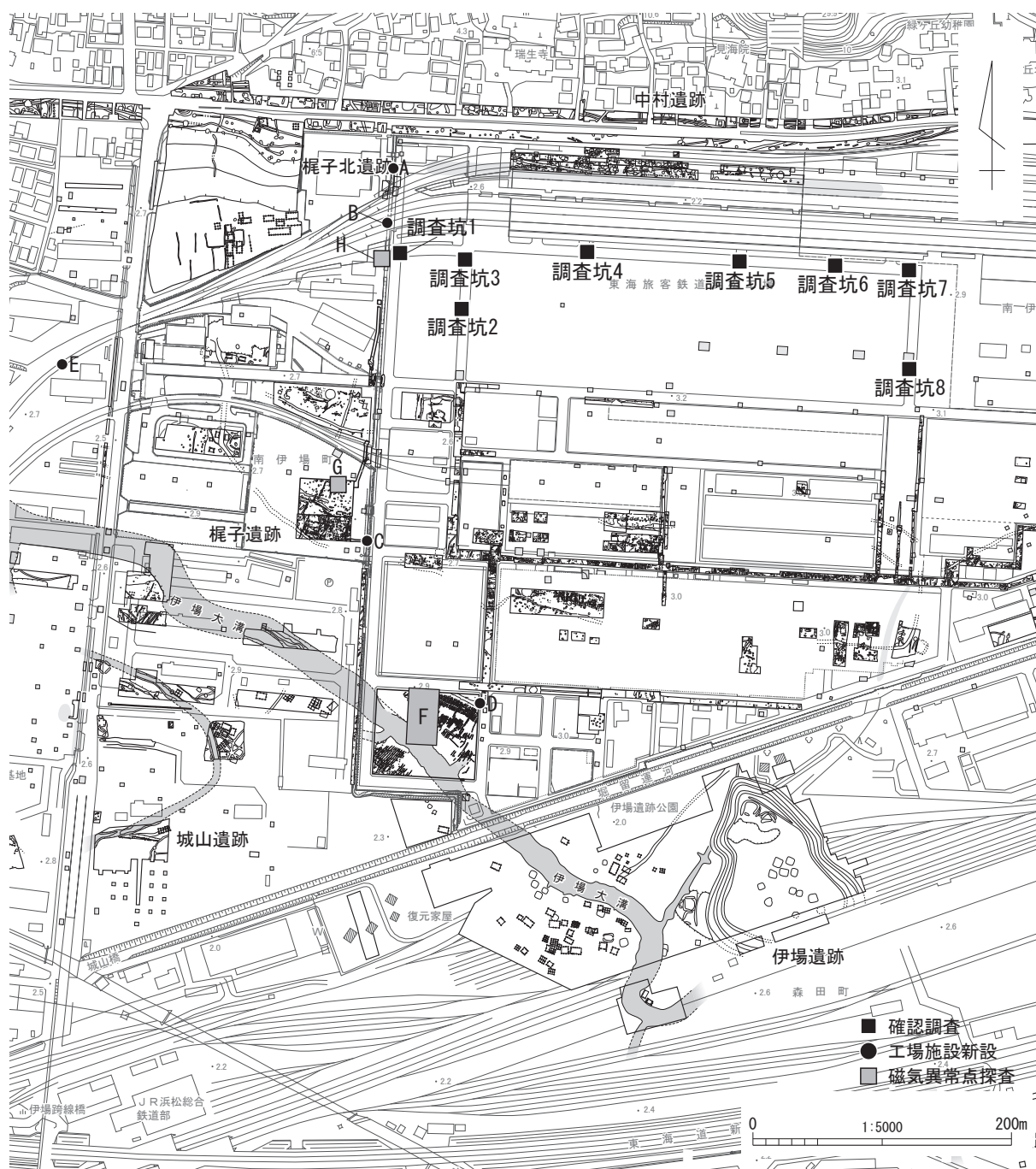


Fig. 12 確認調査・工事立会箇所

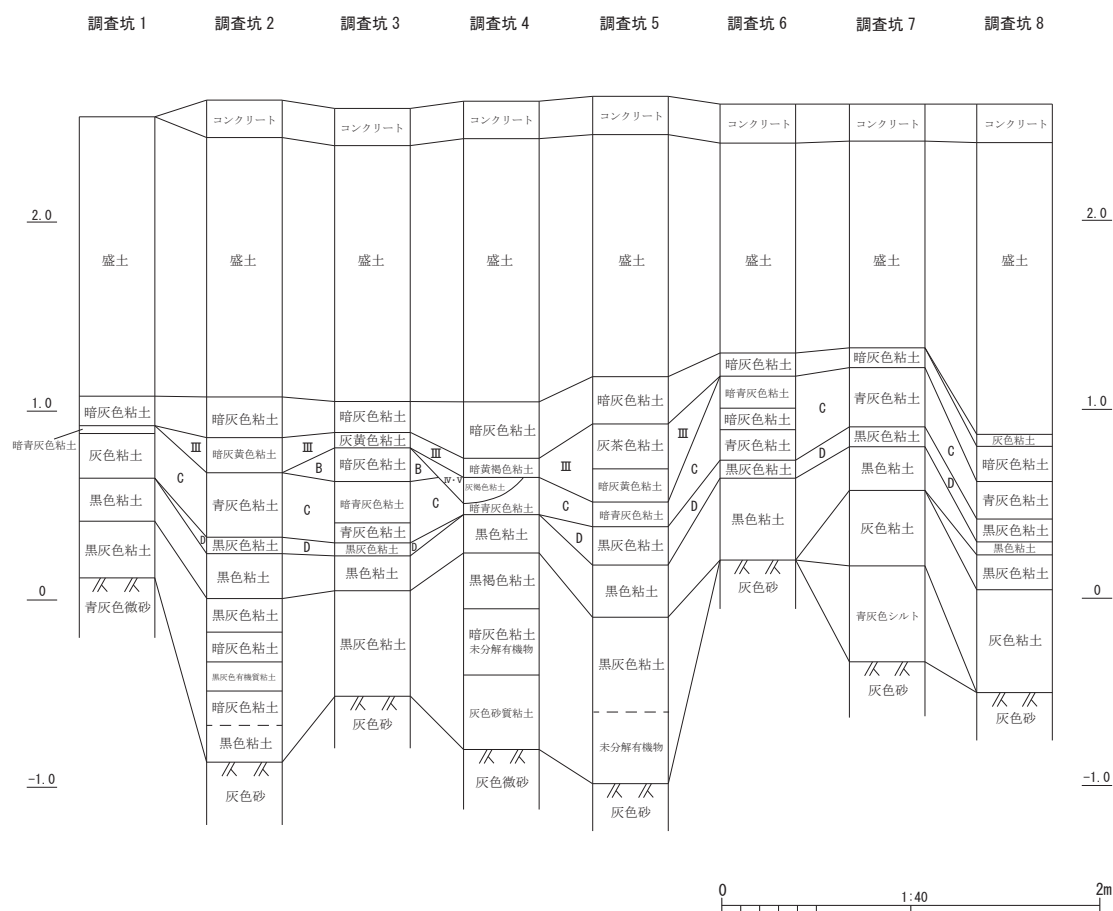


Fig. 13 確認調査土層柱状図

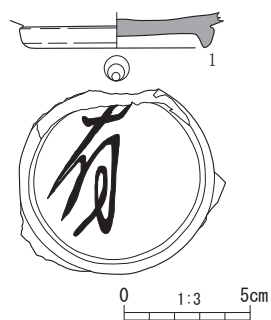


Fig. 14 確認調査出土遺物

調査坑 2 と調査坑 3 は、おおむね堆積状況が共通しており、旧表土の下で暗灰黄色ないし灰黄色の堆積を確認し、その下で C 層に相当する青灰色粘土、D 層に相当する黒灰色粘土の堆積を確認した。下層は黒色粘土と黒灰色粘土の堆積で、基盤層は灰色砂層であった。

調査坑 4 では、旧表土の下で未分解の有機物を多く含む暗茶褐色粘土の堆積を確認した。梶子北大溝のⅢ層に類似した堆積である。また、C 層に相当する暗青灰色粘土との間において、緩やかに傾斜した灰褐色粘土の堆積を確認し、この層中から墨書土器が出土した。梶子北大溝におけるⅣ・

V層に類似した堆積である。下層は無遺物層の黒色粘土や、未分解有機物を多く含む暗灰色粘土の堆積が続き、基盤層の灰色砂層へと至っていた。

調査坑5においては、調査坑4で検出された梶子北大溝と類似した堆積は確認できず、下層は未分解の有機物を多量に含む黒灰色粘土の堆積が続き、基盤層である灰色砂層へ至っていた。また、調査坑6では、基盤層である灰色砂層の標高が高く、調査坑5と比較して1.2 mほど高くなっていた。他の調査坑と比較して基盤層の標高が高いが、遺構や遺物は検出できなかった。

東端の調査坑7及び調査坑8では、盛土や旧表土の下はB層に相当する暗灰色粘土、C層に相当する青灰色粘土、D層に相当する黒灰色粘土の順で堆積していた。下層は未分解の有機物を多く含む黒色粘土の堆積は共通していたが、その下は若干異なっており、調査坑7では基盤の灰色砂層の上で青灰色シルトの堆積を確認した。

出土遺物 1は調査坑4から出土した墨書土器である。灰釉陶器の碗の底部に「有」の墨書が記されている。特徴から9世紀末葉から10世紀前葉の遺物と考えられる。

調査結果 調査坑4を除き遺構と遺物は検出されず、工場主棟一帯は遺構と遺物の密度が低いことが明らかになった。調査坑4においては、明確な遺構は検出できなかったが、梶子北大溝の埋土に類似した堆積を確認し、古代の遺物が出土した。北側の15次調査A区及び16次調査B区においては、浜堤列の砂丘砂層上に遺構が広がっていたことから、梶子北大溝はこれらの調査区より南側に存在すると考えられ、調査坑4周辺は梶子北大溝の南岸付近に位置すると推定される。

(2) 工事立会

概要 浜松工場建替に伴う本発掘調査と並行して、工場内の各所において工事立会を実施した。2016年度から2018年度における工事立会は、工場内の施設新設工事に伴うものと、不発弾探査における磁気異常点探査に伴う掘削工事を対象に実施した。合計12箇所の地点で工事立会を実施し、一部で遺構と遺物を確認したが、埋蔵文化財への影響が無いと判断された地点では、最小限の掘削として保全を行った。

橋梁設置 浜松工場内を南北に横切るように水路（鴨江8号水路）が設置されているが、工場の建替工事と並行して、水路改修工事も順次実施された。工場内においては、新設する水路と既設の水路の位置や規模がほぼ同じであるため、本発掘調査の対象とせず、工事立会を行って工事箇所の状況を確認した。また、水路を跨ぐ橋梁については、橋台部分の構造によって本発掘調査の可否を判断し、工事内容に応じて、工事立会によって対応した。

浜松工場体育館の東側において、鴨江8号水路を跨ぐ橋梁の設置工事が実施されたため、工事立会を実施した。工事立会の実施箇所は、梶子遺跡15次調査J区の北側（A地点）である。立会の結果、旧表土の下で未分解の有機物を多量に含む黒色粘土の堆積を検出した。当該地は梶子北大溝の北岸付近に位置しており、堆積土の特徴などから、梶子北大溝の範囲内に含まれると考えられる。橋台の基礎構築による掘削は最小限の範囲に留めたため、遺物は出土しなかった。

地下埋設管設置 浜松工場内においては、工業用水、雨水排水、汚水排水などの地下埋設管の設置が各所で実施されているが、工事規模が小規模なものについては工事立会で対応した。

立会箇所は、工場北側の引込線下の雨水排水管新設箇所（B地点）、工場西側の配水管新設箇所（C地点）、工場南側の雨水排水管新設箇所（D地点）である。B地点では、立会の結果、未分解の有機物を多量に含む暗茶褐色粘土の堆積を確認した。掘削が基盤層まで到達しなかったため、下層の状況は確認できなかったが、堆積土の特徴や立会箇所の位置関係から梶子北大溝の南岸付近に位置すると推定される。C地点は、18次調査F区の東側に位置する。鴨江8号水路の伏越し部分について立会を実施し、既設の水路部分については既に攪乱を受けていたが、水路脇は良好に遺物包含層が残存しており、弥生時代後期の遺構と遺物を検出した。D地点は15次調査B区と19次調査D区に間に位置する。立会の結果、弥生土器と土師器が少量出土したが、遺構は確認できなかった。

架線支線設置 浜松工場には、東海道新幹線の本線から工場に車両を進入させる引込線が設置されているが、引込線の敷地内において架線に支線を設置する工事が行われたため、工事立会を実施した。支線基礎設置のために掘削した箇所を確認したところ、表層は厚い盛土層で覆われていたが、盛土下の粘土層中において、D層に相当する黒灰色粘土の堆積を確認し、弥生時代後期の土器が出土した。掘削範囲が狭小なため、遺構は確認できなかったが、一帯に弥生時代の遺物包含層が良好に残存していると考えられる。

磁気異常点探査 浜松工場内ではこれまでに複数箇所において、太平洋戦争中に航空機から投下された爆弾や、洋上の艦船から撃ち込まれた艦砲弾の一部が発見されている。工場建



Fig. 15 工事立会の状況（C地点）



Fig. 16 工事立会の状況（E地点）

替工事に先立って地下の不発弾探査が実施された結果、多数の磁気異常点を確認した。異常点の多くは工場の既設構造物であったが、不発弾の有無を目視確認するために直接探査が必要な箇所があり、埋蔵文化財への影響が想定される地点について工事立会を随時実施した。

立会箇所は、工場南側の貯留槽新設箇所（F地点）、工場西側の貯留槽新設地区（G地点）、工場北側の地下埋設管新設地区（H地点）である。F地点は19次調査D区と同一地点である。3箇所の異常点検出箇所を立ち会ったが、いずれも艦砲弾着弾の衝撃により、基盤層まで攪乱を受けていた。遺構は確認できず、遺物は攪乱土中から弥生土器の破片が少量出土したのみであった。G地点は19次調査A区と同一地点であり、F地点と同様に艦砲弾着弾の衝撃で基盤層まで攪乱を受けていたため、遺構や遺物は確認できなかった。H地点は、20次調査A区と同一地点である。伊場C層に相当する灰色粘土層まで掘削したが、遺構や遺物は検出できなかった。

第2章 調査成果

1 基本層位

梶子遺跡は、第1浜堤列と第2浜堤列との間に形成された浜堤列間低地に位置する。基盤砂層は地中深く、上層は厚い粘土の堆積に覆われている。19・20次調査の各調査区は南北に約390 m、東西に約160 mの広範囲に及び、各調査区の距離が約30～140 mの間隔がある。土層の堆積状況は、ピート層と称される黒色系有機質土（腐植土）層が顕著に確認されなかった19次A区、19次B-2区、20次A-1区、20次A-2区と各層の標高が相対的に低い19次C-1区を除き概ね共通する。

南北方向で基本層序を概観すると、北寄りの20次A-1区、20次A-2区、19次B-2区で観察した上層の1～3層は、標高約1.0～0.5 mで観察しており灰色～褐色～黒色系の粘質土層。南寄りの19次D区で観察した上層の13・14層は、標高約0.5～-0.3 mで観察しており灰色系の粘質土層、15層は灰色系シルト層の堆積であった。上方の13・14層は、伊場遺跡B層、15層を挟んで下方の13・14層は、伊場遺跡D層に相当すると考えられるが明瞭ではない。

20次D区では、標高0.5 m前後の13層（伊場遺跡B層）まで達する液状化跡（砂脈）を確認している。19次B区、19次C区で観察した6層は標高約0.6～0.2 mで褐灰色粘質土層となり場所によりマンガン分を含む。この6層は伊場遺跡B層に対応すると考えられる。

19次B-2区で標高0.4 mの7層、19次C区で標高0.0 mの10層、19次A区で標高0.3 mの11層、19次D区の10層は標高-0.1～-0.3 mの10層は、灰褐色～黒褐色系の粘質～粘土層で伊場遺跡D層に相当すると考えられる。19次C区、19次D区で標高-0.2～-0.3 mの12層は黒色系有機質土（腐植土）層で所謂、鍵層となるピート層であり、19次D区でのみ中間にカワゴ平火山灰層（KP）の堆積が極薄く認められた。カワゴ平火山灰層は約3,000年前の天城山の大噴火により堆積した火山灰層であり、時期認定の鍵となる層である。カワゴ平火山灰層を含む堆積は、伊場遺跡群内の低地部分において認められる層位であり、この層以下は無遺物層となる。

19次B区の標高0.3 m、19次C-1区の標高-0.3 m、19次A区の標高0.1 mで観察した8層は、灰色～青灰色微砂層で無遺物層（基盤層）となる。19次D区の標高-0.4 m前後で観察した灰色粘土層以下も同様に無遺物層（基盤層）となる。微砂層以下の層位は若干堆積状況や層厚に違いがあるものの、有機質の強い黒色系粘土と、灰色系粘土の堆積が交互に続いたのち、基盤砂層に至る。

南北方向の基本堆積は緩やかに南に下る傾向があるが、19次C-1区で極端に各層の標高が低くなる。19次B-2区から19次C-1区まで俯角0度17分11秒、約100 mで-0.5 m程の比高差に落ち込み、19次A区に向かっては、仰角0度24分9秒、約37 mで+0.26 mの比高差で上昇する。さらに、19次D区に向かい俯角0度9分59秒、約141 mで-0.41 mの比高差に下る。第1浜堤列と第2浜堤列の丁度中間に位置しており低地であったことが判る。19次A区付近は浜堤列内の微高地となり、弥生時代の遺構は主にこの微高地上に展開している。そして、最南の19次D区へ向かい緩やかに下る。東西方向には、2箇所の調査区でしか比較できないが、東方向へ各層で俯角0度6分26秒の傾斜で緩やかに東に下がり約160 mで-0.3 m程の比高差となる。20次B-1区では、

1 基本層位

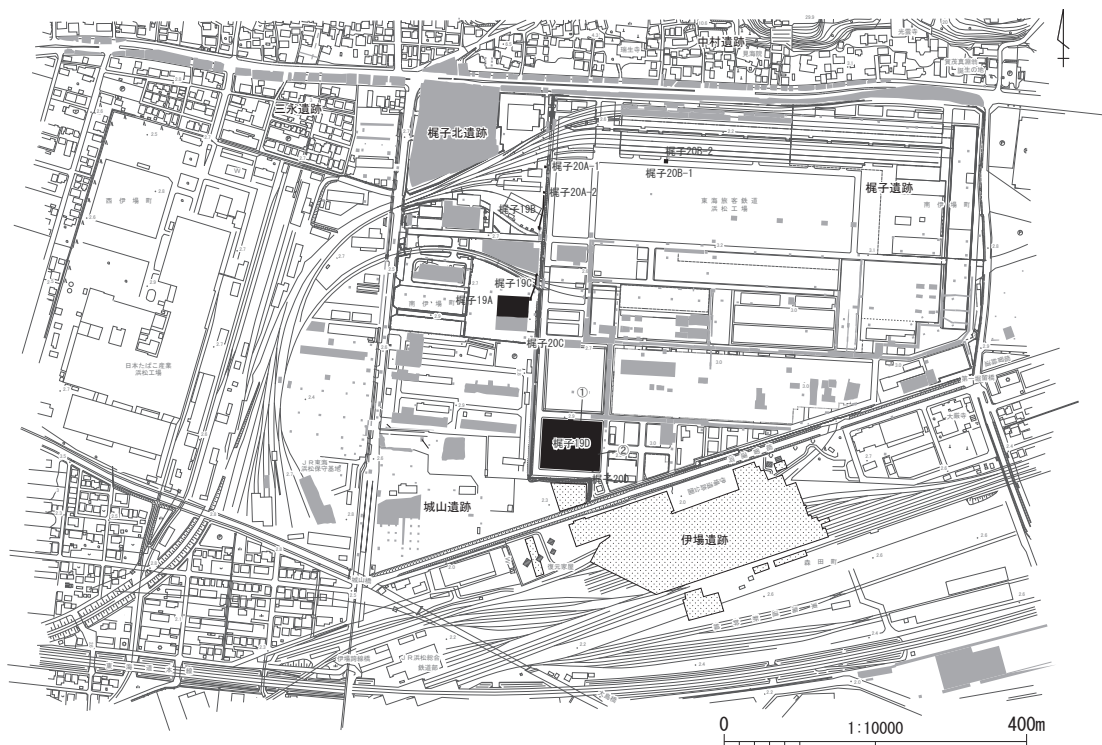


Fig. 17 基本層序位置図

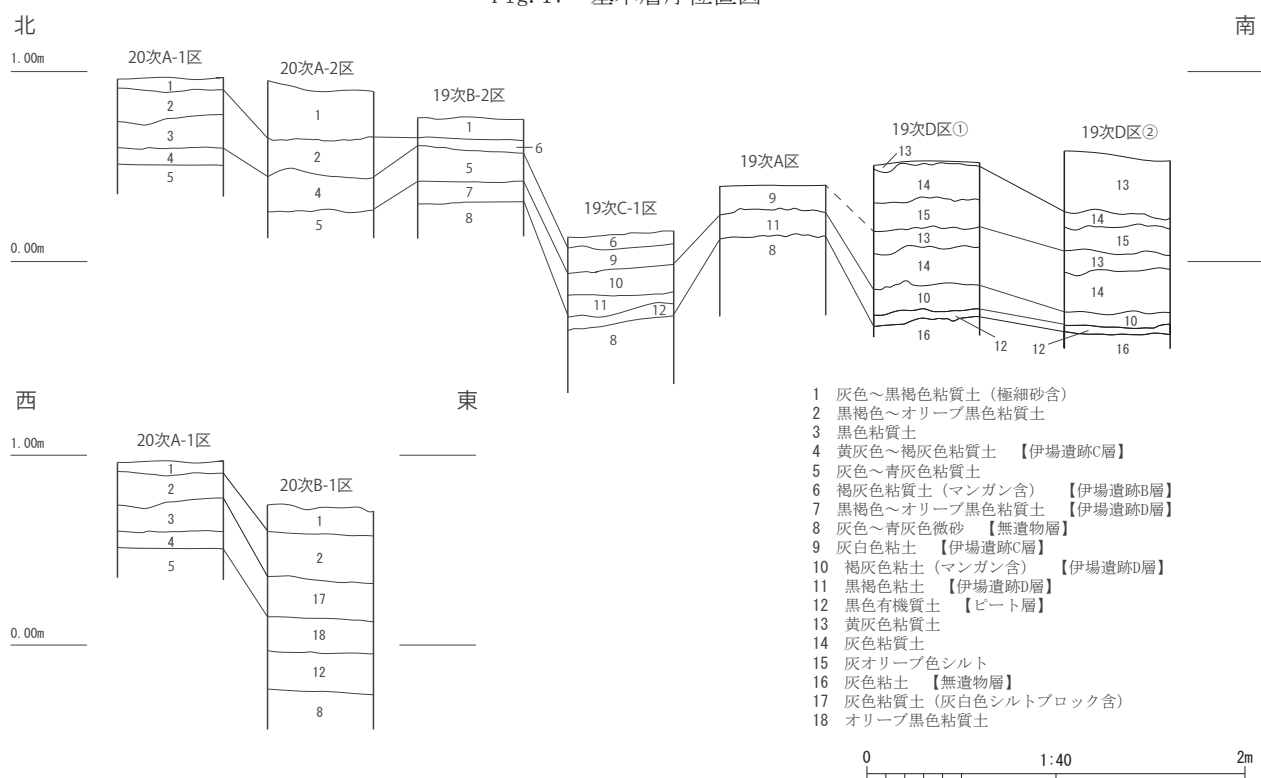


Fig. 18 土層柱状図

標高 0.0 m 前後で黒色系有機質土（腐植土）層を確認している。

これらを踏まえて、想定すると梶子遺跡の地形は、総体的には第2浜堤列の東端である南東方向に向かって低くなる傾向が窺える。さらに、第1浜堤列と第2浜堤列の間でも微高地と低地が存在しており、遺跡の粗密もそれに比定できると考えられる。

2 A区の調査

(1) 概要

A区は、梶子遺跡の中央西寄りに位置しており、遺跡の範囲内の第1浜堤列と第2浜堤列の間に形成された浜堤列間に立地する。18次調査のF-1区に北接する。つまり、19次調査A区と18次調査F-1区は同一の調査地となる。また、19次調査のC区が北東隅に接する。調査区は南北にAY34～AY38、東西にAY34～BD34グリッドの範囲にあり、南北方向に27.8 m、東西方向に41.8 mの長方形であり、調査面積は1,162 m²である。

(2) 基本層位

A区および隣接するC区の基本層序は大きく7層に識別される。1層は灰色系粘土である。場所により灰色、黄灰色、灰褐色に斬位的に変色する部分もある。18次調査の4層に相当する。2層は褐灰色粘土でマンガン分を含み、18次調査の5層、伊場B層に相当するがA区ではこの層の堆積はなく、北東に接する19次調査のC区において堆積が確認されている。3層は灰白色粘土である。18次調査の6層、伊場C層に相当する。4層は褐灰色粘土、18次調査の7層に相当する。5層は黒褐色粘土、18次調査の7層に相当。4・5層（18次調査7層）はともに伊場D層に相当する。6層は黒色系の有機質土であるが、場所により黒褐色から褐灰色の粘土化している。18次調査の8層に相当。所謂、ピート層（泥炭層、腐植土層）である。7層は青灰色微砂である。18次調査の10層に相当する。4・5層の堆積は東壁断面には認められず、北壁の西寄りでは堆積が確認された。無遺物層（地山）と考えられる7層は北西隅に向かい約0.45 m低くなる。つまり、南東から北西方向に0.45 mの比高差があり、北西側が低地となると考えられる。

遺構は5層（黒褐色粘土）上面と7層（青灰色微砂）上面から掘り込まれる。2時期の遺構面が存在する。遺構埋土のほとんどは、褐灰色粘土に灰白色シルトがブロック状に混ざる。

Tab. 3 19次A・C区 18次F-1区 土層対応表

19次調査			18次調査		伊場遺跡
A区 土層番号	C区 土層番号	土層	F-1区 土層番号	土層	層位
1	1	灰色粘土	4	褐灰色～灰色～にぶい黄色粘土	
	2	褐灰色粘土	5	褐灰色粘土	B
3	3	灰白色粘土	6-1, 6-2	灰色粘土	
4	4	褐灰色粘土	6-3	灰黄色～褐灰色粘土	D
5	5	黒褐色粘土	7	褐灰色粘土	D
6-1	6	黒色有機質土	8	黒褐色粘質シルト～褐灰色粘土	
6-2		黒褐色粘土	8'	黒褐色粘土～黒色有機質土	
7	7	青灰色微砂	10	青灰色微砂	基盤層

(3) 遺構と遺物

A区で検出した遺構は、溝状遺構 27 条、土坑 109 基、小穴（ピット）43 基である。検出面や出土遺物、埋土の状況から多くの遺構は弥生時代後期と考えられる。土坑、小穴（ピット）は調査区全体に散在するが北東隅と北西隅は疎らになる傾向がみられる。遺構の平面形状は円形、楕円形、不整円形、長方形と様々なものがあるが、その形状や配置から性格を推察できるものはほとんどみられない。

溝状遺構は主軸を N-15 ～ 26° - W、つまり東西より少し北へ振るもの。N-49 ～ 86° - E、つまり南北より東へ振るものの 2 群に大別できる。両端が調査区外に延びるものはなく、片端または両端が調査区内で収束している。すべての溝状遺構において、底面の標高は、北から南方向、もしくは西から東方向に低くなるか、または平坦である。

Tab. 4 19 次 A 区 18 次 F-1 区 遺構対応表

梶子遺跡	19 次調査	18 次調査
グリッド	A 区	F-1 区
AY36・AY37	SD22・SD24	-
BA36・BA37	SD09	SD32
BA37・BB37	SD07	SD05
BC37	SK12	SK10
BC37	SD01	SD13
AZ37・BA37	-	SD42

①溝跡

SD01 (Fig. 20) 調査区南東隅の BC37 グリッドに位置する。18 次調査の SD13 と同一の遺構と考えられ、18 次調査の SK14 に切られる。

SD07 (Fig. 20) 調査区南東端の BA37・BB37 に位置する。18 次調査の SD05 と同一の遺構と考えられる。図上で合成した法量は、長さ 11.52 m 最大幅 2.08 m、最深部は 18 次調査の SD05 の東寄りに存在しており、0.5 m を測る。主軸は N-88°

- W とほぼ東西方向に延びる。両端はともに収束する。両側縁部にテラス状の段を有しており、19 次調査の SD07 はその北側のテラス状の一部と考えられる。遺物は、埋土中に弥生土器片が散在して出土している。出土した遺物より時期は弥生時代後期と考えられる。

SD16 (Fig. 21) 調査区中央からやや南西寄りの BA36、AZ35、AZ36 グリッドに位置する。北西から南東方向に延びる。僅かに湾曲するが、主軸は概ね N-63° - W にとる。南東端は収束するが、北西端は SK92 に切られておりそれ以上は延びない。さらに北西に SD20 が検出されており、同一の遺構の可能性もある。遺構の重複関係から SD15、SD14、SD16 の順に時代が下る。埋土中からは弥生土器の細片が多く出土している。重複関係と遺物から弥生時代後期と考えられる。

SD19 (Fig. 21) 調査区中央から北西方向の調査区外に延びる。AY35、AZ35、BA35、BA36 グリッドに位置する。主軸は N-68° - W にとる。SD16、SD20、SD21 もほぼ同軸である。遺物の出土はなく、時期等詳細は不明である。

SD20 (Fig. 21) 調査区南西寄りの AY35 グリッドに位置する。SD16、SD19 と同様、北西から南東方向に延びる遺構である。南東端は収束するが、北西端は調査区外へと延びる。主軸は N-72° - W 方向であり、SD16、SD19、SD21 とほぼ同軸である。北側のごく一部を SK102 に切られる。埋土中からは弥生土器の細片が出土しているが、細片のため図示していない。SD16 と同時期の弥生時代後期の所産である。

SD21 (Fig. 22) 調査区南西寄りの AY35、AY36 グリッドに位置する。南東端は収束するが、北西

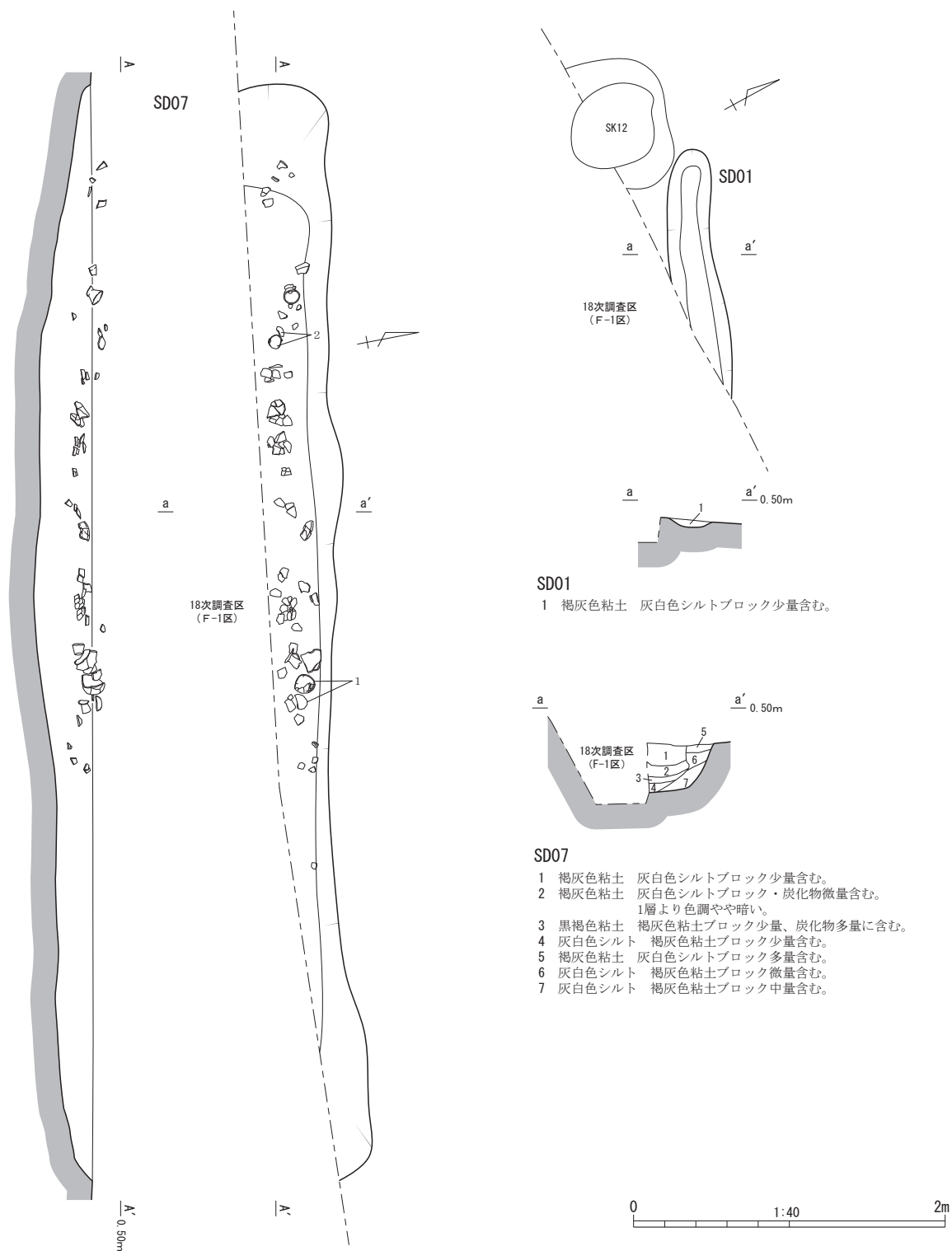


Fig. 20 SD01・07 実測図

端は調査区外へと延びる。主軸はN-72° - Wであり、位置的、規模的、時期的にもSD20とほぼ同じである。

SD26 (Fig. 22) 調査区南西隅のAY36グリッドに位置する。主軸はN-35° - Eであり、北東端は収束するが、南西端は調査区外へと延びる。比較的、しっかり掘り込まれており、深さは0.43mを測る。遺物は埋土中から弥生土器の細片が出土している。主軸がSD07、SD16、SD19、SD20、SD21などと異なり、ほぼ直交方向となるが、遺構の性格や時期差は不明である。

2 A区の調査

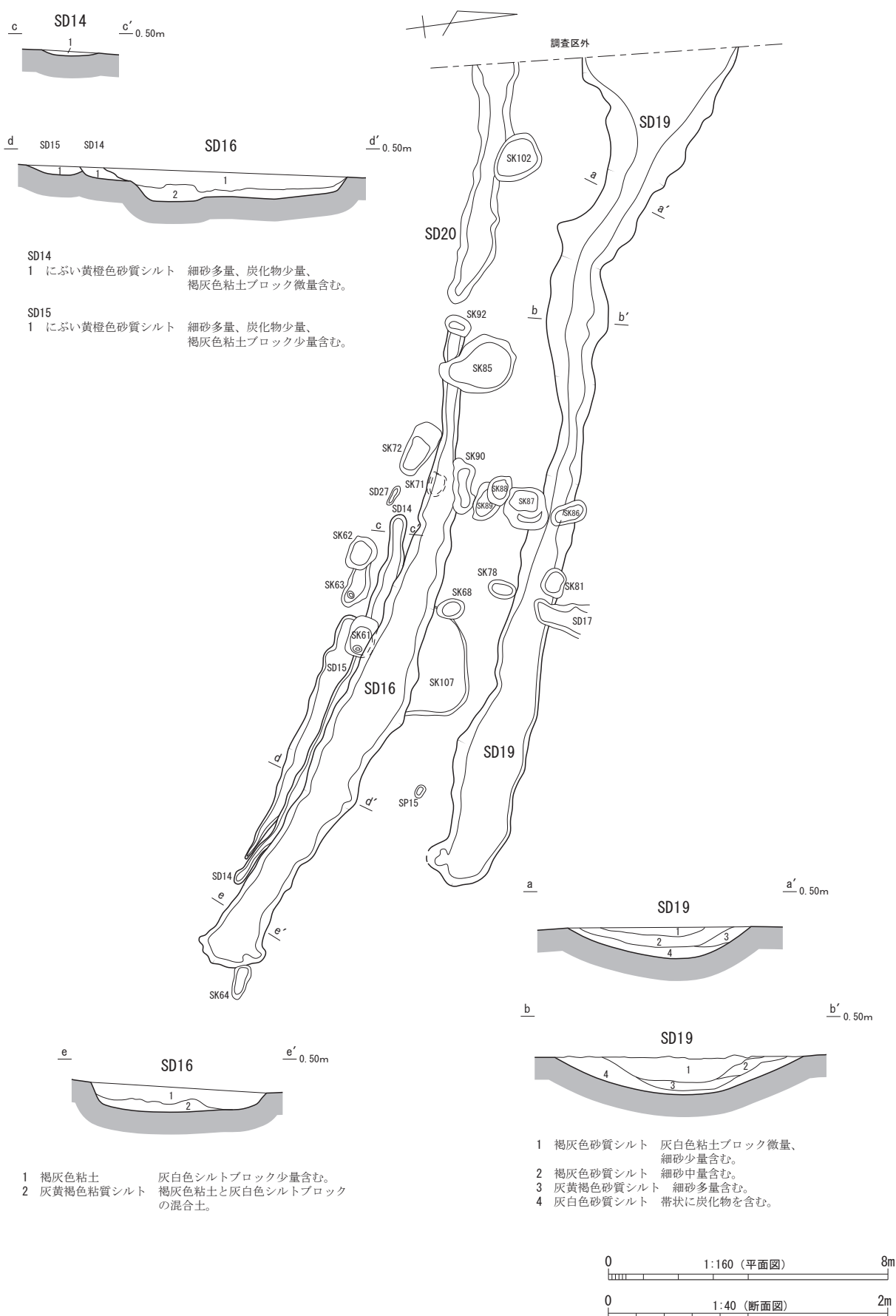


Fig. 21 A区 SD14～16・19 実測図

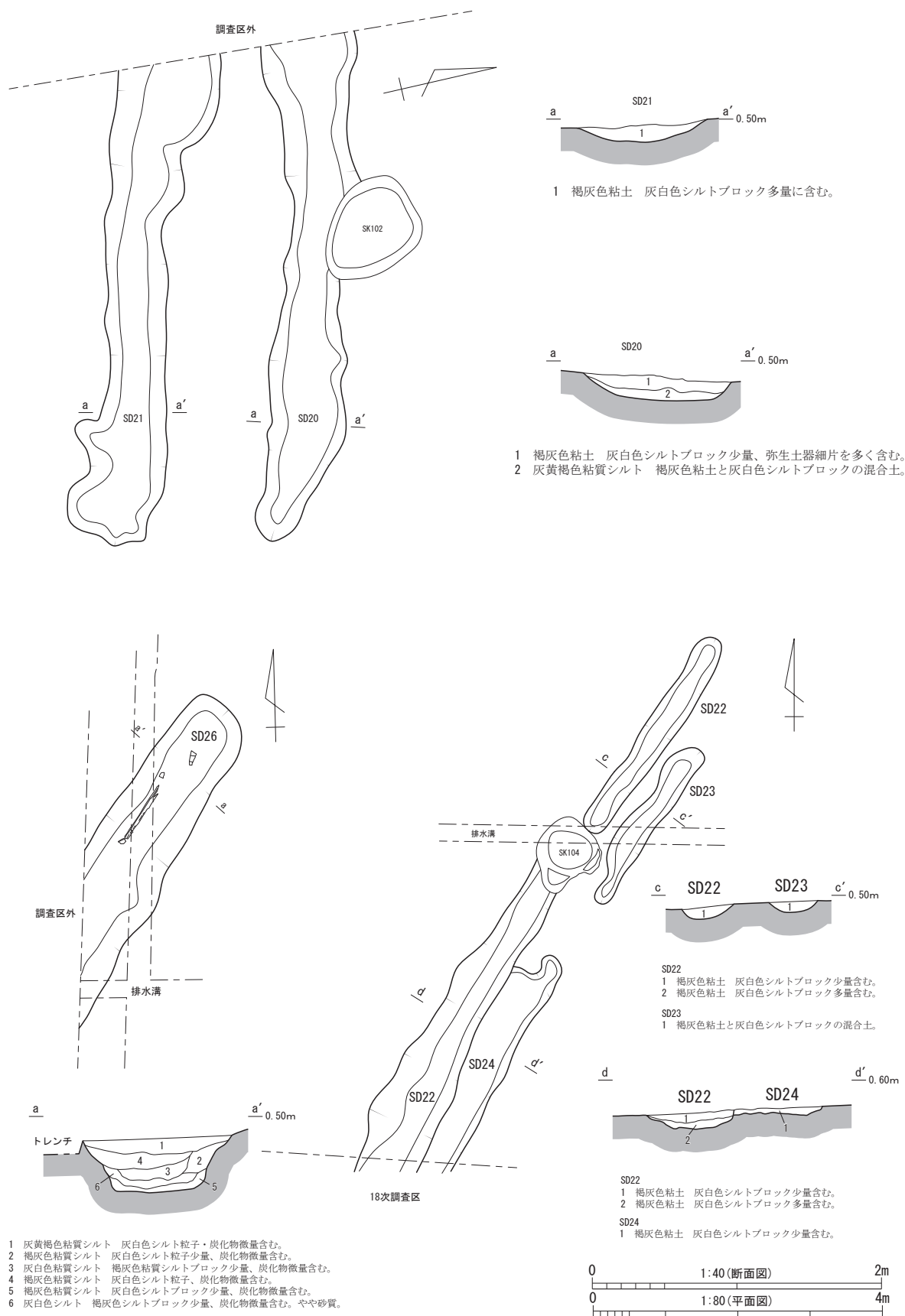


Fig. 22 A区 SD20～24・26 実測図

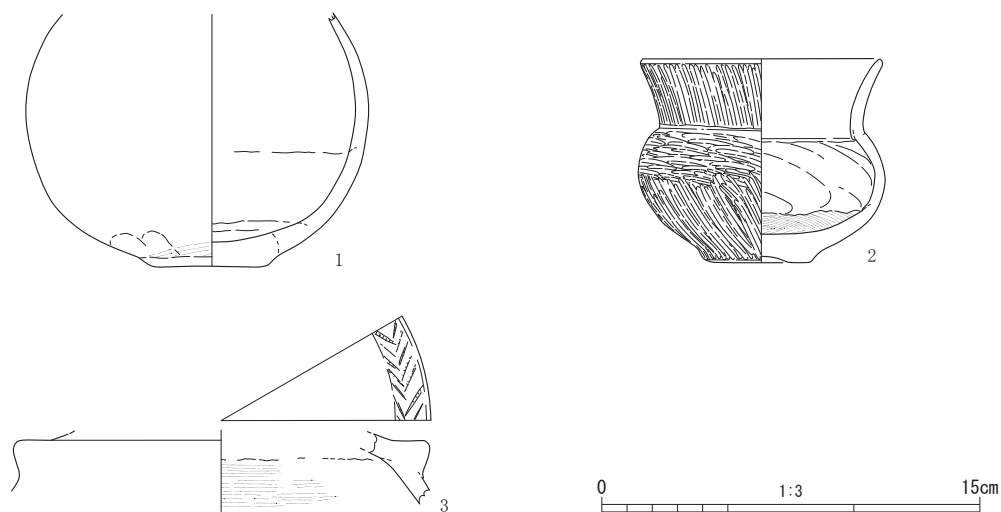


Fig. 23 A区 SD07・15 出土遺物

溝跡から出土した弥生土器を3点図示した。1・2はSD07、3はSD15より出土した。1は壺で内外面ともに摩滅しており、調整は判然としない。2は小型直口鉢で底部中央が凹む。体部中位が張り出し頸部は明瞭に屈曲する。外面は丁寧なミガキ調整が施される。底部等の形状により山中Ⅲ式期に位置付けられる。3は装飾高坏の脚部で、水平に突出する錨状突帯の上面に羽状文が施される。

②土坑

SK13 (Fig. 24) 調査区南東端のBB37グリッドに位置する。平面形は歪な長方形、断面形は皿状を成す。遺物は埋土中から弥生土器の細片が出土している。

SK41 (Fig. 24) 調査区南側やや東寄りのBA36、BB36に位置する。平面形は歪な円形を呈する。深さは、他の土坑のほとんどが0.2 m以下の極めて浅いのに対して、SK41は0.71 mを測る。さらに、断面形は上部の崩落と推察できる若干の広がりがあるがほぼ長方形を成す。埋土は3層に分層できる。断面観察から比較的短期間に埋まったと考えられる。遺物は埋土中から弥生土器の細片、砥石が出土している。

SK49 (Fig. 24) 調査区中央南側のBA36グリッドに位置する。南東側をSD10に切られ、南側はSK50を切る。つまり、SD10、SK49、SK50の順に古くなる。法量は、長さ3.31 m、最大幅0.97 m、最深部の深さ0.57 mを測る。主軸はN-68° - Wにとる。平面形状的には溝状遺構に属するが、北西側と南東側にテラス状の段を有していることから土坑として扱った。平面形は歪な長方形、幅の断面形は逆台形状を成す。遺物は土坑内の埋土上半からほぼ均一に出土しているが、最深部に集中する傾向がある。土器は一括性の高い弥生土器22点と敲石1点を図示した。北東寄りのテラス状の底面付近より木製品が1点出土しているが遺存状態が劣悪であり、加工痕も用途も不明なため図示していない。テラスや木製品の存在などはこの土坑の性格を考える上での糸口であろうか。時期は弥生時代後期に比定できる。

SK50 (Fig. 24) 調査区中央南側のBA36、BA37グリッドに位置する。北側をSK49に切られる。残

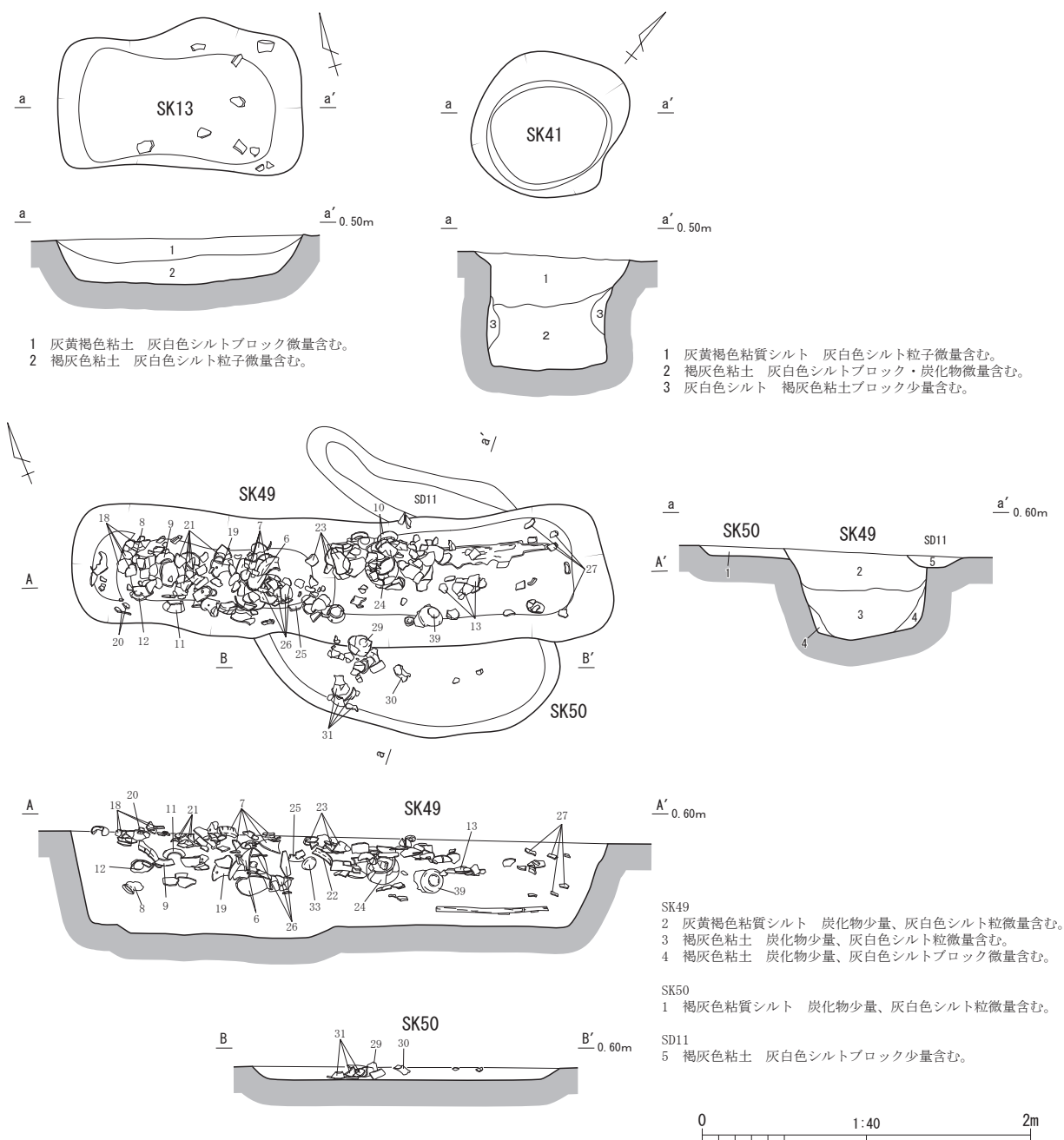


Fig. 24 A区 SK13・41・49・50 実測図

存する長さ 1.87 m、深さ 0.11 m を測る。断面形は皿状の浅い土坑であるが、弥生土器が数点出土している。3 点を図示した。時期は重複関係から SK49 よりも先行すると考えられるが、弥生時代後期の範疇に収まる。

SK73 (Fig. 25) 調査区中央北端の BA34 グリッドに位置する。SK79 の南西端を切る。平面形は、径が 0.8 ～ 0.85 m の少し歪な円形、断面形は歪な逆台形を呈する。最深部の深さは 0.28 m を測る。底面付近で弥生土器が 2 点出土している。1 点は小型直口壺で完形である。

SK85 (Fig. 25) 調査区中央西寄りの AZ35 グリッドに位置する。SD16 の北西端の一部を切る。平面形は、長径 2.25 m、短径 1.64 m を測る歪な楕円形、断面形は浅い逆台形状を呈する。埋土中か

2 A区の調査

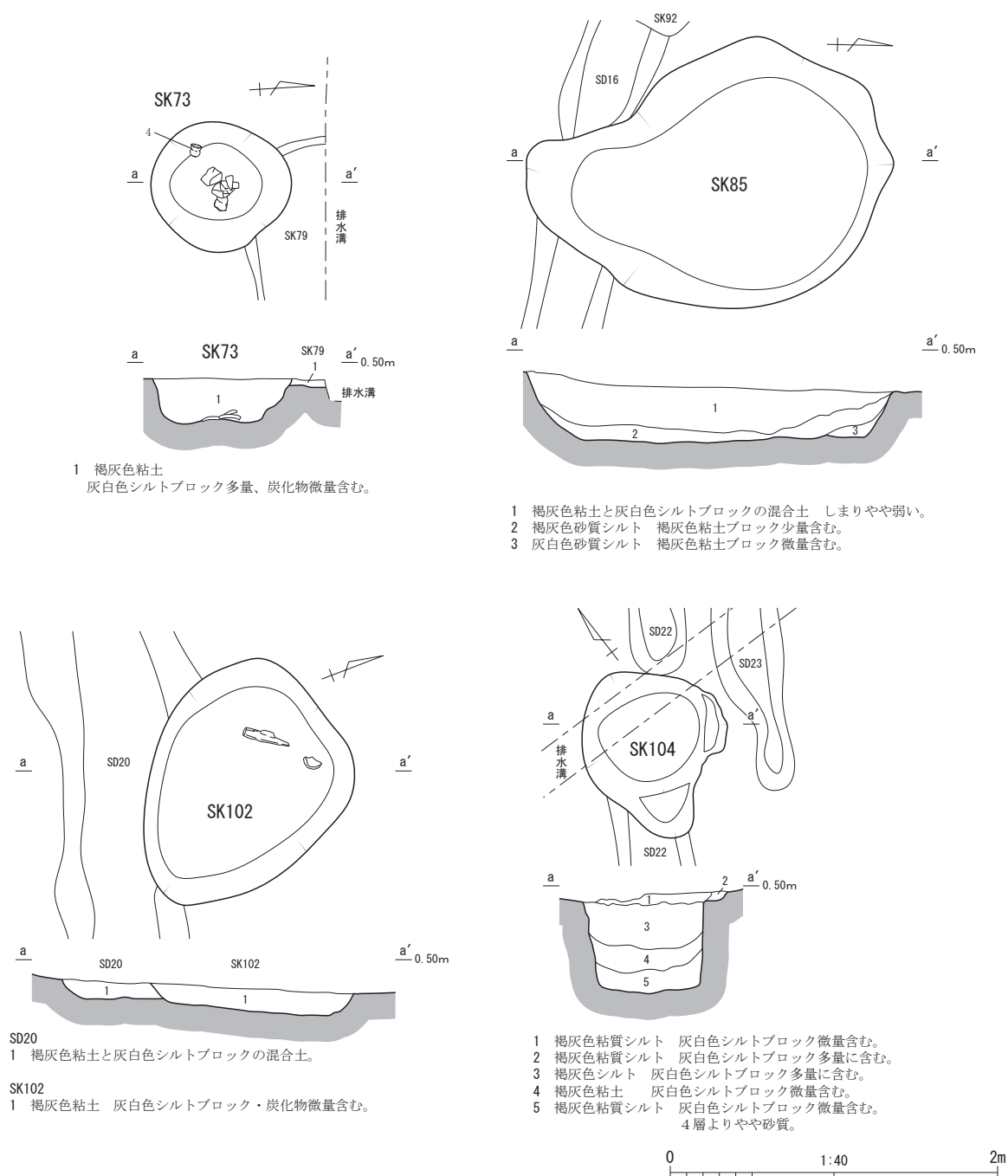


Fig. 25 A区 SK73・85・102・104 実測図

ら須恵器細片、扁平な瓦（質）状小片が出土しており、平安時代以降の所産であると考えられる。

SK102 (Fig. 25) 調査区南西寄りのAY35 グリッドに位置する。SD20の北縁部の一部を切る。平面形は、長径1.58 m、短径1.21 mを測る歪な楕円形、断面形は皿状を呈する。深さは0.17 mを測り、埋土中から弥生土器細片と横槌状に節が遺る自然木1点が出土している。

SK104 (Fig. 25) 調査区南西隅のAY36 グリッドに位置する。SD22の北東端を切る。平面形は、長径1.08 m、短径0.97 mを測る不整楕円形、断面形は長形状を成して深さは0.62 mを測る。東側と南側にテラス状の平坦面を有しており、この土坑を特徴づける。埋土は3層に分層できるが基本層は同じであり、比較的短期間に埋まったと考えられる。断面形や埋土の堆積状況からSK41と同様の性格が推察される。

③小穴（ピット）

小穴（ピット）43基、土坑109基、計152基について、すべての断面を観察、検討したが、柱根、柱痕を認めることができなかった。また、平面でも検討を重ねたが、柵列や掘立柱建物を想定する積極的な根拠は見いだせなかった。

SK41・SK73より出土した主な遺物2点の弥生土器・石器を図示した。4はSK73、5はSK41より出土したものである。4は小型直口壺で口縁部内外面は横ナデを施している。体部外面は

弱くハケ調整痕がみられ、ハケ調整ののち指ナデを施したとみられる。5は凝灰岩製の砥石で、V字状の自然の凹みを砥面として利用している。被熱により欠損している。

SK49からは弥生土器、石器等が出土している。外反口縁壺（6～9）、直立口縁壺（10・11）、壺（12・13）、く字鉢（14）、装飾く字鉢（15）、小型直口鉢（16）、碗型坏部高坏（17）、外反坏部高坏（18～20）、高坏（21）、装飾高坏（22）、く字甕（23～26）、く字大型甕（27）、敲石（28）の23点を図示した。6は肩部に2段の横線文を巡らせ、横線文の間と2段目下位に扇形文があり、口縁部内面には扇形文と横線文が施される。7は口縁部が大きく外反する。外面が一部摩滅しているが、肩部に3段の横線文と2段の波状文が巡り、口縁部内面には波状文が施される。底部等の形状から山中Ⅲ式期に位置付けられる。

8は外面に丁寧なミガキが施される。9は口縁部に粘土貼り付けによる棒状浮文が施される。口縁部の現存状態から4単位と考えられる。内面には2段一對の波状文が施される。肩部には、やや間隔が広い2段一對の波状文が2段巡り、その間に横線文が1段巡る。波状文2段目下位には扇形文が施される。10は口唇部に刺突による刻みが施され、口縁部中位の区画にハケメ調整が施される。肩部には横線文2段、扇形文2段、波状文1段が施される。11は口縁部、肩部ともに摩滅により調整、文様が不明瞭であるが、口唇部に刺突による刻みが施される。12は体部下位に膨らみを持つ形状である。口縁部内面に横線文、円形竹管文が施され、肩部には横線文、扇形文が交互に3段ずつ巡る。13は頸部に粘土貼り付けによる突帯が巡る。体部下位に膨らみを持つ形状である。体部に横線文2段の間に波の弱い波状文が巡り、横線文の下位に扇形文を施す。14は体部中位に膨らみを持つ形状で頸部で屈曲し、口縁部がやや垂直に立ち上がる。外面に丁寧なミガキ調整を施す。15は頸部の屈曲が弱く、口縁部がやや外反し立ち上がる。口縁部に羽状文を2段、頸部に刺突による沈線が施される。16は体部中位が膨らむ。外面と口縁部内面に丁寧なミガキ調整がみられる。17は脚部に3方向のスカシがあり、脚部の端部は折り返しており、ハケによる調整がなされる。外面坏部・脚部ともにハケ調整ののち、ミガキが施される。山中Ⅲ式期に位置付けられる。18は3方向にスカシがあり、脚部に横線文、波状文が施される。坏部は直線的に伸び屈曲し広がる。19は脚部に3方向のスカシを持つ。坏部はやや急な角度で広がり垂直に近い角度で屈曲し広がる。20は坏部の口縁部が屈曲したのち折り返す。内外面ともにミガキ調整が施される。21は高坏の脚部で3方

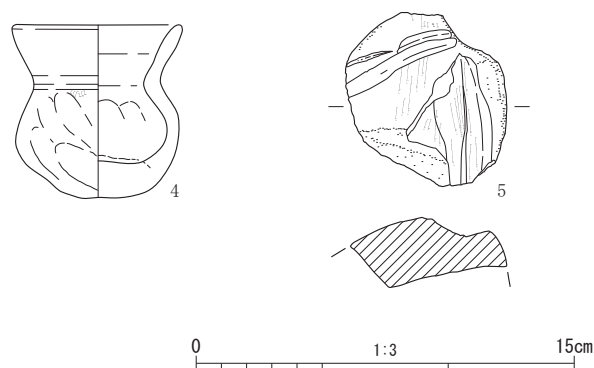


Fig. 26 SK41・73 出土遺物

向のスカシがあり、脚柱部に横線文が3条施される。外面はミガキ調整が施され、端部はやや薄い段になっており上位にハケ調整がなされる。22は脚部に5方向の滴形のスカシがあり、水平に突出する鐙状突帯が巡る。脚柱部には横線文5条、羽状文4条が交互に施される。23・24は口唇部に刺突による刻みが施される。25は外面口縁部の中位がやや膨らむ形状で、口唇部に刺突による刻みが施される。26は体部下位が張り出す形状を呈し、口唇部に刺突による刻みが施される。27は口縁部が大きく外反する。内外面ともにハケ調整がなされ、口唇部に刺突による刻みが施される。28は砂岩製の敲石で上・下・右側面に帯状の敲打痕が認められる。

SK50からは壺(29)、長頸壺(30)、高坏(31)の3点を図示した。29は肩部に3段の刺突によ

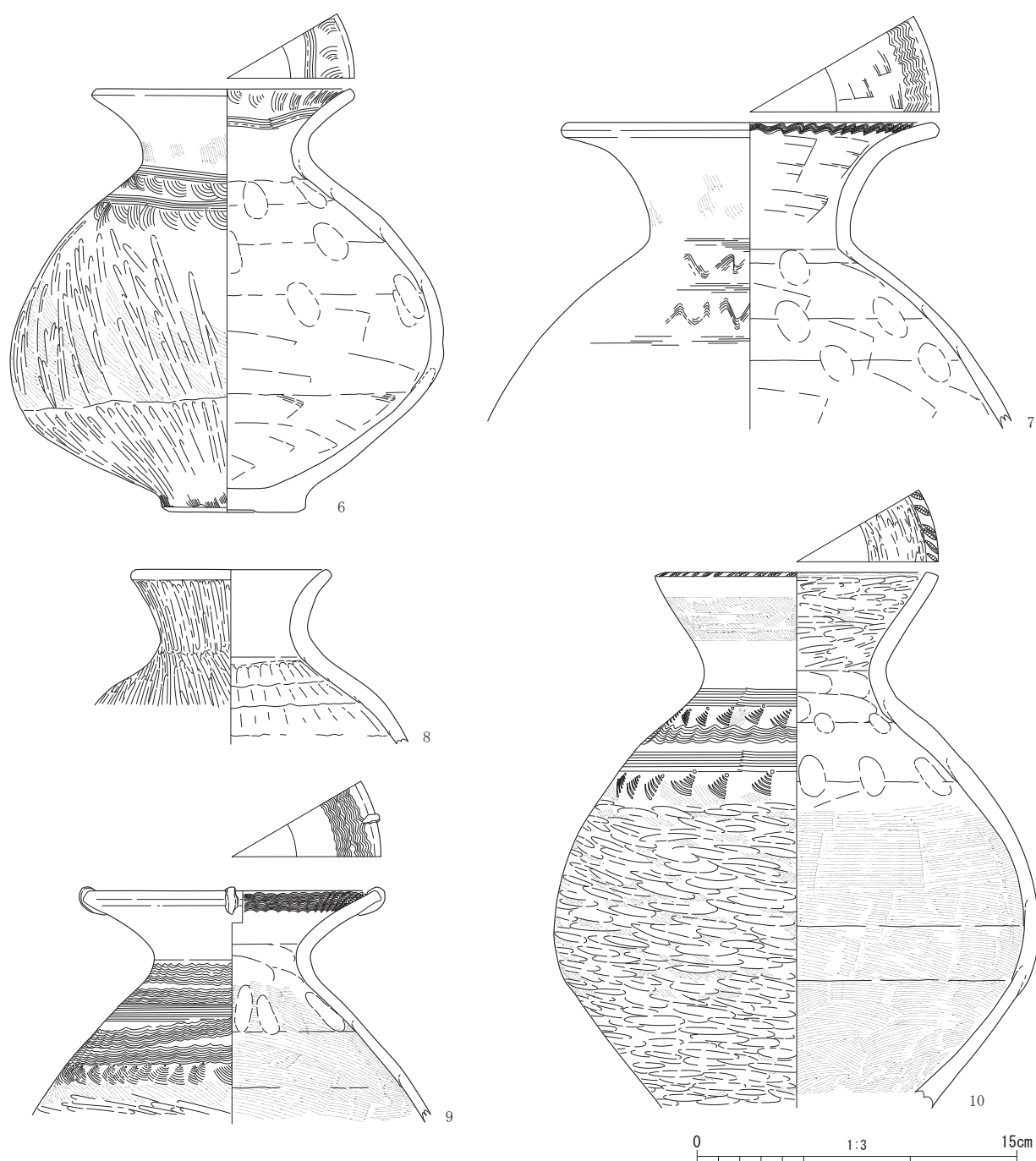


Fig. 27 A区 SK49 出土遺物 (1)

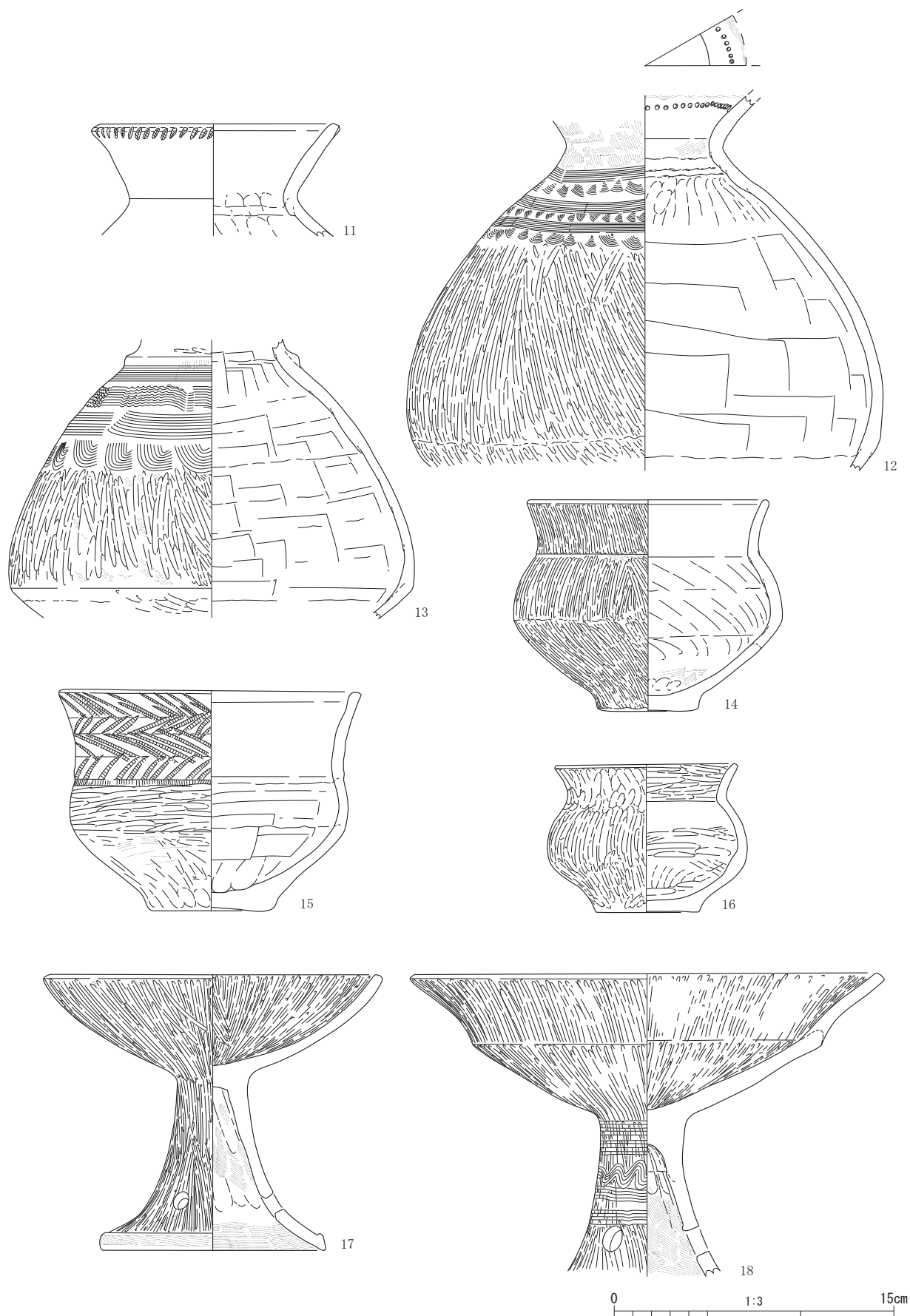


Fig. 28 A区 SK49 出土遺物 (2)

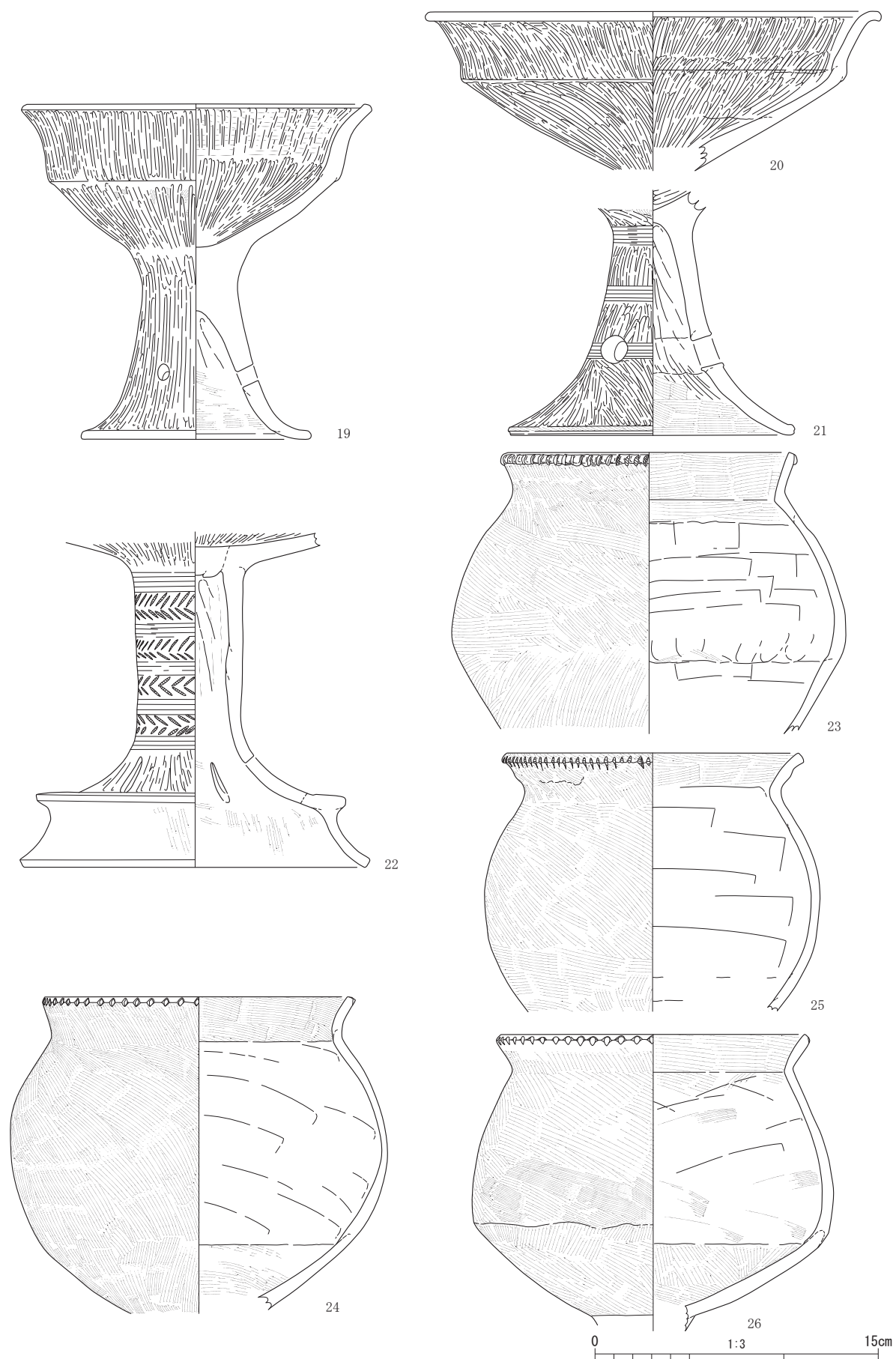


Fig. 29 A区 SK49 出土遺物 (3)

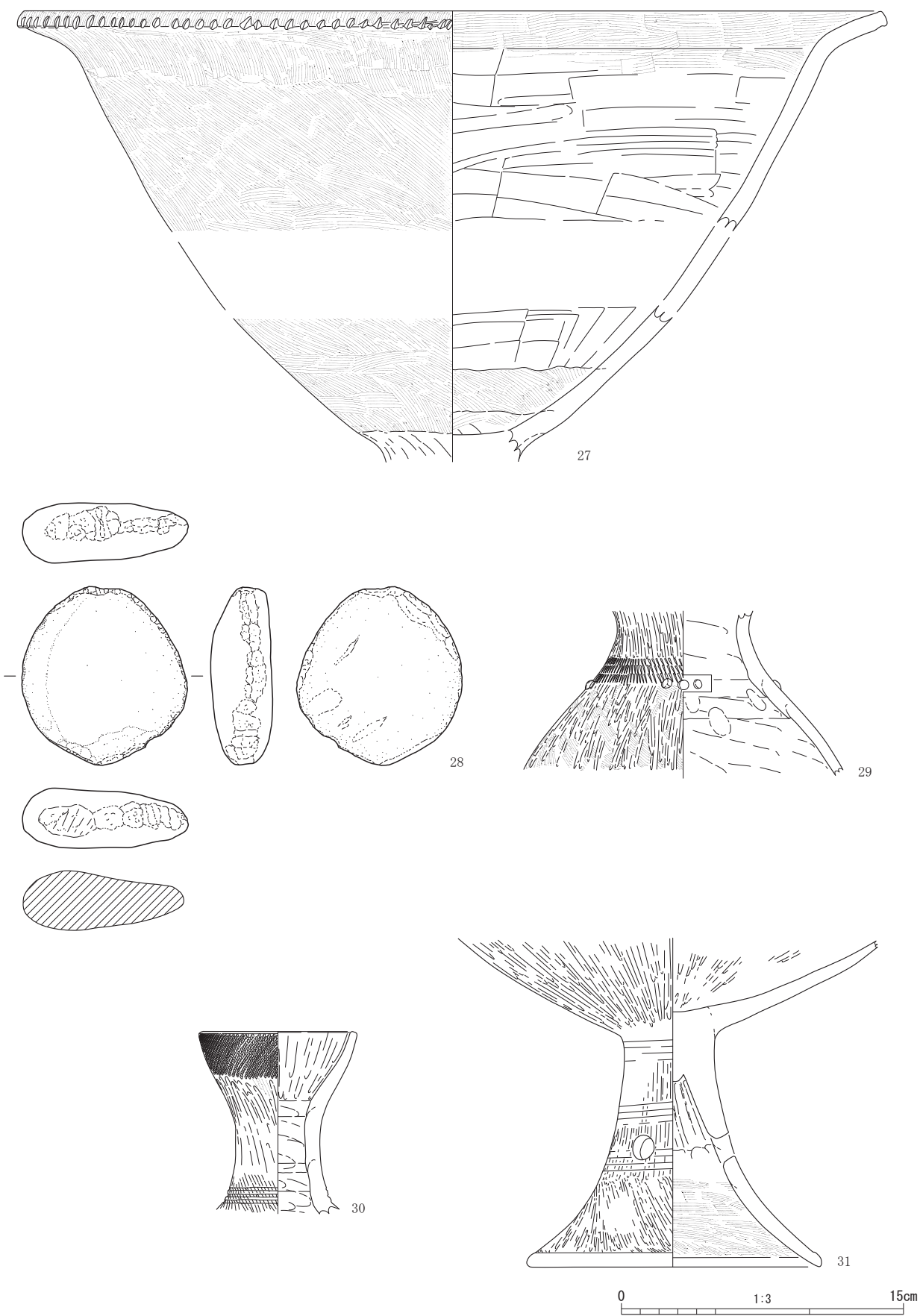


Fig. 30 A区 SK49・50 出土遺物

る刻みが巡る。その下位に粘土貼り付けによる円形浮文が3個1単位施され、4方向に巡ると推定される。30は口縁部外面にLR縄文が施され、肩部に3段の刺突による刻みが巡る。施文形態から菊川式に影響を受けたもの、あるいは搬入品と考えられる。31は脚部に3方向のスカシがあり、横線文3段施される。

④遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (Fig. 31・32) その他に遺構外から出土した外反口縁壺 (32・33)、片口鉢 (34)、く字鉢 (35)、小型直口鉢 (36・37)、装飾小型直口鉢 (38)、装飾く字鉢 (39)、碗型鉢 (40・41)、外反坏部高坏 (42・43)、く字甕 (44・45)、墨書土器 (46)、土玉 (47・48)、磨製石斧 (49)、敲石 (50) の19点を図示した。出土位置は、32～36・39・42・45が調査区南部、37・46がBA-37グリッド、38がAZ-37グリッド、40・41・48・49がBA-36グリッド、43・44が調査区南東部、47・50がAZ-36グリッドより出土した。層位は、32～37・39～41・43～45・48がD層、38・42・46・47・49・50が旧表土から出土した。32は底部から形状が直線的に広がっていき、体部中央下位が膨らむ。摩滅により文様等が不明瞭である。33は底部が張り出し体部との間に明瞭な段をなす。体部下位が大きく張り出す形状である。外面肩部は摩滅により不明瞭であるが、横線文2段との間に波状文1段が施される。34は体部下位が張り出し、口縁部は緩やかに広がる。35は体部中位が張り出す。

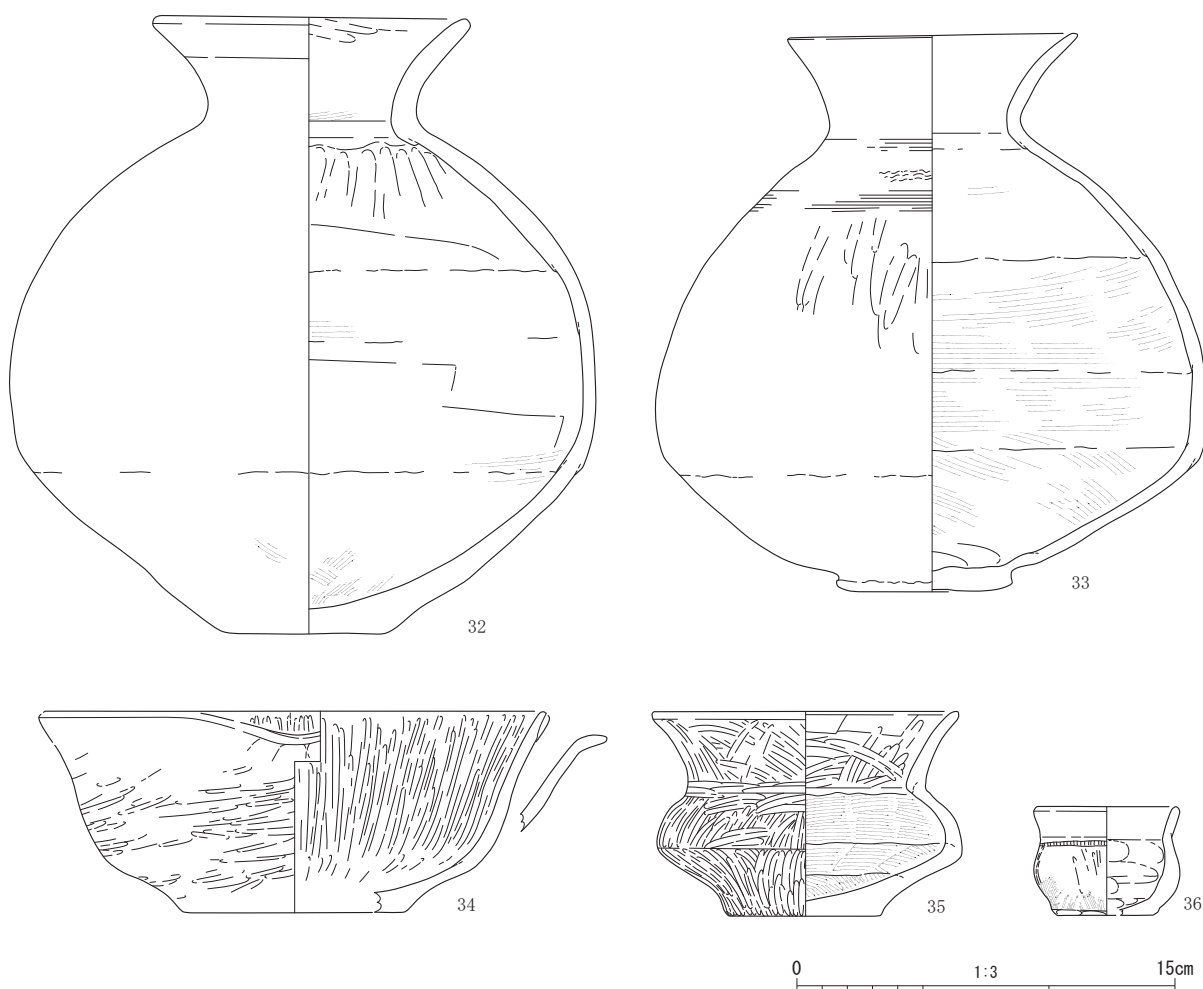


Fig. 31 A区 遺構外 出土遺物 (1)

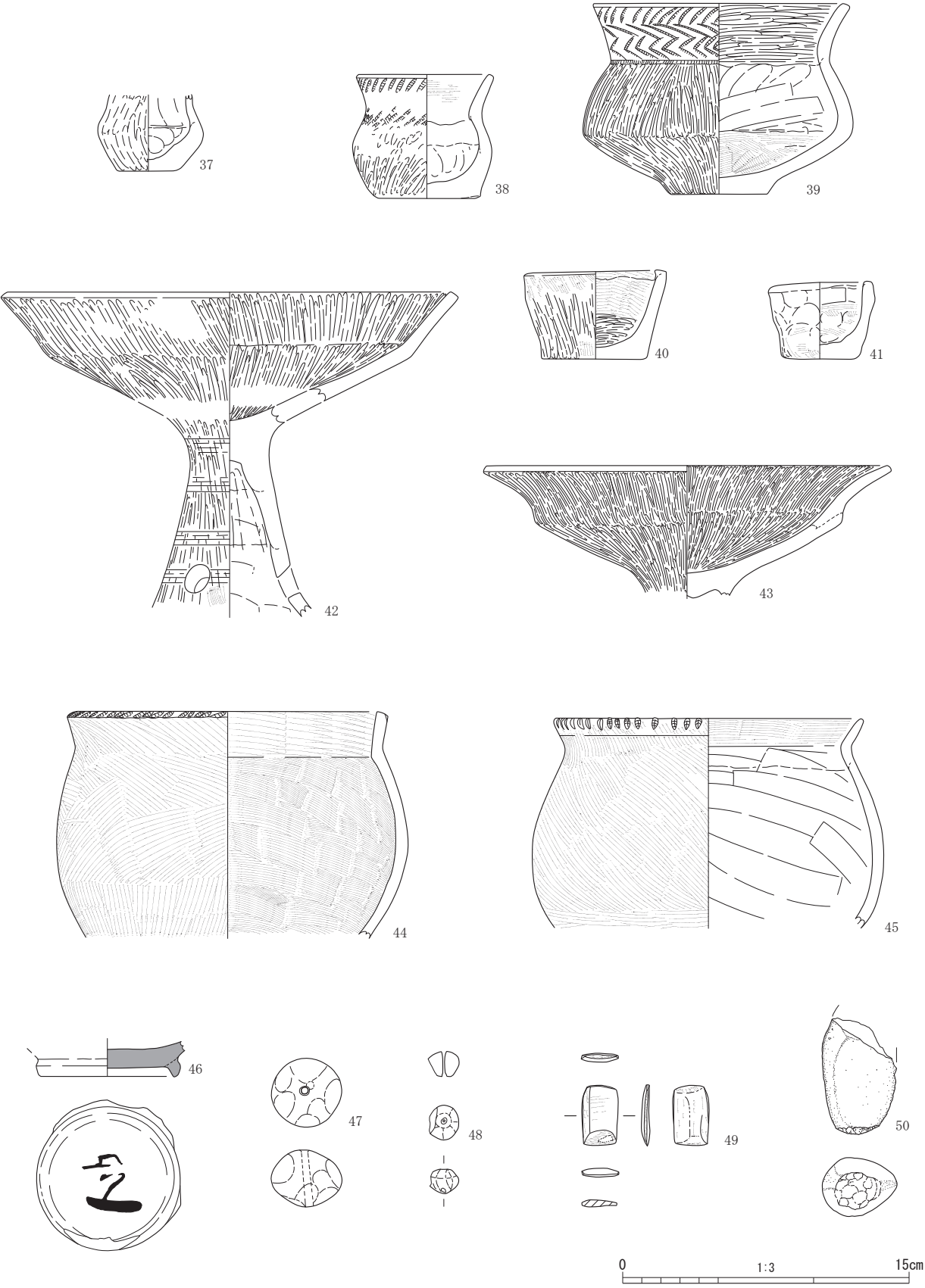


Fig. 32 A区 遺構外 出土遺物 (2)

2 A区の調査

口縁部は僅かに外反する。外面と内面には丁寧なミガキ、内面体部にはハケ調整が施される。36は体部がやや膨らみ頸部の括れは弱い。頸部に刺突による沈線が巡る。37は口縁部が欠損している。外面にはミガキ調整が施される。38は体部がやや膨らみ頸部の括れは弱い。口縁部から肩部にかけて刺突による斜線文が施される。39は体部中央が大きく張り出す。頸部は屈曲し、口縁部は僅かに外反する。口縁部外面には2条の羽状文と頸部に刺突による沈線が施される。外面と口縁部内面には丁寧なミガキ調整がなされる。内面底部には黒斑が認められる。形状から山中Ⅲ式期に位置付けられる。40は台付甕の脚部を転用した碗型の鉢と考えられる。焼成前・後に転用されたかは判別できない。41は手捏の碗形鉢とみられる。42は脚部に3方向のスカシがあり、4条4段の横線文が施される。坏部は直線的に広がり、屈曲は弱くやや外反する。43は坏部が直線的に広がり、大きく屈曲して外反する。44・45は口唇部には刺突による刻みが施される。44は口縁部の立ち上がりやや垂直ぎみに広がる。46は灰釉陶器の底部に墨書があり、不鮮明で判読が困難であるが「足」と考えられる。47・48ともに平面形は円形で断面形はやや偏平である。49は緑色岩製の小型扁平片刃石斧と考えられる。50は軟質の安山岩製の敲石で上部は欠損しているが、下端部に敲打痕が認められる。

(4) 小結

A区は、南部付近が微高地となる地形で、北東部、北西部が低地となる。遺構調査面の比高差は、約0.4mで北部が低い。遺構密度は、18次F-1区と比較すると低くなる。これはA区が低地となっていくためと考えられる。

18次F-1区の遺構と連続（同一）と考えられる溝状遺構は5条あり、本調査区で検出した溝を図上で合成しても各遺構の性格を積極的に見出すことができなかった。18次F-1区の南東端で方形周溝墓SZ01が検出されている。伊場遺跡群の方形周溝墓は周回せず、四隅に陸橋を有する類例が多いことから、本調査区の南東端でもほぼSZ01と同軸でSD21とSD24は方形周溝墓になる可能性もあるが、断定できる根拠は見出せない。

18次F-1区においては、井戸（SE01・SE02）と評価されている遺構が2基検出されている。これに従えば、本調査区で井戸の可能性が考えられるのは、SK41とSK104が相当する。それ以外の土坑や小穴（ピット）の性格では掘立柱建物は想定できなかった。18次F-1区で環濠と想定されているSD01、方形周溝墓SZ01、19次調査のSD16・19・20・21・23・24が比較的南東寄りに位置することから、弥生時代後期にはある程度、墓域とそうでない場所が分けられていた可能性がある。包含層出土の遺物は調査区北部より調査区南部に比較的集中する。遺構の密度や遺物の出土量・立地から、本調査区南部から18次F-1区の環濠内まで生活域であり、本調査区北部は低地のため生活域外であった可能性が高い。

時期は、遺物の出土していない遺構も多く、包含層（遺構外）から灰釉陶器の墨書土器（46）、SK85から須恵器が出土しており、一概に括ることはできないが、概ね弥生時代後期後半に属する遺構が主となる。また、SK49、SK50から一括性の高い土器が出土しており（5～28）、そのほとんどは山中Ⅲ式の所謂、V様式とされる時期に比定できる。なかには菊川式の影響を受けた、あるいは搬入品と考えられる縄文を施す長頸壺（30）や装飾高坏（3・22）が当該遺構を特徴づける。

3 B区の調査

(1) 概要

B区は本遺跡の中央部西寄りに位置し、第1・第2浜堤列間にある微高地および低地に立地する。B区は、南北に47.2 m、幅2.1～3.8 mと細長い。調査総面積は104 m²である。

既往調査区との位置関係は、北側に梶子北遺跡、15次調査J区、17次調査I区があり、本調査区は南側の18次調査D区と連続した位置にある。

(2) 基本層位

B区の基本層序は12層に大別できる。1層は灰色～黒褐色粘土である。2層は黒褐色～オリーブ黒色褐粘土である。3層は黒色粘土である。4層は灰黄色粘土である。5層は緑灰色粘土である。6層は褐灰色粘土で、マンガンを含み伊場B層に相当する。7層は黄灰色～褐灰色粘土で、伊場C層に相当する。8層は灰色～青灰色粘土で、伊場C層に相当する。9層は黒褐色～褐灰色～オリーブ黒色粘土でマンガンを含み、伊場D層に相当する。10層は黒灰色粘土で伊場D層に相当する。11層は灰オリーブ色粘土である。12層は灰色粘土～青灰色微砂で基盤層である。

(3) 遺構と遺物

B区で確認した遺構は、8層上面で溝1条、12層上面で溝1条、小穴2基である。8層上面の地形は、北から南に向かって徐々に標高が高くなり、比高差は約0.4 mである。地形の変化が安定する中央部でSD01を検出した。12層上面は、北端が最も低く標高-0.2 mを測り、中央部に向かって上昇していく。中央部から南に向かって徐々に標高は下がり、やや上昇を始めたところで小穴2基、溝1条を検出した。B区北端は、太平洋戦争中の艦砲弾炸裂による大きな攪乱を受けているため、遺構の検出はできなかった。

SD01 (Fig. 33) BE22 グリッドに位置している。調査区中央部を東西に横切り、両端は調査区外に延びる。検出面は8層上面である。主軸はほぼ東西方向を指し、N-89° -Eである。規模は上端幅0.77 m、検出面からの深さ0.28 mを測る。断面形は皿状を呈し、緩やかに立ち上がる。埋土は2層で、レンズ状に堆積する。褐灰色粘土を基調とし、1層はマンガン・酸化鉄を含み、2層は灰白色粘土を含んでいる。遺物は出土しなかった。

SD02 (Fig. 36) BD25、BE25 グリッドに位置している。調査区南端を横切り、調査区外に延びる。検出面は12層上面で、9層に被覆されている。主軸は北西～南東方向で、N-48° -Wである。規模は上端幅0.85 m、検出面からの深さ0.05 mを測る。断面形は弧状を呈する。埋土は単層で褐灰色シルトを主体とし、灰白色粘土ブロックと微砂を含んでいる。遺物は弥生土器が出土している。遺構の帰属時期は、出土遺物から弥生時代後期と考えられる。

SP01・SP02 (Fig. 35) BD24 グリッドに位置する。SP01、SP02は近接した位置にある。検出面は7層上面で、5層に被覆されていた。SP01は長軸0.26 m、短軸0.23 m、検出面からの深さ0.13 mを測る。SP02は長軸0.28 m、短軸0.20 m、検出面からの深さ0.09 mを測る。埋土はともに褐

3 B区の調査

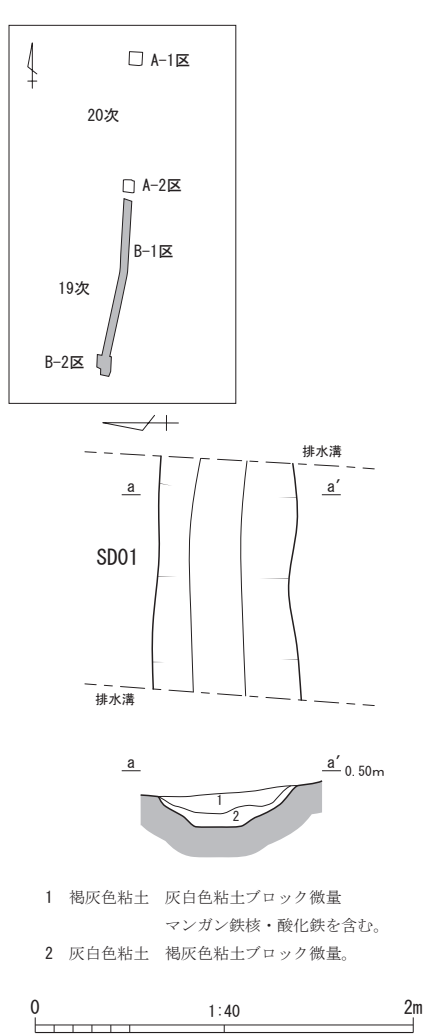


Fig. 34 B区 SD01 実測図

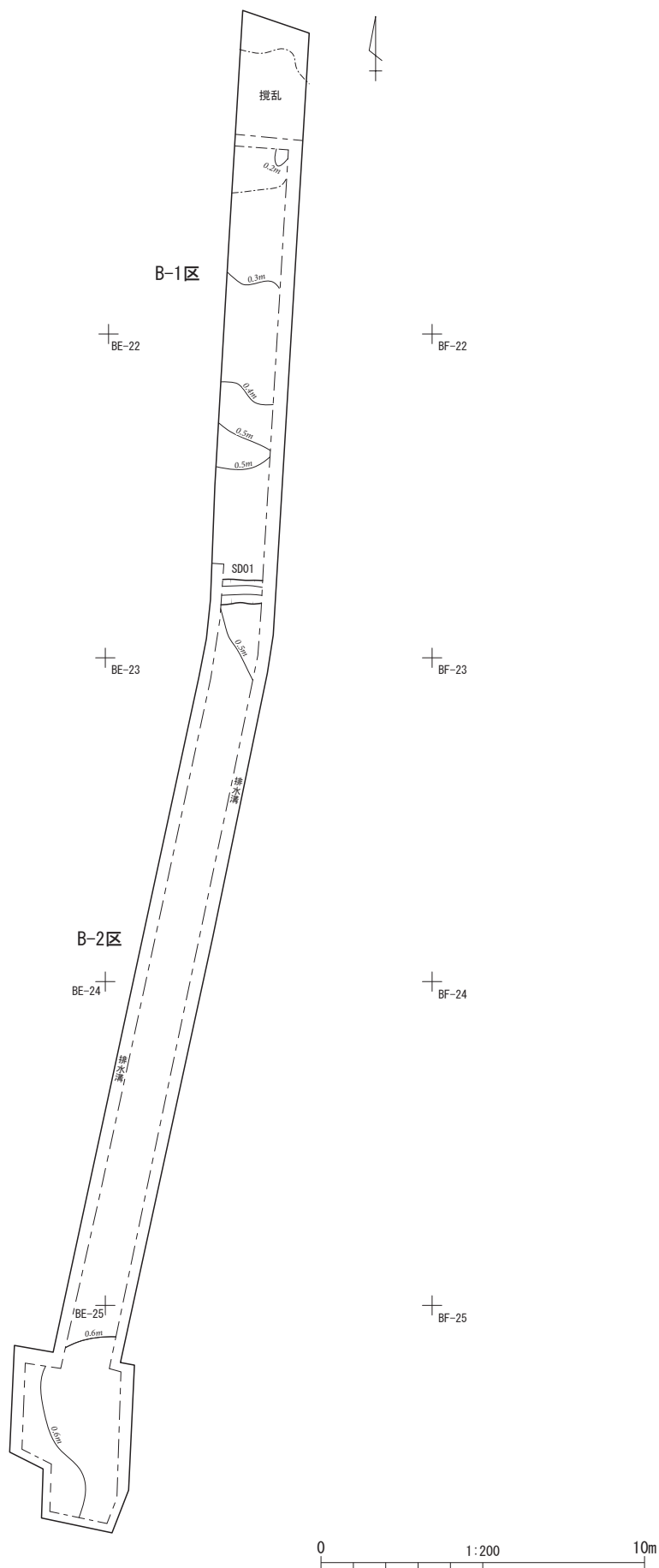


Fig. 33 B区 上層遺構全体図

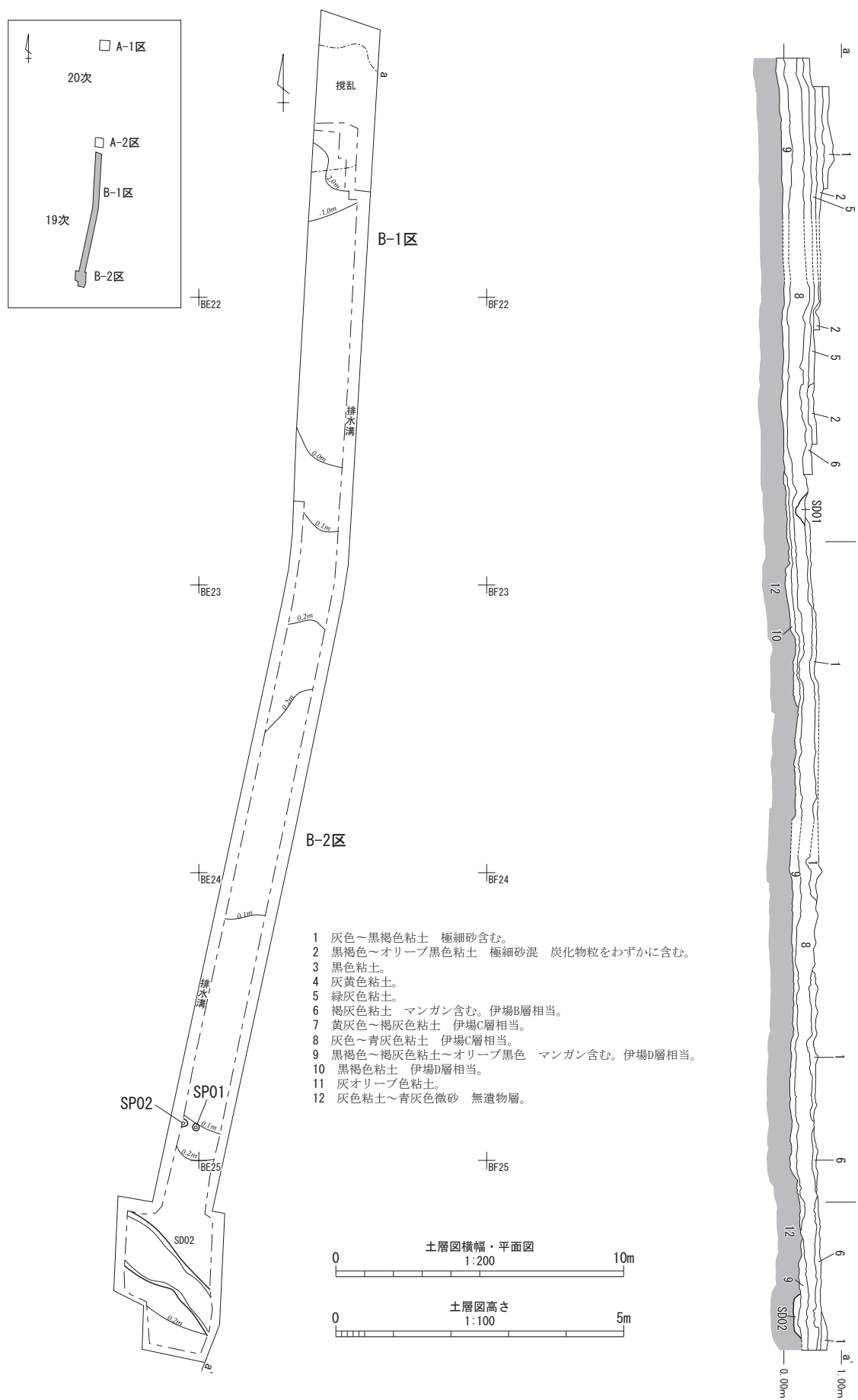
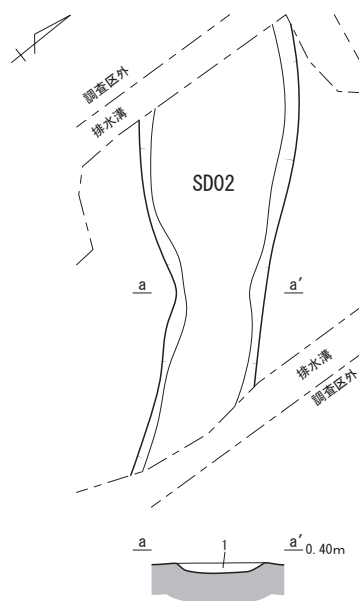


Fig. 35 B区 土層断面図・下層遺構全体図

3 B区の調査



1 褐灰色シルト 灰白色粘土ブロックを斑状に含み、微砂を中量含む。

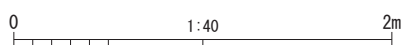


Fig. 36 B区 SD02 実測図

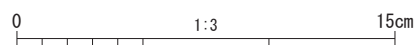
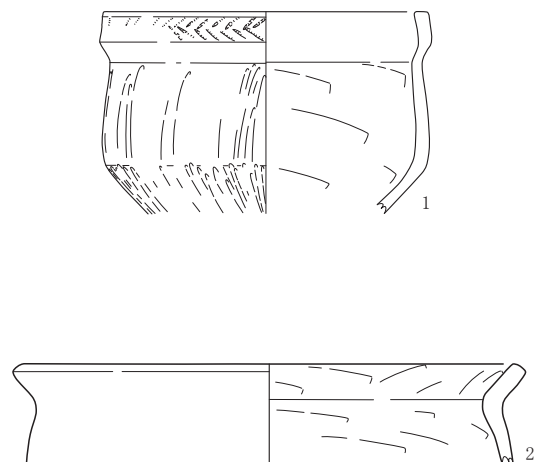


Fig. 37 B区 遺構外出土遺物

灰色シルトの単層で微砂を中量含んでいる。遺物は出土しなかった。検出面と土層堆積状況から弥生時代後期に位置づけられる。

B区では、12層上面で検出したSD02から弥生土器が出土している。小片のため図示していないが、検出面と出土層位から弥生時代後期に帰属すると考えられる。B区遺構外出土遺物（Fig. 37）の遺物包含層から出土している遺物のうち2点（1・2）を図示した。1は調査区南側のBE-25グリッドの9層から出土した。付近にはSD02が南に位置する。装飾く字鉢で、体部が張り出し、頸部から口縁までほぼ垂直方向に延びる。口縁部に刺突羽状文が施される。弥生時代後期の山中Ⅱ式期に位置づけられる。2は調査区北側のBE-22グリッドの6層から出土した。口縁部のみの破片で土師器甕と推定される。

(4) 小結

B区では、8層上面で調査区を横断するSD01が1条のみ検出された。SD01から遺物は出土していない。標高0.5mの平坦な地形に位置しており、地形の変換点に沿って位置する弥生時代の溝跡とは異なる。基盤層となる12層上面では、調査区南端に弥生時代後期の溝跡SD02が認められた。他調査区の溝跡と同様に等高線と平行して位置することから、地形に沿った区画溝と推定される。SD02以南は微高地となり、南側に隣接する18次調査D-2・3区では、標高0.2mから0.4mの間に小規模な溝群や土坑群、水田が検出されている。このことから、標高0.4m以上の微高地上に居住域、標高0.4m～0.2mの間は土坑や水田が多く、標高0.2m以下では遺構が希薄となっており、わずかな地形変化のなかでの土地利用を窺うことができる。

4 C区の調査

(1) 概要

C区は本遺跡の北西部寄りに位置し、第1・2浜堤列間にある微高地及び、低地に立地する調査区である。調査区は、南北方向に延びる長さ37.4 m、幅2.1～2.3 mで細長く、南側はA区に接続する。調査総面積は86 m²である。既往調査区の位置関係では東側に隣接する18次調査のG-2区、約10 m東側にG-1区が位置する。地形は調査区中央部付近が微高地上に高く、調査区の北側と及び南側に向かって標高が低下する。遺構検出面の標高は、調査区中央で標高0.5 m、調査区最北部で-0.4 m、調査区南端で0.2 mであり、北側では比較的急斜度に低下する。南側は緩やかに低下しており、A区と接続する周囲では概ね平坦な地形となっている。調査区北端は太平洋戦争時の艦砲弾炸裂痕による大きな攪乱を受けている。調査は4層上面まで重機による掘削後、弥生時代後期の遺物包含層である4・5層を人力による掘削で遺構の検出及び遺物の取り上げを行った。調査区南側の中央やや北より、BD33 グリッドで4層中より、土器の集中範囲を1箇所検出し、土器集積遺構とした。遺構確認作業は6層（ピート層）が残存している範囲では6層上面で、6層が残存していない範囲では7層上面で行い、弥生時代後期の遺構調査を行った。

(2) 基本層位

C区の基本層序は7層に大別できる。1層は灰色粘土である。18次調査の2層に相当する。2層は褐灰色粘土でマンガンを含む。18次調査の5層、伊場B層に相当する。3層は灰白色粘土である。18次調査の6-1層、伊場C1層に相当する。4層は褐灰色粘土、18次調査の7層、伊場D層に相当する。5層は黒褐色粘土、4層と同様に18次調査の7層、伊場D層に相当する。4・5層は弥生時代後期の遺物を包含する。6層は黒色系の有機質土でピート層（泥炭層、腐植土層）である。場所により黒褐色から褐灰色に粘土化している。18次調査の8層に相当する。6層以下は無遺物層である。6層は調査区北側の標高-0.2 mの以下の低地のみ確認した。7層は青灰色微砂で、基盤層である。18次調査の10層に相当する。

(3) 遺構と遺物

C区で検出した遺構は、溝跡1条と土坑1基、小穴（ピット）1基、土器集積遺構1基である。SD01やSK01は北側へ比較的急斜度に低下する微高地から低地への変換点に位置する。SD01とSK01は重複し、SK01がSD01を切る。土器集積遺構のSX01やSP01は調査区中央から南側へ緩やかに傾斜する標高0.4～0.5 mの間に位置する。SX01は伊場D層に相当する4層の下位から検出した。低地からは遺構は検出できなかった。

SD01 (Fig. 38) 調査区中央やや北よりのBD32 グリッドに位置する。北東側はトレンチに切られ、南西側はSK01と重複し、切られる。北東側のトレンチ東壁では、SD01の断面を確認できなかったためトレンチ内で収束していると考えられる。検出面は7層上面で4層に被覆される。断面形は概ね皿状を呈する。検出した規模は長さ1.75 m、幅0.65 m、検出面からの深さは0.11 mを測る。

4 C区の調査

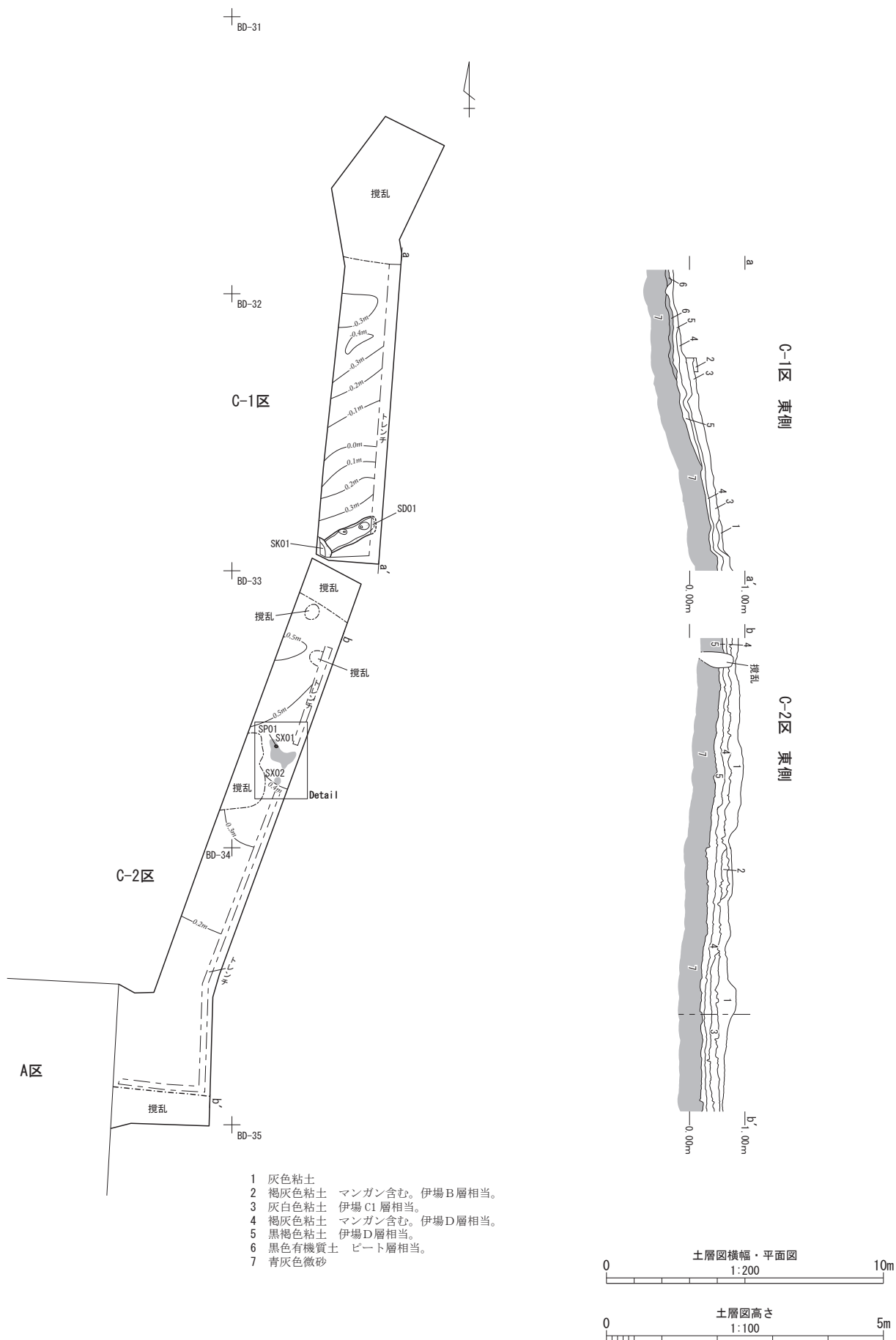


Fig. 38 C区 遺構全体図

主軸はN-64°-Eにとる。埋土は3層に識別でき、1層が褐灰色粘土、2・3層が青灰色微砂で構成される。ブロック状に堆積することから人為的に埋め戻された可能性が高い。溝内より小穴状の落ち込みを2箇所確認した。遺物は弥生土器が出土しているが、小片のため図示できなかった。遺構の時期は検出層位と出土遺物から弥生時代後期に位置づけられる。

SK01 (Fig. 39) 調査区中央やや北よりのBD32グリッドに位置する。南西側は調査区外に延びる。SD01と重複しSD01を切る。検出面は、4層上面である。断面形は逆台形を呈する。検出した規模は長軸0.80m、短軸0.41mで、検出面からの深さ0.42mを測る。埋土は3層に分層でき、褐灰色粘土を基調とし、1・2層が灰白色粘土ブロックを含み、3層が青灰色微砂を含む。遺物は出土していない。遺構の時期は、検出面と埋土堆積状況から古墳時代以降と考えられる。

SX01 (Fig. 39) 調査区中央よりやや南側のBD33グリッドに位置する。遺物集積遺構である。検出面は4層の下位に相当する。SX01はSP01と位置関係では重複するが、SX01は4層下位で検出し、掘り込みも確認できなかったため、7層上面で検出したSP01との切り合い関係はない。SX01は微高地状となる調査区中央から南側へ緩やかに傾斜する標高0.4～0.5mの間で検出した。周囲の堆積土には炭化物を含んでいたが、平面・断面観察から明瞭な掘り方、範囲は不明であり、落ち込みを有する遺構ではないと考えられる。北西側には拳大の自然礫1点、土器の周囲には長さ15～30cm、厚さ3～4cm程度の炭化木片を数点確認した。2個体分の外反坏部高坏(1・3)と1個体分の甕、弥生土器壺が潰れた状態で出土した。

SX01より出土した遺物を1～4に示した。出土した遺物は土器で、弥生時代後期のものが主体

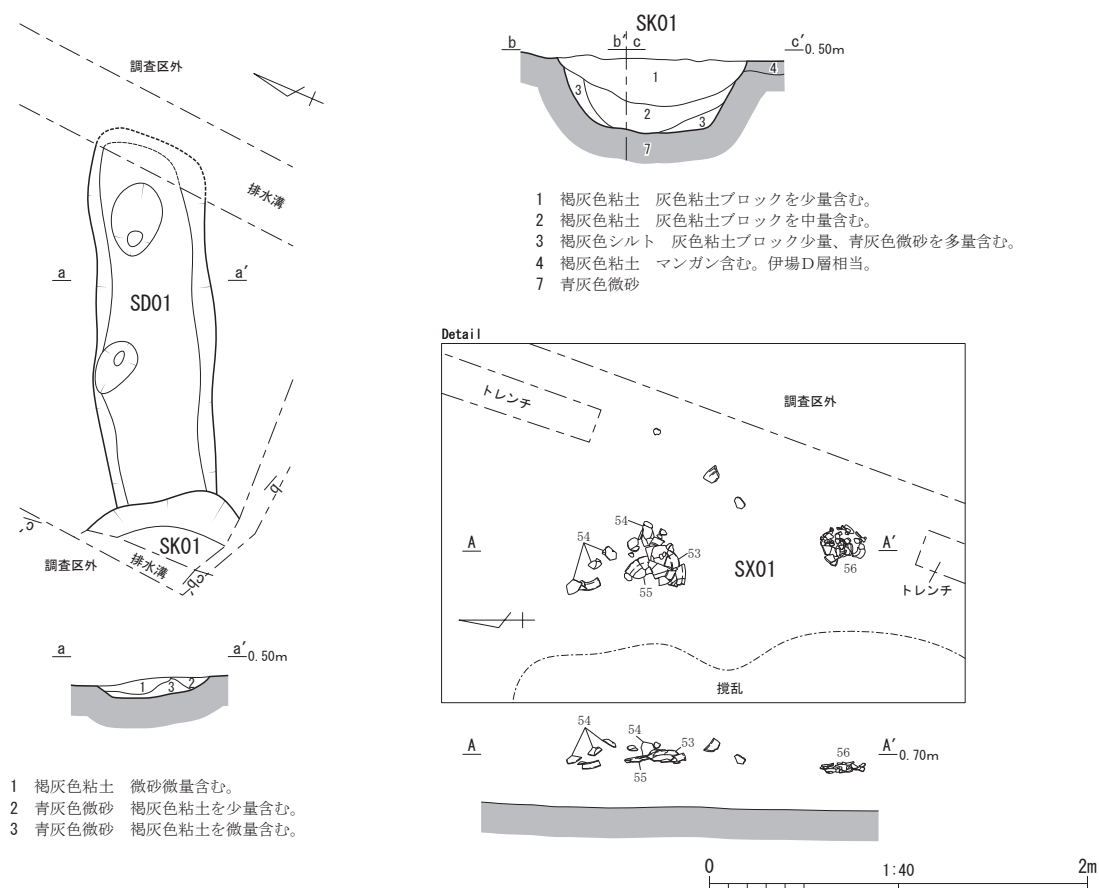


Fig. 39 C区 SD01・SK01・SX01 実測図

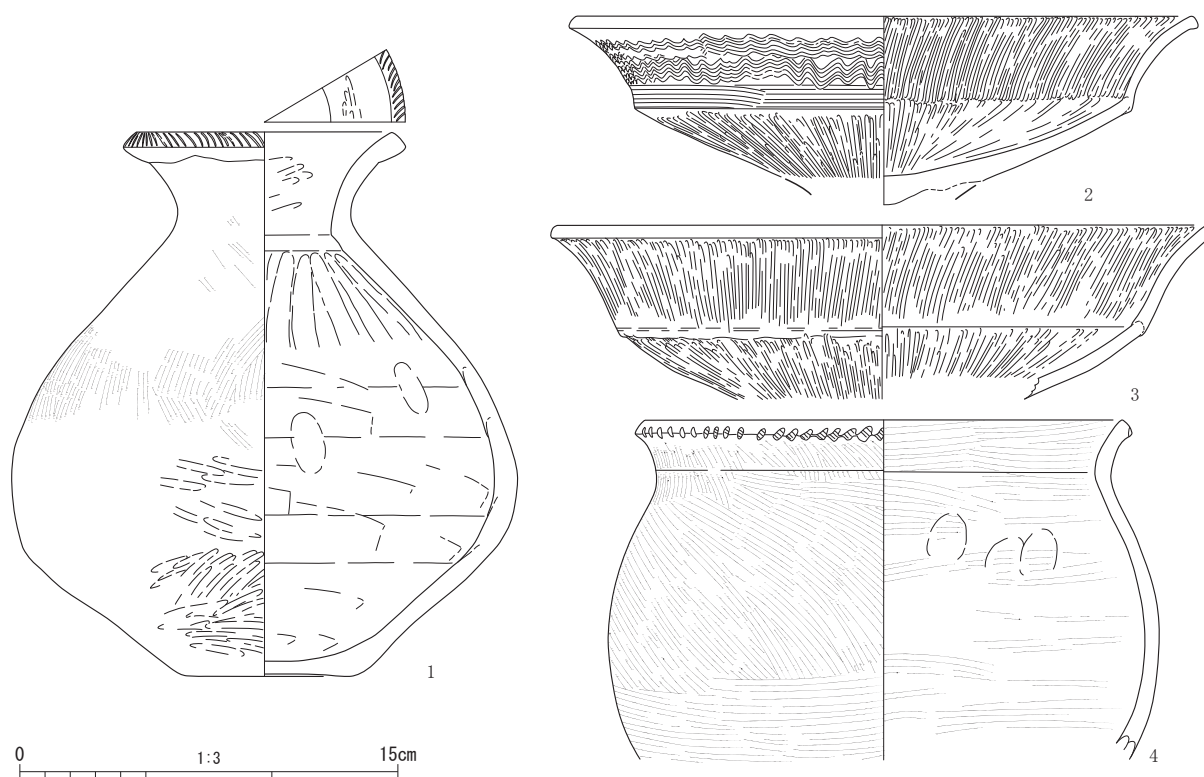


Fig. 40 C区 SX01 出土遺物

となる。また、遺構内から出土した遺物は、土器集積遺構を除くと SD01 から出土した少量のみであり SK01、SP01 からは出土していない。

1 は折返口縁壺である。口縁部面に刺突による刻みが施される。2 は外反坏部高坏である。坏部外面に波状文が施される。坏部は直線状に広がり、口縁部が明瞭に屈曲する。4 はく字甕である。口唇部に刺突による刻みが施される。3 は外反坏部高坏である。口縁部は明瞭に屈曲し、内外面に丁寧なミガキ調整が施される。

(4) 小結

C 区は、中央部付近が微高地上となる地形で、北側及び南側が低地となる。遺構調査面の比高差は、中央から南側が約 0.3 m、中央から北側が約 0.9 m であり、標高は、調査区北側の低地が南側の低地より約 0.6 m 低い。遺構密度は、南西側に隣接する A 区よりもさらに希薄となる。東側に隣接する 18 次調査の G-2 区も遺構が希薄であり、検出した遺構は微高地上から低地への変化点付近に位置し、標高 0.4 m より高い範囲から確認されている。調査区南側は、調査区北側と比較すると高低差が緩やかであるが、検出した遺構は土器集積遺構 1 基と小穴（ピット）1 基で、掘り込みを有する遺構は小穴（ピット）1 基のみである。調査区北側は、SD01 が本調査区北寄りの微高地から低地に移行する標高 0.4 m ラインと概ね平行して位置する。SD01 は A 区で検出された溝と同様の標高ラインに位置し、共通性が認められる。また、本調査区北側で基本層序 6 層いわゆるピート層が低地に堆積する状況も A 区と共通性が認められる。C 区及び隣接する 18 次調査 G-2 区は低地に遺構が検出されていない。これは、低地部で耕作等の土地利用が積極的に行われていなかったため、人為的な影響が及びにくく、ピート層が残存しやすい状況であったと考えられる。

5 D区伊場大溝両岸の調査

(1) 概要

D区は、梶子遺跡の南端に位置しており、遺跡の範囲内の第1浜堤列と第3浜堤列の間の中央に立地し、第2浜堤列東端のほぼ延長上約500 mに位置する。北東側に15次調査の15B区、西側に21次調査区が近接している。調査区は南北にBE50～BE58、東西にBE50～BN50グリッドで囲む範囲にあり、南北方向に65.7 m、東西方向に79.3 mの長方形であり、伊場大溝を合わせた調査面積は5,210 m²となる。

(2) 基本層位

本項では主に19次調査の基本層序について説明する。D区の断面観察は、調査区の東側で南北断面を北側で東西断面のそれぞれ2ヶ所で観察した。層位は13層に分層、細分した。原則的には水平堆積もしくは緩やかな傾斜の堆積である。1層は標高0.6 m前後で部分的に観察された黄灰色粘質土層である。緩やかに南東方向に下がる傾向が窺える。層厚は最大で0.35 mである。既往調査の伊場B層に相当すると考えられる。2層は灰色粘質土である。上面の標高は0.5～0.25 mである。1層同様、緩やかに南東方向に下がる。上層の畝状遺構、溝はこの2層上面から掘り込まれている。また、自然流路である伊場大溝(SD01)は、2層上面では帯状または溜り状に窪んだ状態であったと考えられる。3・4層は、黄色を帯びる灰色系のシルト～粘質土であり、若干の凸凹があるが緩やかに西方向と南方向に下がる。既往調査の伊場C層に相当すると考えられる。5層は標高0.0 m前後で観察された灰色粘土層である。層厚は0.2～0.3 mであり、色相は下位に向かって

Tab.5 19次調査D区・15次調査B-1区 土層対応表

19次調査		21次調査		15次調査		伊場遺跡
D区 土層番号	土層	土層番号	土層	B-1区 土層番号	土層	層位
				1	表土(盛土)	
		b	オリーブ灰色粘土	2	灰黄色粘土(水田耕作土)	
				3	茶褐色粘土	大溝Ⅲ層
1	黄灰色粘土	c	暗灰色粘土	4	暗灰色粘土	B層
2	灰色粘質土	d	灰白色粘土	5-1	青灰色粘土	C層
3	灰オリーブ色シルト	e	灰白色粘土	5-2	暗灰色粘土	C層
4	黄灰色粘土	f/g	灰色粘土 / 青灰色砂質粘土	5-3	青灰色粘土	C層
5	灰色粘土			6	黒灰色粘土	D層
6	褐灰色粘土	h	褐灰色粘土			D層
		h'	青灰色粘土(褐灰色粘土ブロック含む)			D層
		h''	褐灰色粘土(炭化物・土器含む)			D層
7	黒色粘土(泥炭・ビート)層	i	黒褐色粘土(ビート層)	7	黒色有機質粘土	
8	灰色粘土					
9	灰色粘土(腐植物ラミナ)	j	青灰色微砂	10	青灰色微砂	
10	黒色粘土(腐植物含む)					
11	灰色粘土(腐植物ラミナ)					
12	黒色粘土(泥炭)					
13	黒褐色粘土(腐植物含む)					

5 D区伊場大溝兩岸の調査

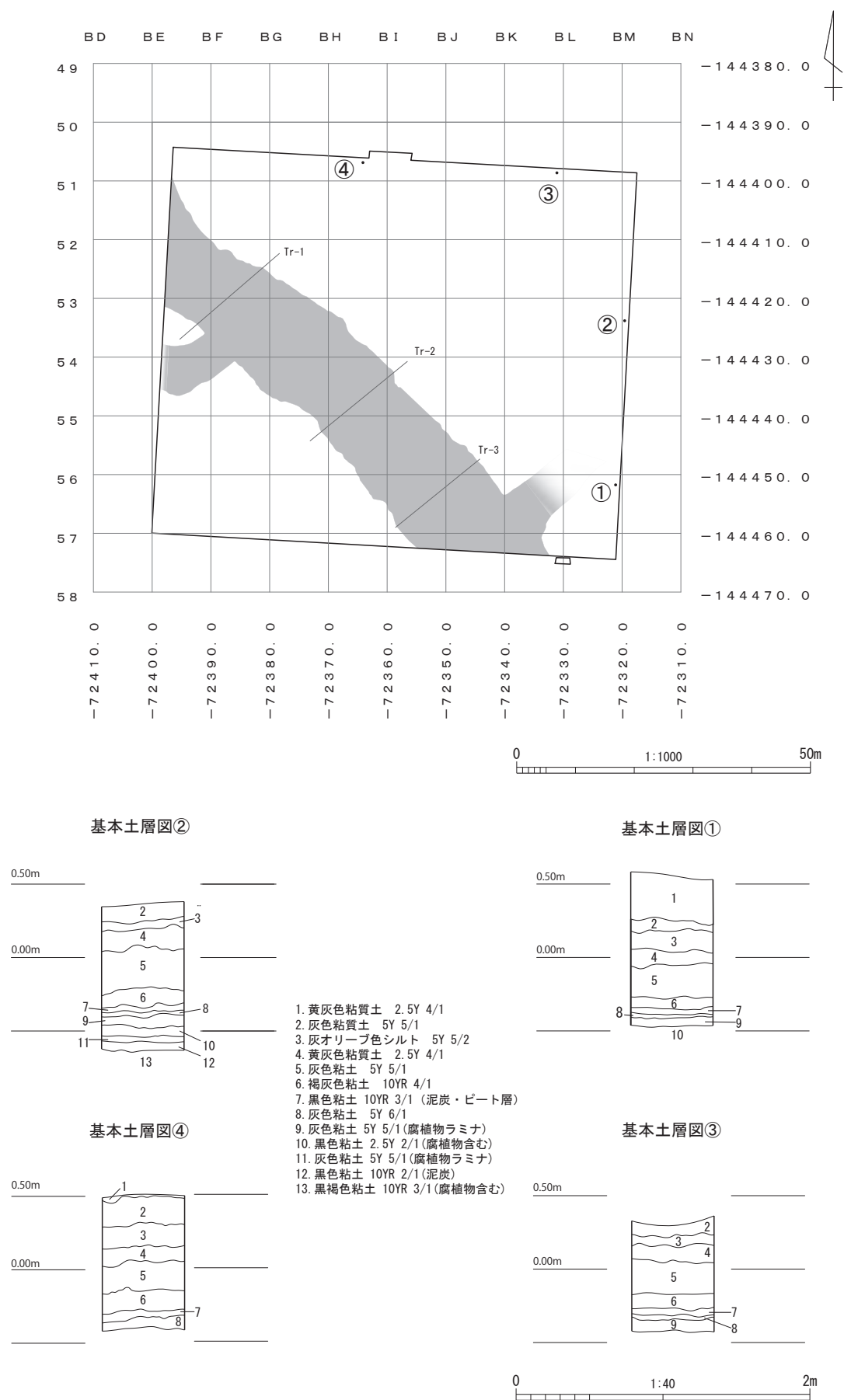


Fig. 41 D区 グリッド配置図・土層柱状図



Fig. 42 D区 遺構全体図

褐色を帯びる。4層同様に緩やかに西方向と南方向に下がる。6層は鍵層となる7層、黒色粘土(泥炭・ピート)層の漸移層と考えられる。6層は褐灰色粘土層である。標高-0.3 m前後で観察された。7層は標高-0.25 ~ -0.35 mで観察できた黒色粘土層でいわゆる、鍵層であるピート層(泥炭層)である。部分的に腐植物などの有機物を含み色相は多少変化する。7層上面が下層の遺構検出面となる。層厚は0.1 m程で当調査区では東西南北すべてにおいて確認した。南方向に標高は緩やかに下がる。相当する層は、21次調査では北西側A地点では標高0.8 mでi層と称されている黒褐色粘土(ピート層)が確認されている。当調査区のそれとほぼ1 m近くの比高差があるが、水平方向の100 mに対して1 mの比高差であるため、傾斜角は3.5° 前後となり北西方向が微高地であると推察できる。北東側の15次調査B区においては、ほぼ同じ標高である-0.25 mで確認されている。層厚は同様に薄く0.1 mに満たない。8層以下は漸移層があるものの、主として灰色系の粘土と黒色系の有機物を含む粘土の互層となるが無遺物層である。基盤層(地山)となる青灰色(微)砂層は、15次調査の10層、21次調査のj層に相当するが、当調査区においては伊場大溝(SD01)の底面である標高-1.85 m前後で確認できたのみである。

(3) 下層遺構の調査

下層の調査は、伊場大溝北岸全体を行った。南岸では確認トレンチを設定し、掘削を行ったが遺構、遺物は検出されていない。検出した遺構は、溝跡18条、土坑13基、小穴(ピット)4基である。遺構検出面は7層上面であるが、検出した遺構の中には、出土した遺物の時期を考えると上層の遺構も含まれている。溝跡の検出状況は、主軸はN-30 ~ 40° -Eで北東・南西方向に向かって直線的に延びるものと蛇行しながら延びるものが確認される。土坑の埋土はいずれもブロック状を呈する。これは、伊場遺跡群における弥生時代後期の遺構に類似するため、本調査で検出された土坑も弥生時代後期に帰属すると考えられる。遺物は出土していない。

① 溝跡

SD1001 (Fig. 43) 調査区北西部のBL50・51グリッドに位置する。遺構の北東隅は調査区外へ延びる。検出長は3.60 m、幅は0.48 m、深さは0.08 m、主軸はN-40° -Eで直線的であるがやや蛇行する。断面形は皿状を呈する。埋土は単層で炭化物を微量含む。遺物は出土していない。

SD1005 (Fig. 43・45) 調査区南東部のBK55・56、BL54・55、BM54グリッドに位置する。遺構の北東隅は調査区外へ延びる。検出長は26.40 m、幅は0.56 m、深さは0.23 m、主軸はN-31° -Eで直線的に延びる。断面形は台形状を呈する。埋土は単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックの混合土である。遺物は出土していない。

SD1006・1007 (Fig. 43・45) 調査区南東部のBK54・55グリッドに位置する。SD1006の検出長は6.80 m、幅は0.34 m、深さは0.13 mで南西方向から東方向へ弧状に延びる。SD1007の検出長は8.20 m、幅は0.34 m、深さは0.09 m、主軸はN-42° -Eで直線的ではあるがやや蛇行する。SD1006・1007は接続しているが新旧関係は認められなかった。埋土は両遺構ともに単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックを含む。遺物は土師器が出土したが小片のため図示していない。

SD1008 (Fig. 43・47) 調査区南東部のBL54グリッドに位置する。検出長は4.14 m、幅は0.22 m、

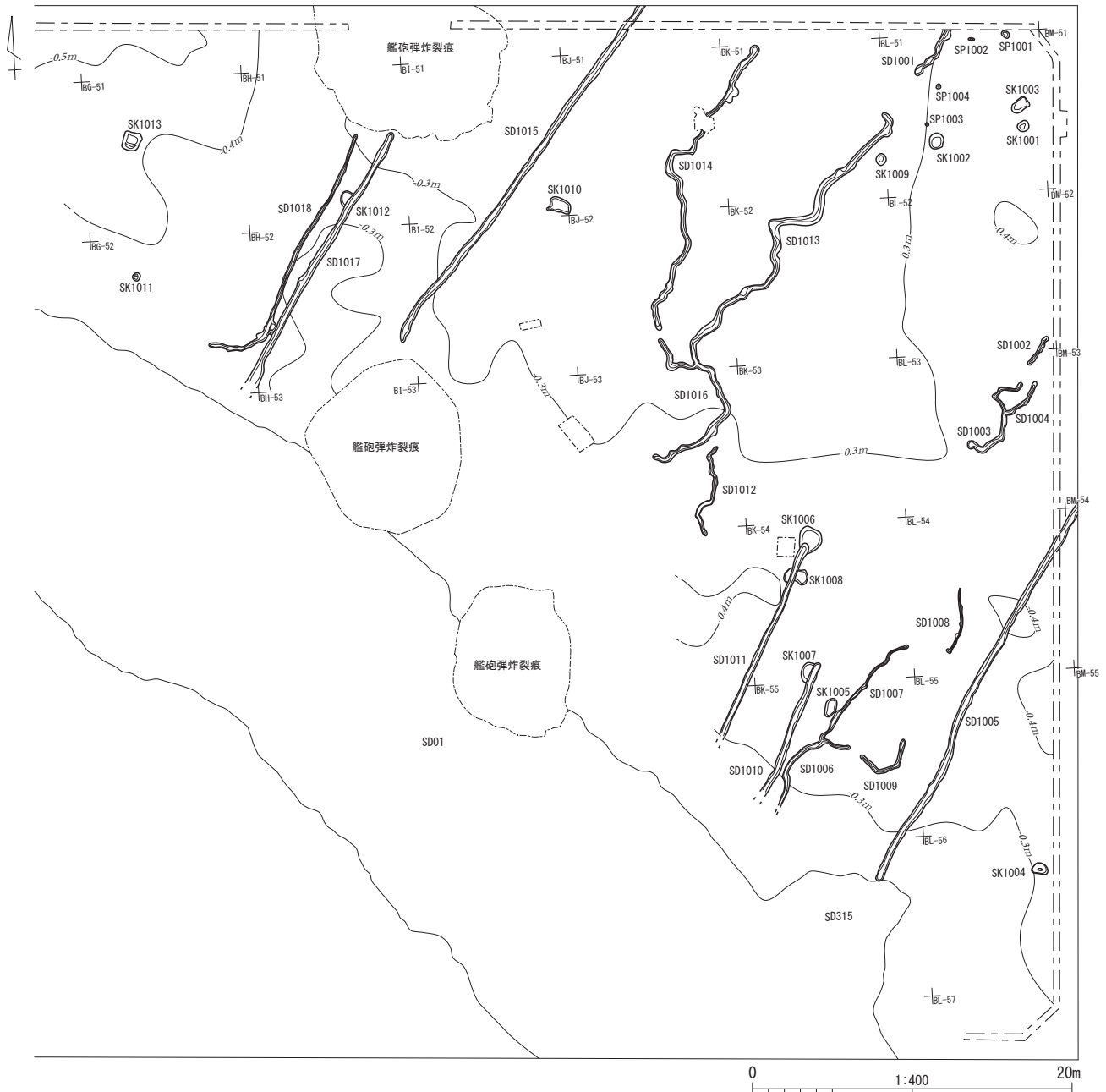


Fig. 43 D区 下層 遺構全体図

深さは0.06 mでほぼ南北方向に延びる。遺物は須恵器や土師器が出土しており、坏身（1）1点を図示した。出土した遺物から上層の遺構と考えられる。

SD1009 (Fig. 43) 調査区南東部のBK55グリッドに位置する。検出長は4.80 m、幅は0.30 m、深さは0.16 mで北に開放するコ字状を呈する。遺物は出土していない。

SD1010 (Fig. 43) 調査区南東部のBK54・55に位置する。SK1007を切る。検出長は9.00 m、幅は0.50 m、深さは0.16 m、主軸はN-27° -Eで直線的に延びる。埋土は単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックを多量含む。遺物の出土はないが断面観察から上層の遺構と考えられる。

SD1011 (Fig. 43) 調査区南東部のBJ54・55、BK54グリッドに位置する。SK1006・1008を切る。検出長は1.31 m、幅は0.49 m、深さは0.26 m、主軸はN-26° -Eで直線的に延びる。埋土は単層で、灰白色粘土・黒色ブロックを多量含む。遺物の出土はないが断面観察から上層の遺構と考えら

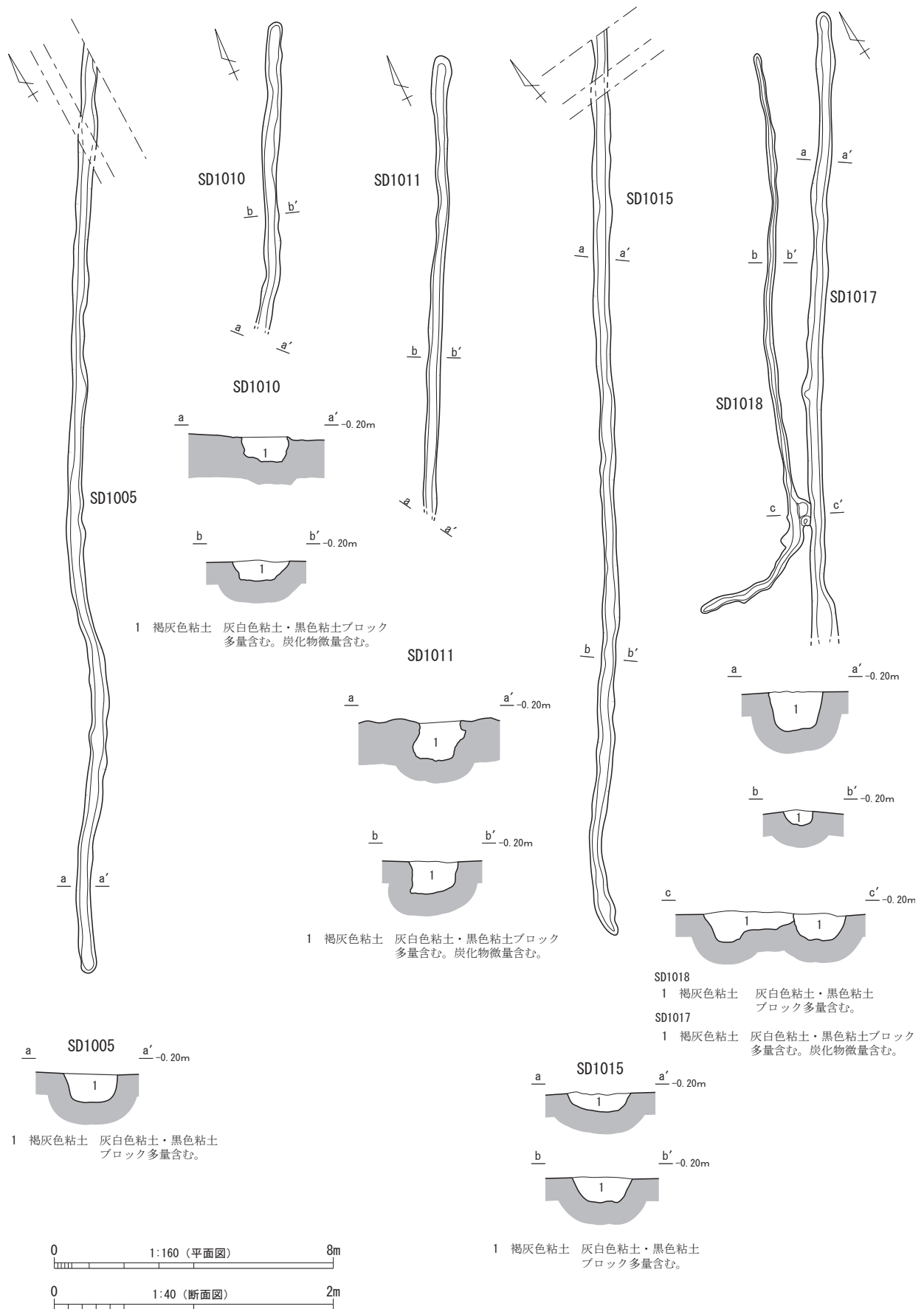


Fig. 44 SD1005・1010・1011・1015・1017・1018 実測図

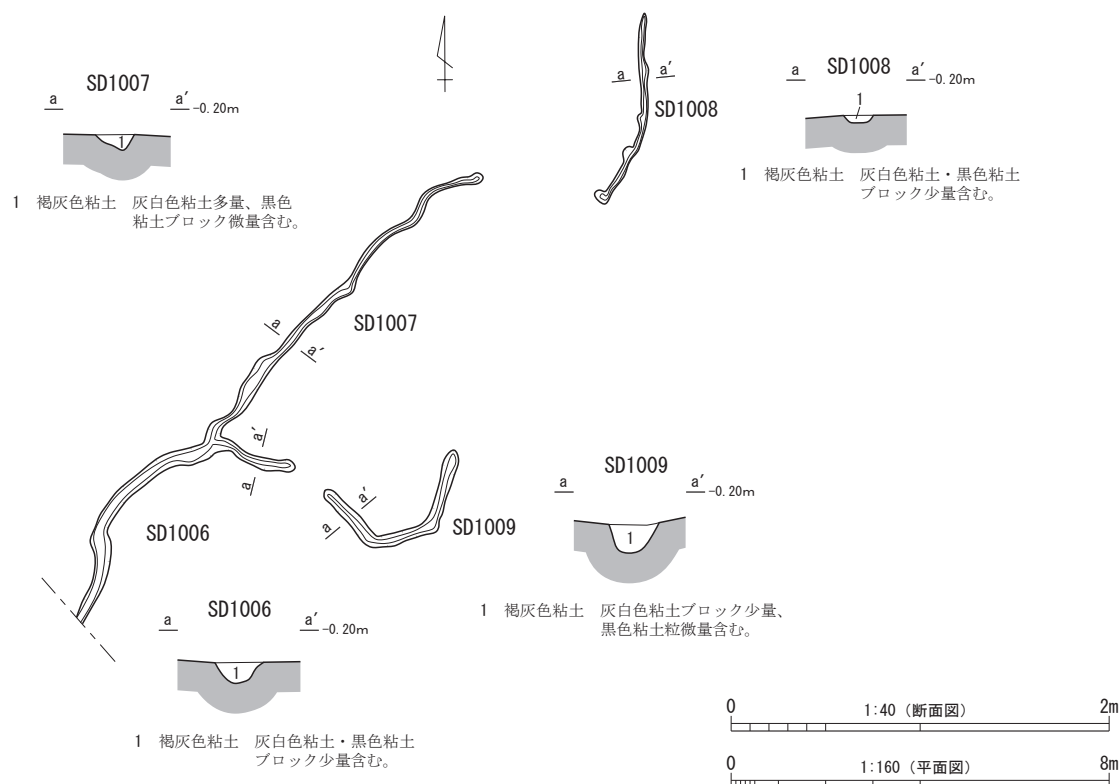


Fig. 45 SD1006 ~ 1009 実測図

れる。SD1010 との断面観察、埋土など類似点がみられることから同時期の遺構であると考えられる。

SD1012 (Fig. 46) 調査区中央部の BJ53 グリッドに位置する。検出長は 5.60 m、幅は 0.24 m、深さは 0.13 m で南北方向にやや蛇行するかたちで延びる。遺物は出土していない。

SD1013・1016 (Fig. 46・47) 調査区北東部の BJ52・53、BK51・52、BL51 グリッドに位置する。SD1013 の検出長は 19.80 m、幅は 0.48 m、深さは 0.18 m で北東・南西方向へ蛇行しながら延びる。SD1016 の検出長は 12.20 m、幅は 0.48 m、深さは 0.14 m でやや蛇行しながら湾曲する。SD1013・1016 は接続するが、新旧関係は認められない。遺物は SD1013 から土師器が出土したが小片のため図示していない。SD1016 から須恵器（2）が出土した。出土した遺物から、SD1016 は上層に帰属する遺構と考えられる。

SD1014 (Fig. 46) 調査区北部の BJ51・52、BK51 グリッドに位置する。検出長は 19.40 m、幅は 0.48 m、深さは 0.17 m で北東・南西方向へ蛇行しながら延びる。遺物は出土していない。近接する SD1012・1013・1016 は埋土、遺構形状と類似する点がみられ同時期の遺構と考えられる。

SD1015 (Fig. 44) 調査区北部の BH52、BI51・52、BJ50・51 グリッドに位置する。北隅は調査区外へ延びる。検出長は 25.70 m、幅は 0.50 m、深さは 0.16 m、主軸は N-39° -E で直線的に延びる。埋土は単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックを多量含む。遺物は出土していない。

SD1017 (Fig. 44) 調査区北西部の BG52、BH51・52 グリッドに位置する。SD1018、SK1012 を切る。検出長は 17.90 m、幅は 0.48 m、深さは 0.29 m、主軸は N-32° -E で直線的に延びる。埋土は単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックを多量含む。遺物は出土していない。

SD1018 (Fig. 55) 調査区北西部の BG52、BH51・52 グリッドに位置する。SD1017 に切られる。検

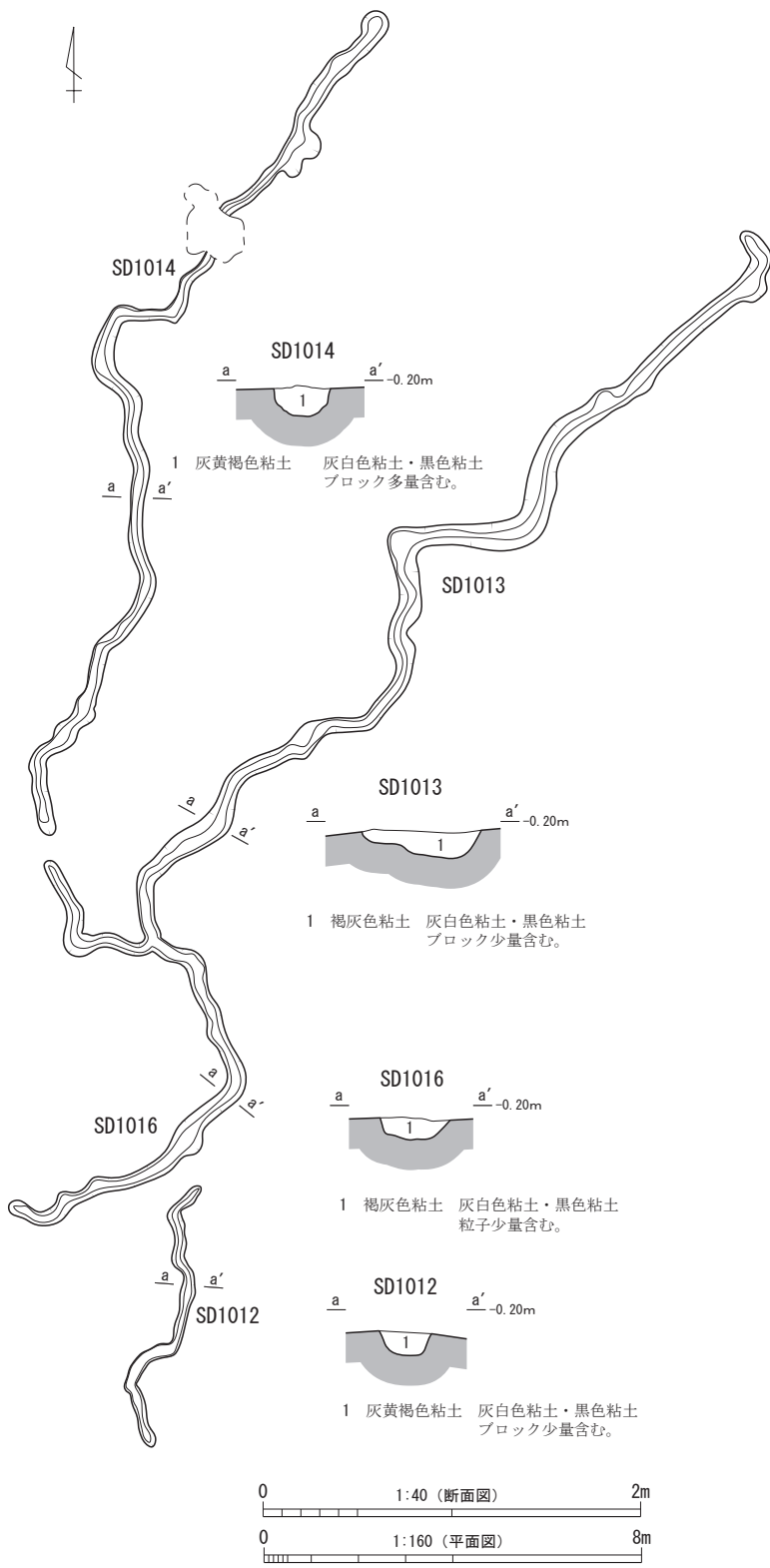


Fig. 46 SD1001・1012～1014・1016 実測図



Fig. 47 SD1008・1016 出土遺物

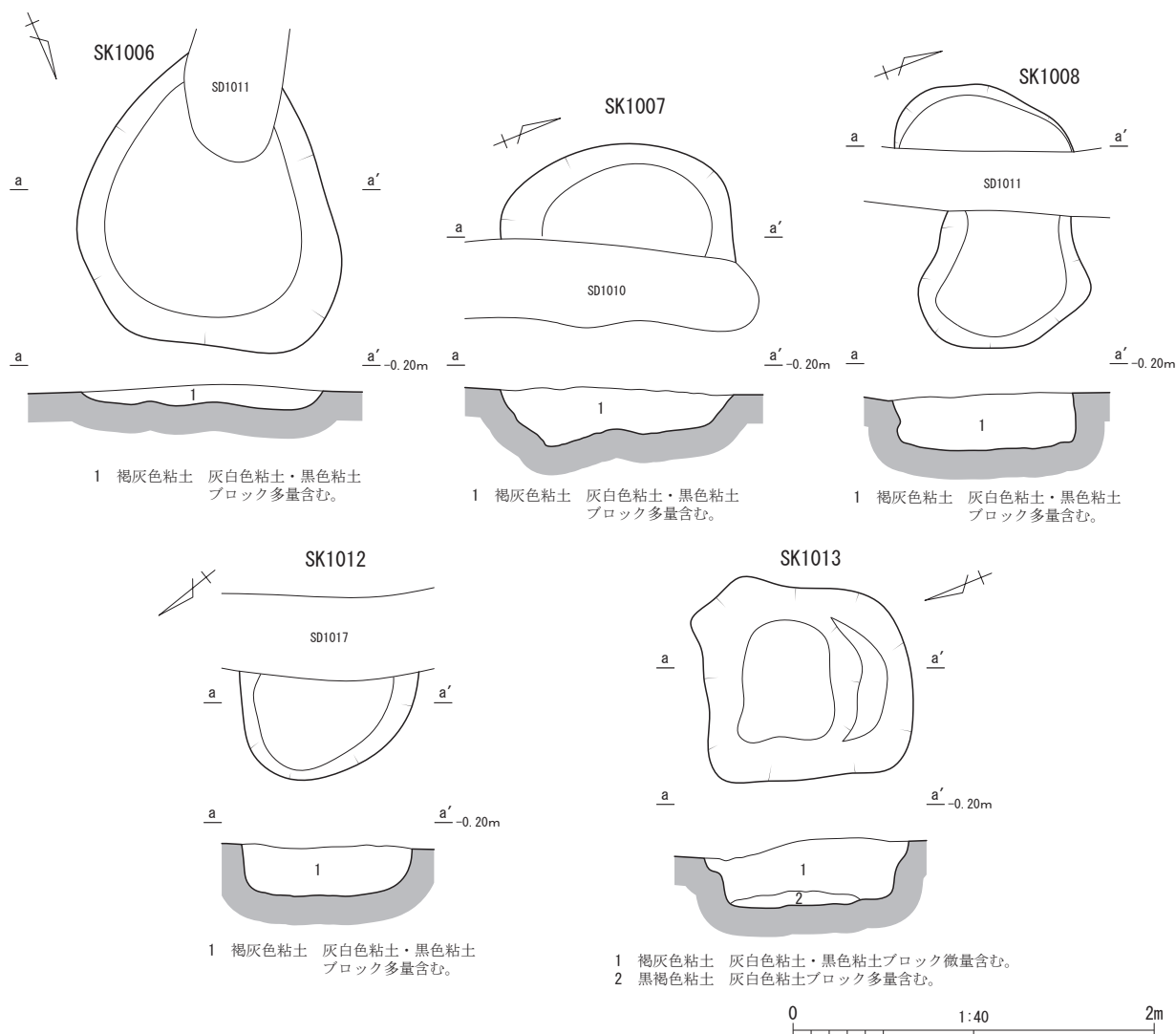


Fig. 48 SK1006～1008・1012・1013 実測図

出長は 17.40 m、幅は 0.28 m、深さは 0.11 m、主軸は N-29° -E で北から直線的に延びた後、西に湾曲する。埋土は単層で灰白色粘土・黒色粘土ブロックを多量含む。遺物は出土していない。

②土坑

SK1006 (Fig. 48) 調査区東部の BK54 グリッドに位置する。SD1011 に切られる。平面形は不整な楕円形で断面形は皿状を呈する。埋土は単層の褐灰色粘土で白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを主体で含む。ピート層より掘り込まれている。遺物は出土していない。

SK1007 (Fig. 48) 調査区東部の BK54 グリッドに位置する。SD1010 に切られる。平面形は SD1010 に切られているが、楕円形と考えられる。断面形は皿状を呈する。埋土は単層の褐灰色粘土で白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを主体で含む。ピート層より掘り込まれている。遺物は出土していない。

SK1008 (Fig. 48) 調査区東部の BK54 グリッドに位置する。SD1011 に切られる。平面形は不整な楕円形で断面形は箱状を呈する。埋土は単層の褐灰色粘土で灰白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを主体で含む。ピート層より掘り込まれている。遺物は出土していない。

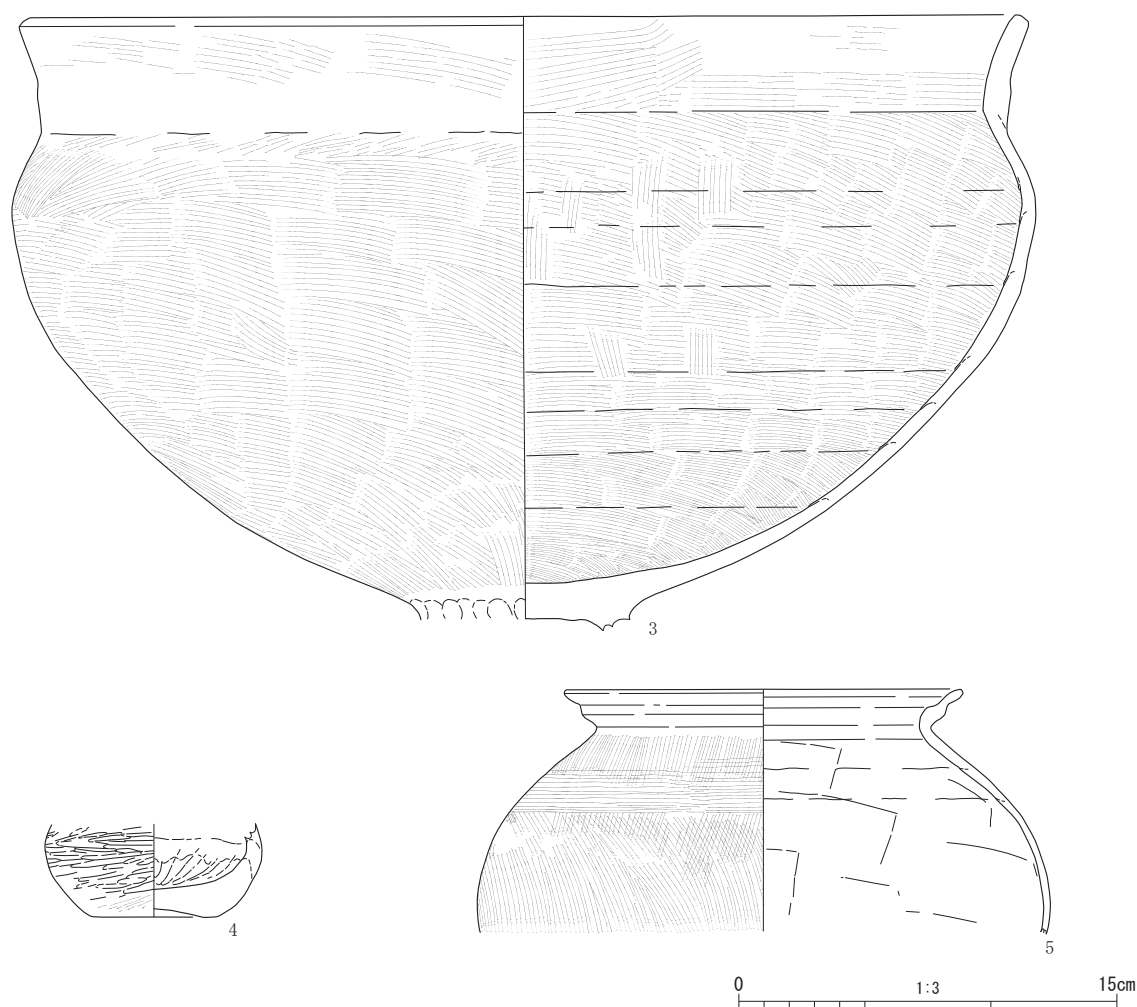


Fig. 49 遺構外出土遺物

SK1012 (Fig. 48) 調査区北西部のBH51グリッドに位置する。SD1017に切られる。平面形はSD1017に切られているが、楕円形と考えられる。断面形は箱状を呈する。埋土は単層の褐灰色粘土で灰白色粘土ブロック・黒色粘土ブロックを主体で含む。ピート層より掘り込まれている。遺物は出土していない。

SK1013 (Fig. 48) 調査区北西部のBG51グリッドに位置する。平面形は不整な円形、断面形は箱状を呈する。埋土は2層に分層され、灰白色粘土・黒色粘土ブロックを微量含む。2層では灰白色粘土ブロックを主体とする。遺物は出土していない。

③遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (Fig. 49) 遺物包含層より出土した遺物のうち、弥生土器 (3・4)、古式土師器 (5) の3点を図示した。

3は、台付甕で脚部を欠損している。口径が広く、体部上半がやや張り出し、口縁部は緩く外反する。内外面ともにハケメ調整が施される。4は、BH52グリッドの伊場D層相当より出土した。小型直口鉢で上半は欠損している。外面はミガキ調整が施される。3・5は、BG52グリッドの伊場C相当より出土した。5は、S字甕で下半を欠損している。外面はハケメ調整されたのち、体部上半にヨコハケが施される。古墳時代前期に位置づけられる。

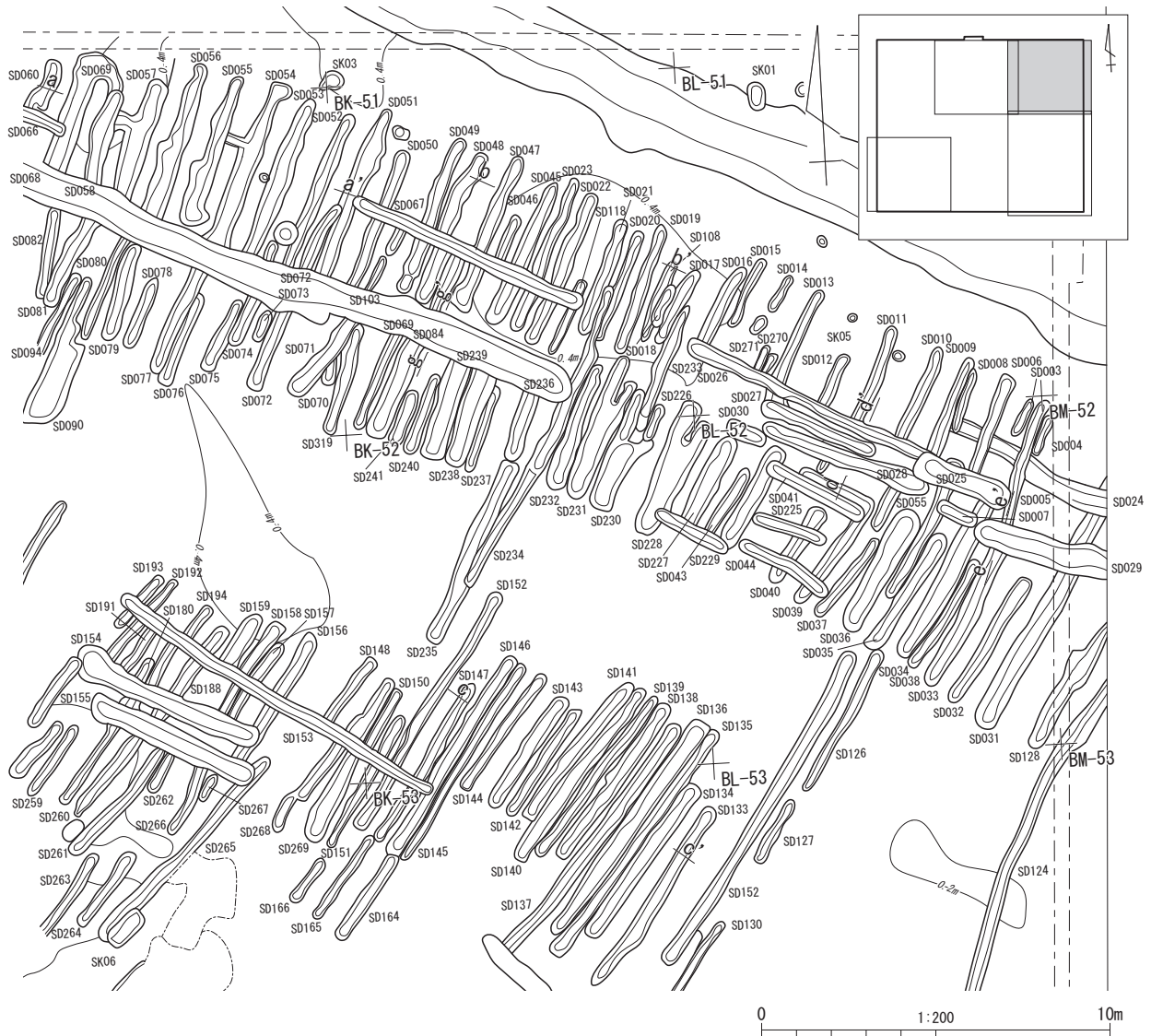


Fig. 50 D区 伊場大溝兩岸遺構全体図 北東部拡大図

(4) 上層遺構の調査

伊場大溝兩岸上層で検出した遺構は、掘立柱建物2棟、溝跡315条、土坑14基、小穴（ピット）281基である。検出面や出土した遺物を踏まえると伊場大溝Ⅶ層（6世紀中葉～7世紀後葉）に相当する時期に位置付けられる。溝跡は、北岸を主体に検出され、南岸では同規模・等間隔に延びる溝跡が検出される。これらの溝跡は、土坑・小穴に切られる。北岸は主軸をN-20～46°-Eの北東・南西方向に延びる溝跡が主体で、ほぼ同規模・等間隔で帯状に検出され、主軸をN-59～69°-Eの北西・南東方向に延びる溝跡に切られる。南岸では、主軸を概ねN-40～45°-Eの北東・南西方向に延びる溝跡を土坑・小穴が切る。溝跡の検出状況を考えると耕作に伴う遺構であると考えられる。土坑、小穴は、その殆どが南岸に集中する。柱根、柱痕跡が確認される柱穴も散見される。ほとんどの土坑、小穴は溝跡を切る形で検出される。

①掘立柱建物

SH01 (Fig. 54) 調査区南西部のBE54・BE55グリッドに位置する。遺構の南西隅は調査区外となるため検出できなかった。梁行2間、桁行2間の側柱建物で、規模は2.6m×4.8mで検出面から

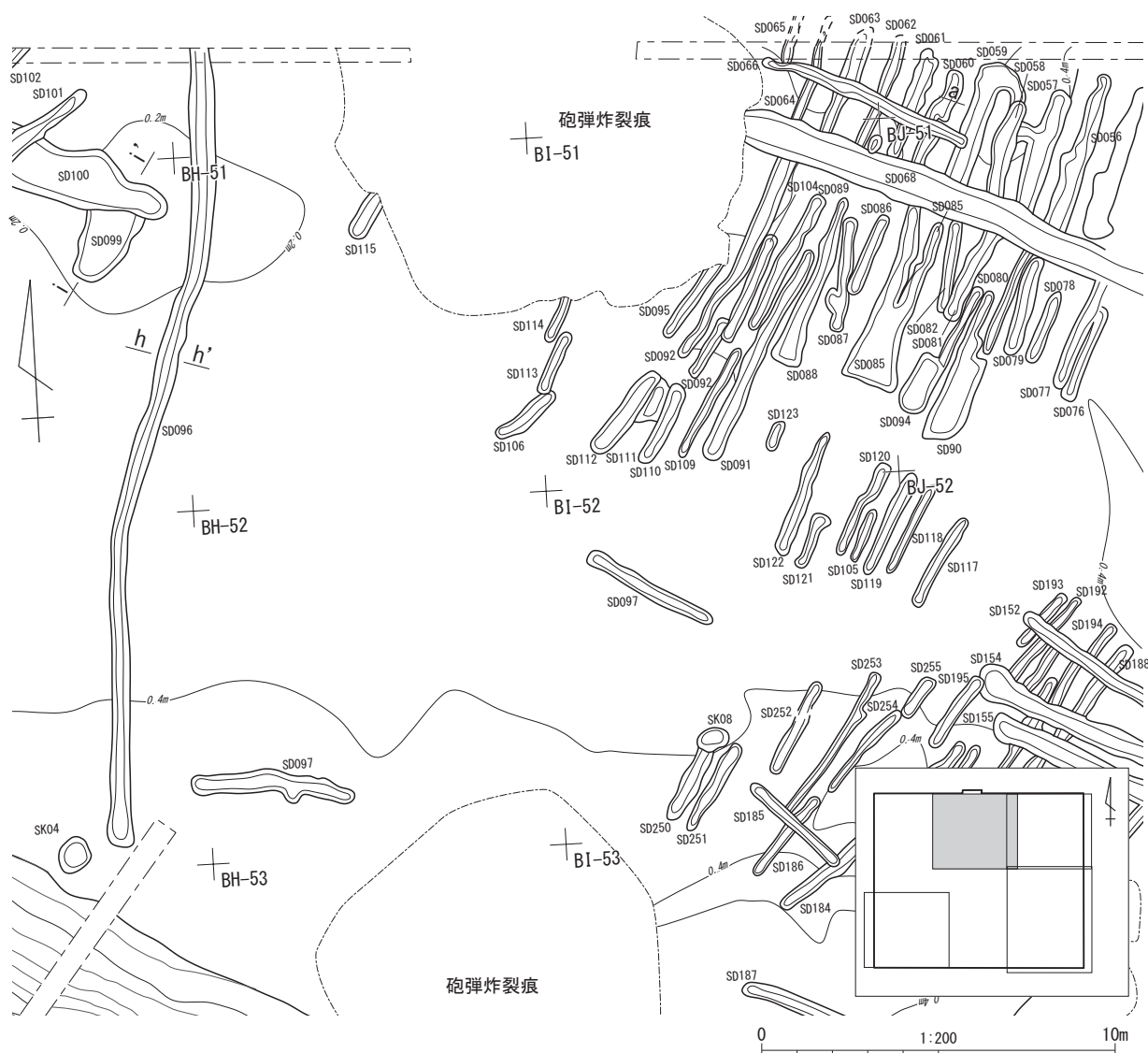


Fig. 51 D区 伊場大溝兩岸遺構全体図 北中央部拡大図

の深さは0.1 m～0.36 mである。SP198・199はSD274を切る。柱穴の平面形は、円形～楕円形である。柱穴は単層であるものが多く褐灰色粘質シルトが主体となる。遺物は土師器が出土しているが小片のため図示していない。

SH02 (Fig.54) 調査区南西部のBE55グリッドに位置する。遺構の南西隅は調査区外となるため検出できなかった。梁行1間、桁行3間の側柱建物で、規模は4.0×5.1 mで検出面からの深さは0.21 m～0.52 mである。SP29はSD273・SP30を切る。柱穴の平面形は、円形～楕円形である。柱穴は単層であるものが多く褐灰色粘質シルトが主体となり、それ以外のSP29は柱痕跡が確認される。

②溝跡

SD02 (Fig. 55) 調査区南東部のBK51・BK52・BL52グリッドに位置する。遺構の両端は調査区外へ延びる。検出長は24.7 m、幅は3.96 m、深さは3.96 m、主軸はN-64°-Wである。北西から南東へ直線的に延び、標高は緩やかに下る。断面形は概ね逆台形を呈する。埋土は6層に分層でき、2～3層にかけて須恵器が出土するが小片のため図示していない。

SD96 (Fig. 51・56) 調査区北部のBH50・BH51・BG51・BG52グリッドに位置する。遺構の北側は

5 D区伊場大溝両岸の調査

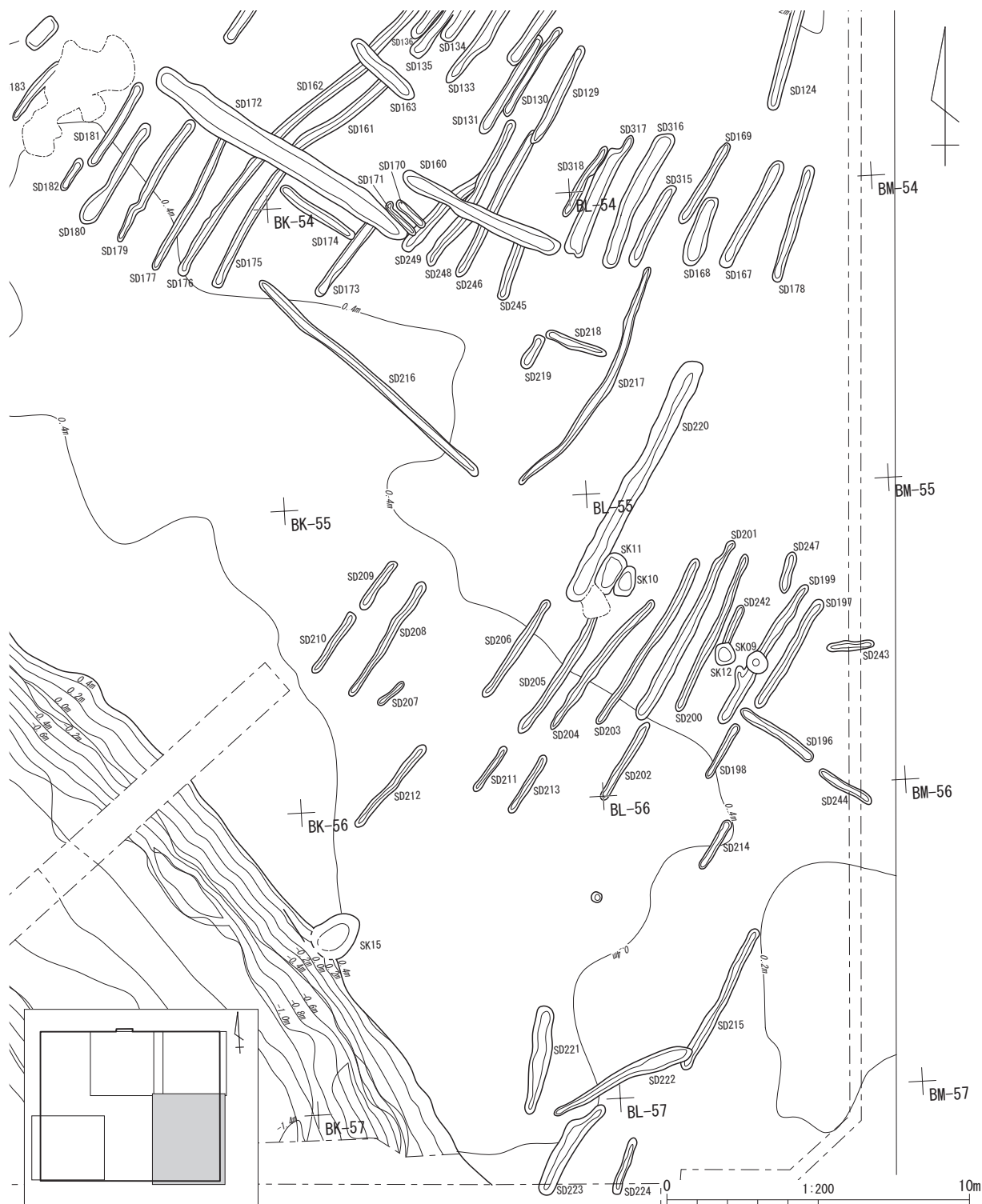


Fig. 52 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 南東部拡大図

調査区外へ延びる。検出長は23.9 m、幅は0.70 m、深さは0.17 m、主軸はN-9° -Eである。断面形は弧状を呈し、埋土は2層に分層される。遺物は須恵器(6)が出土している。6は、箱坏の破片で底部に墨書が記されている。文字の判読は欠損により困難であるが1文字確認できる。

SD100 (Fig. 51) 調査区北部のBG50・BG51グリッドに位置する。長さは6.32 m、幅は1.74 m、深さは0.12 m、主軸はN-81° -Wである。SD99を切りSD101・SD102に切られる。断面形は緩やかな弧状を呈し、埋土は単層である。遺物は出土していない。

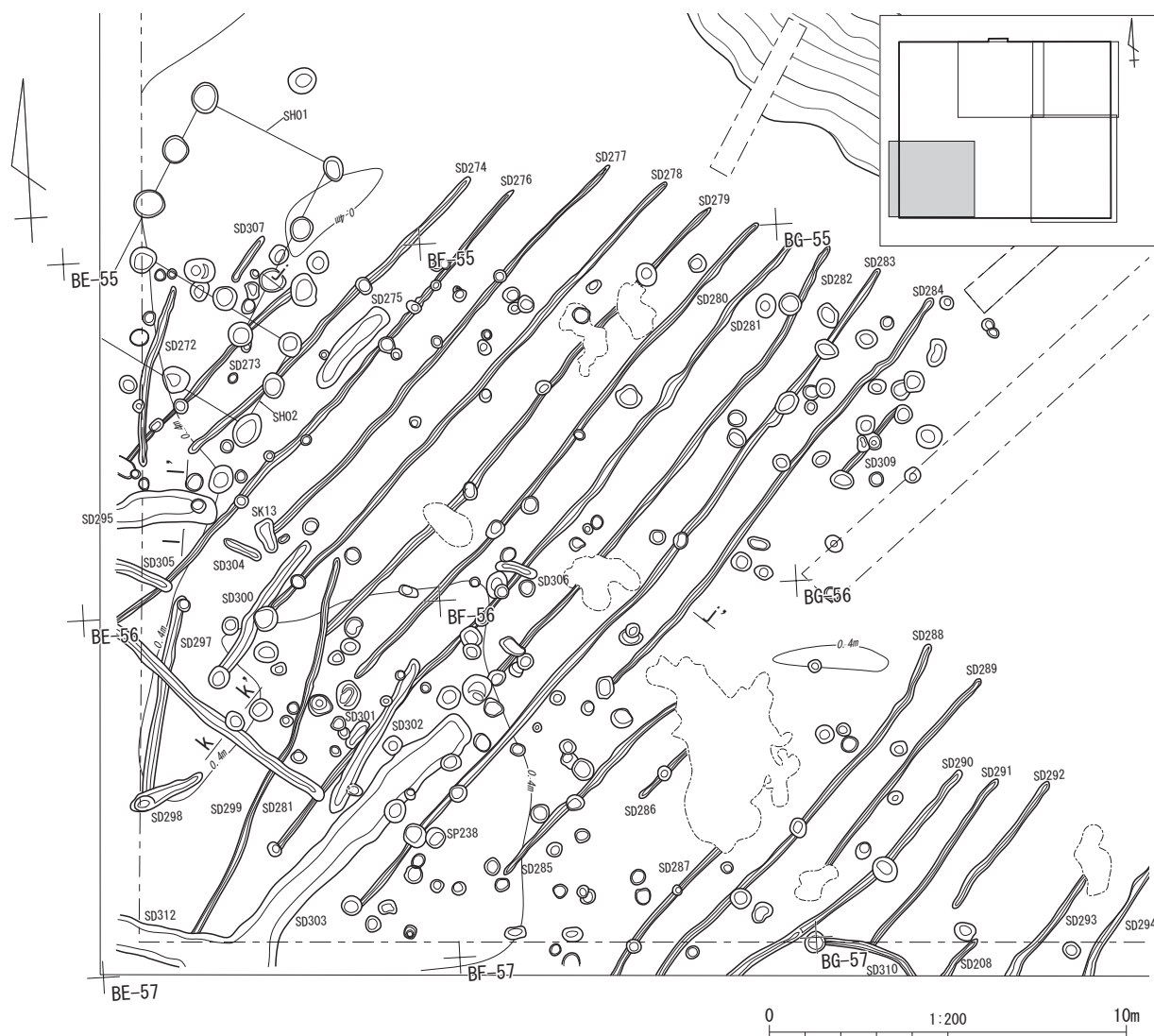


Fig. 53 D区 伊場大溝両岸遺構全体図 南西部拡大図

SD303・312 (Fig. 55・56) 調査区南西部のBE56・BF56 グリッドに位置する。SD303 とSD312 が接合する溝で、接合する東側とSD312の西側は調査区外へ延びる。SD303の検出長は9.45 m、幅は1.13 m、深さは0.12 m、主軸はN-49° -Eである。断面形は、不整形な逆台形を呈し埋土は2層に分層される。1層より須恵器の坏身(7)が出土している。SD312の検出長は4.6 m、幅は1.1 m、深さは0.11 m、主軸はN-73° -Wである。断面形は、緩い弧状を呈し埋土は2層に分層される。1層より須恵器(8)が出土している。8は、高坏で口縁部・脚部の先端を欠損している。

その他に個別で図示していない溝跡より出土した4点を示した。SD77は9、SD201は10、SD97は11、SD275は12が出土している。9は須恵器の坏身である。10は土師器の高坏で、坏部に稜を持ち、脚部は中空で屈曲して広がる。11は土師器の甕で、上半のみ残存している。内面はナデ調整が施されており、外面は摩耗のため調整痕が不明瞭である。12が土師器の鉢で口縁が内彎する。内面はナデ調整、外面はハケ調整が施される。

③土坑

SK02 (Fig. 60) 調査区北部のBJ51 グリッドに位置する。平面形は円形、断面形はU字形を呈する。埋土は2層に分層でき、褐灰色粘質シルトを主体とし、灰白色粘土ブロック、炭化物を含む。遺物

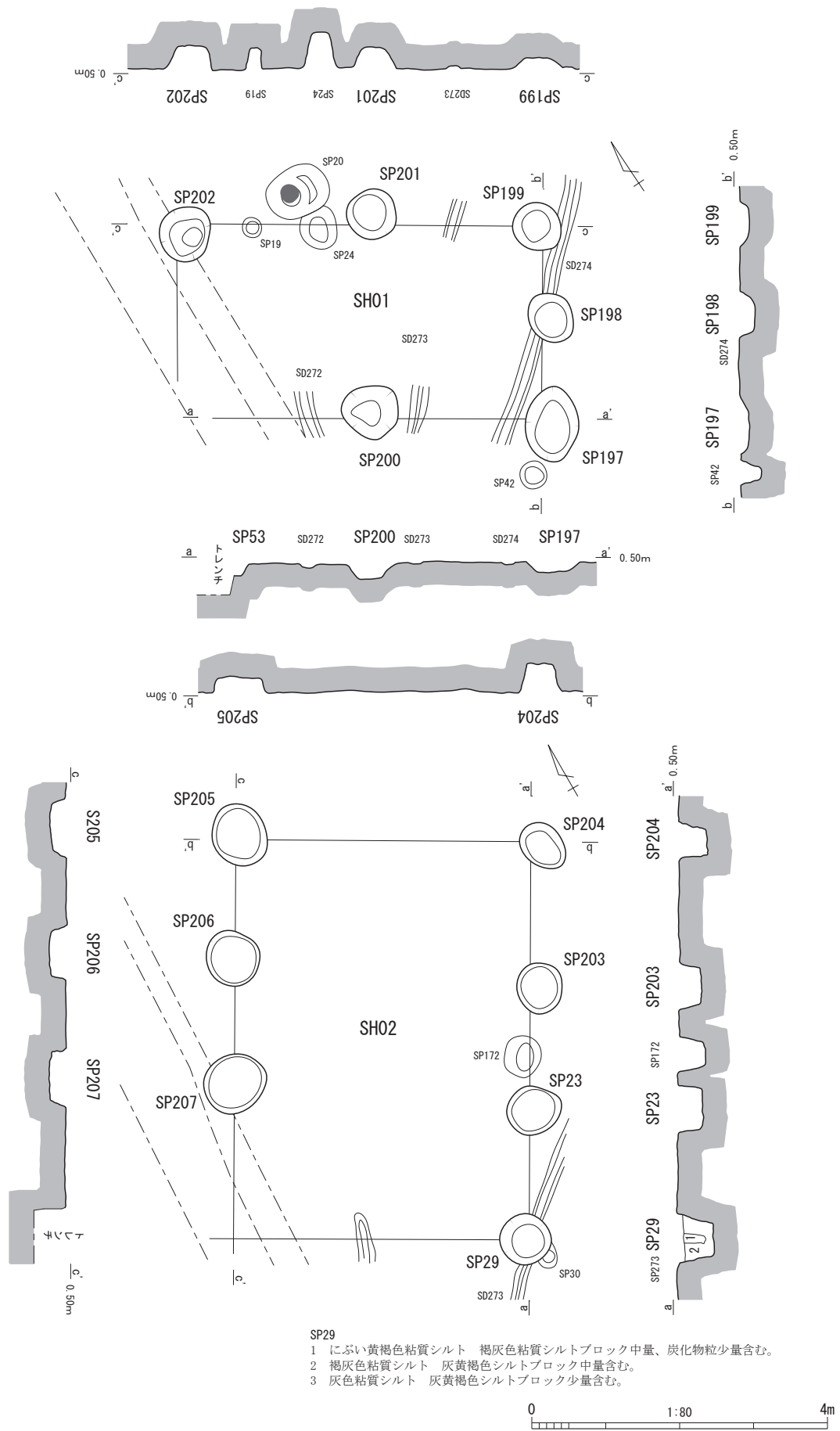


Fig. 54 SH01・SH02 実測図

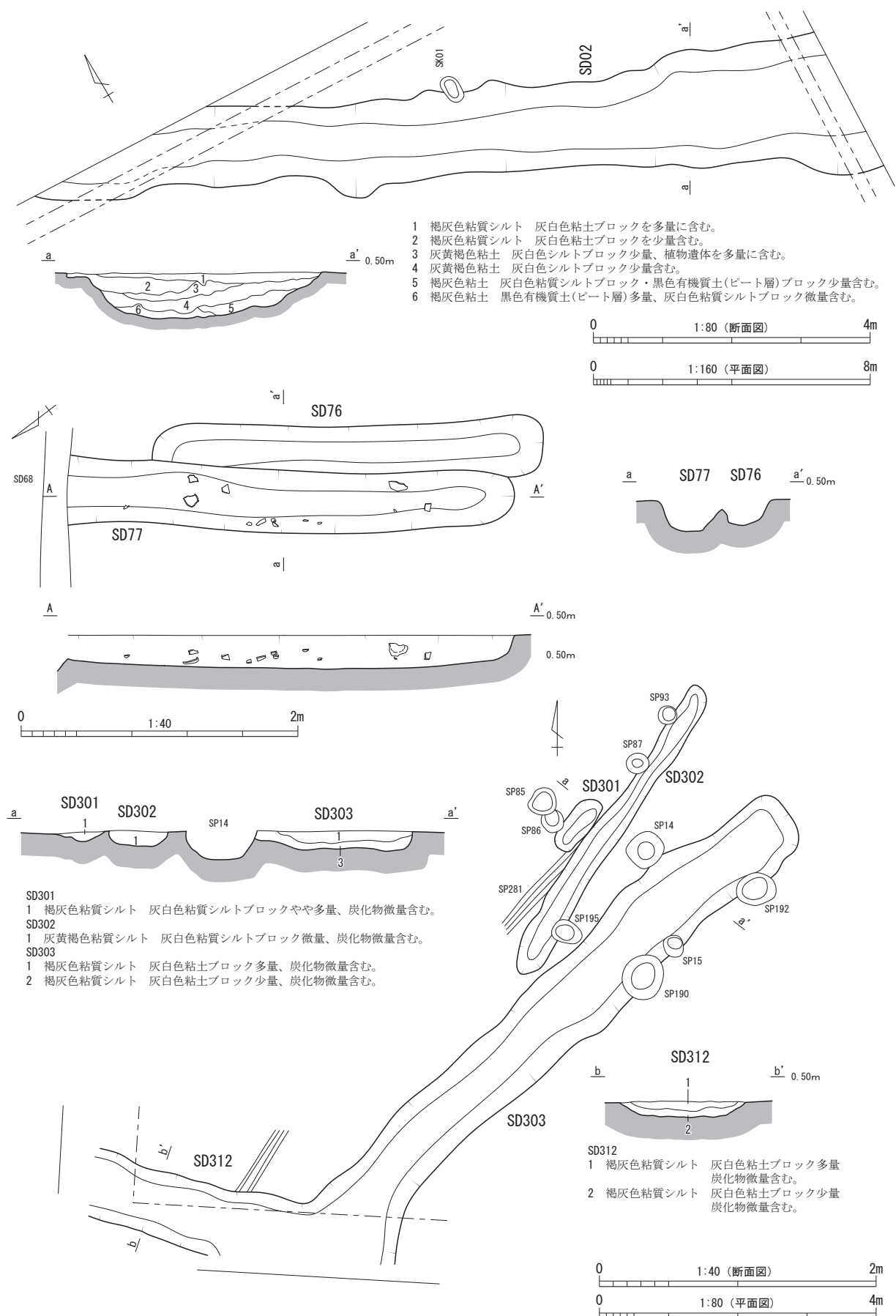


Fig. 55 SD02・76・77・301～303・312 実測図

5 D区伊場大溝両岸の調査

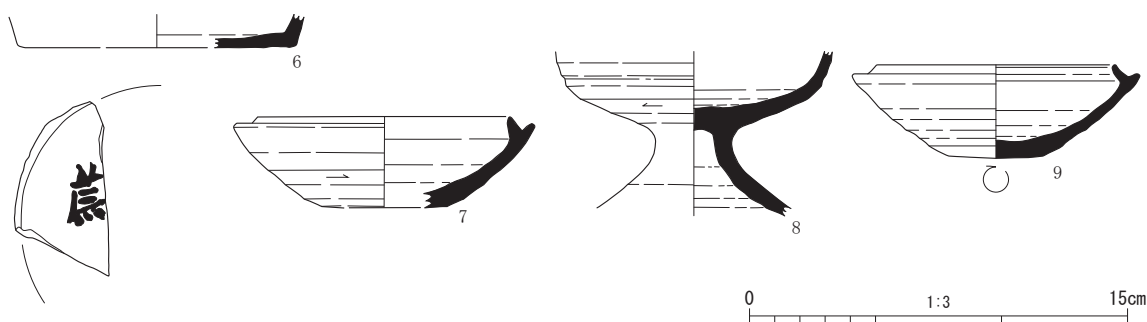


Fig. 56 SD77・303・312 出土遺物

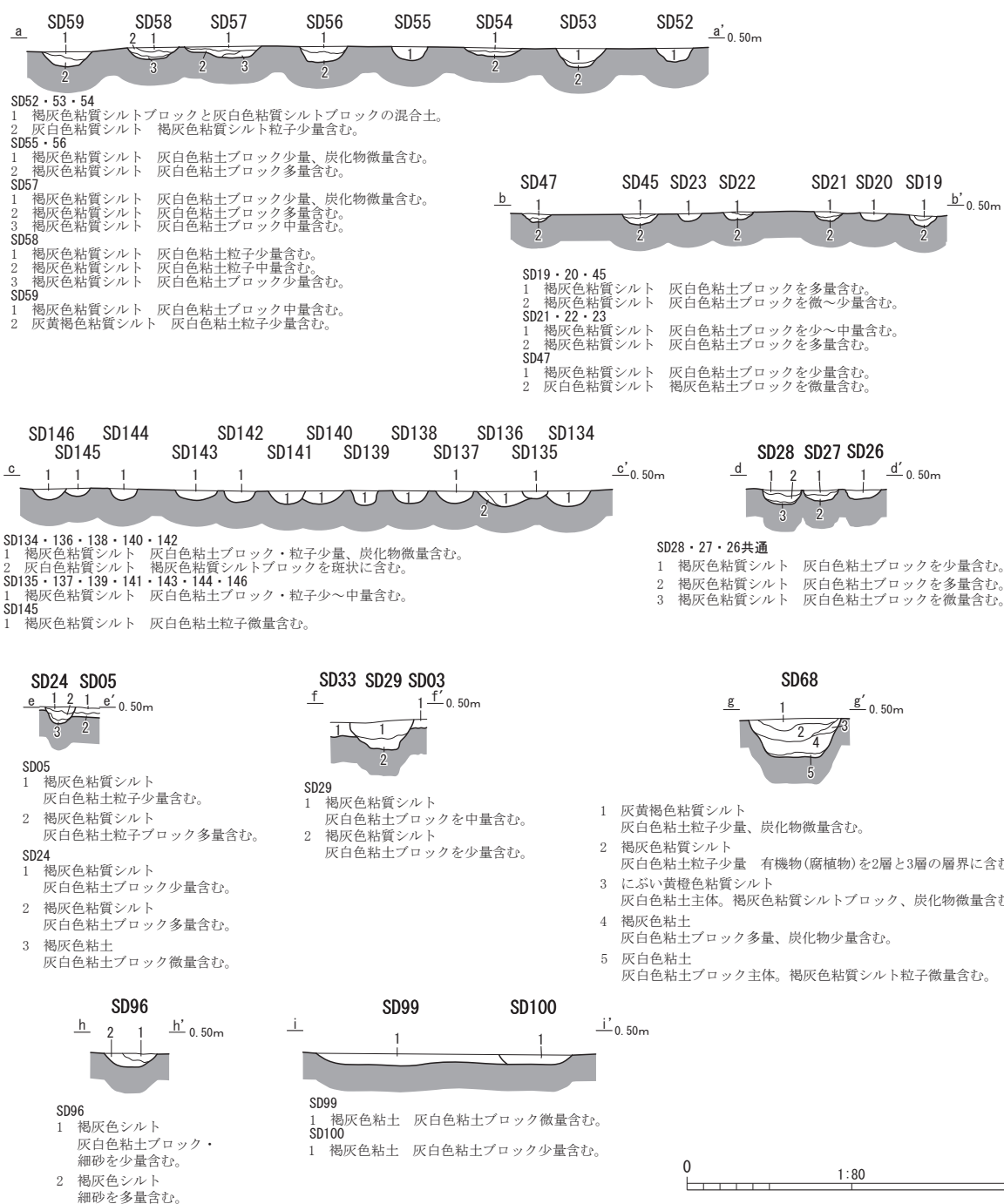


Fig. 57 SD03・05・19～24・26～29・33・45・47・52～59・68・96・99・100・134～146 実測図

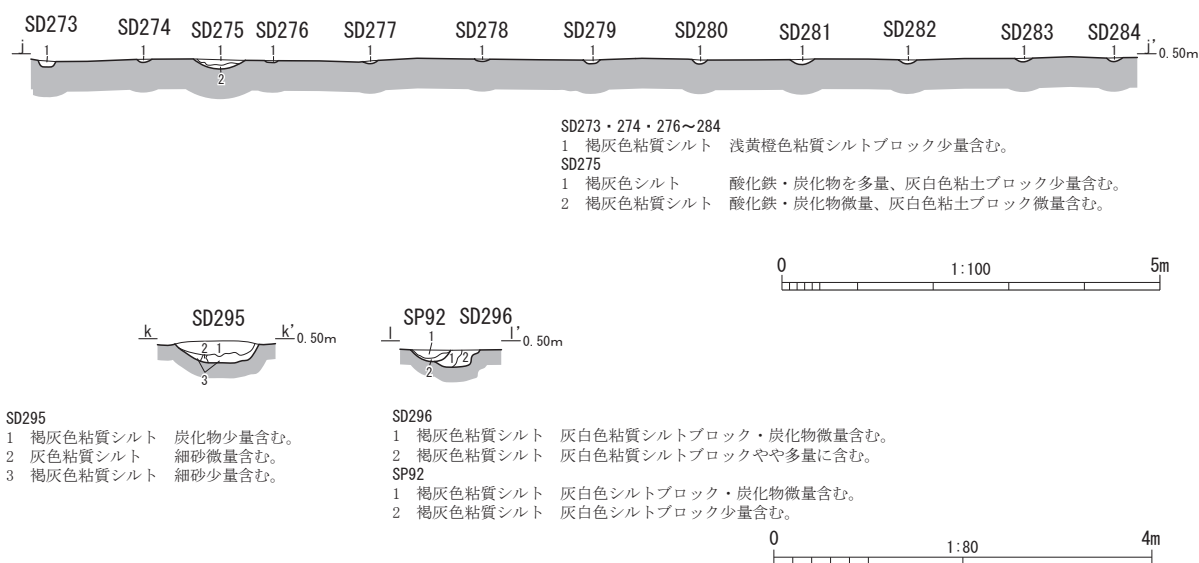


Fig. 58 SD273・274・275～284・295・296・SP92 実測図

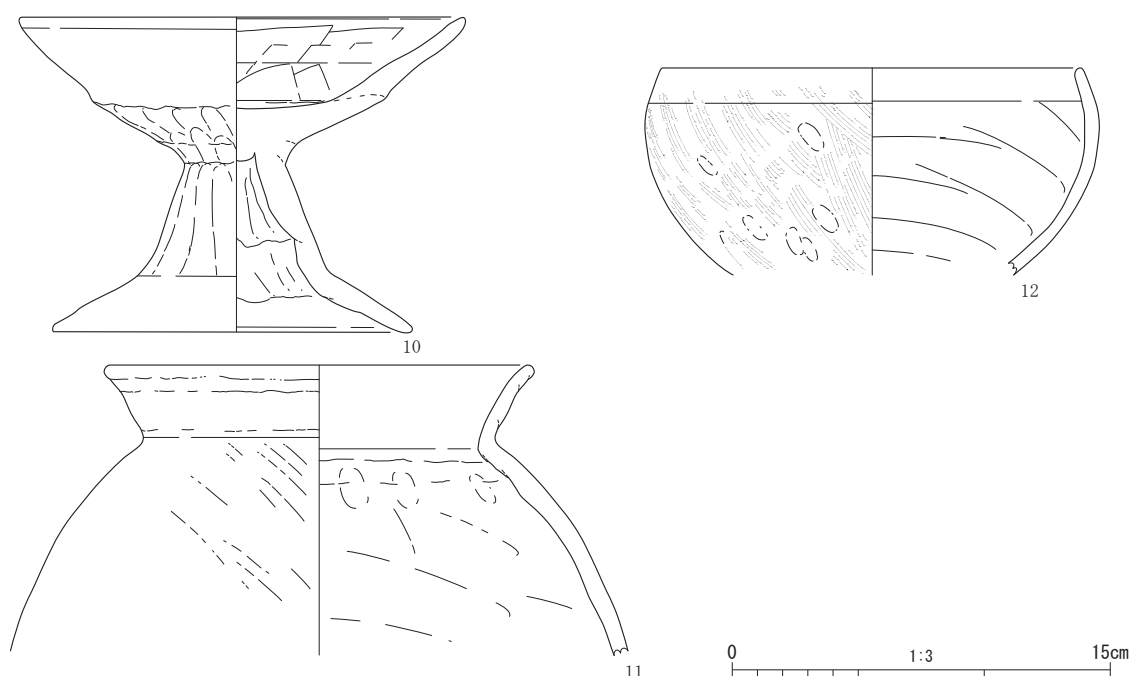


Fig. 59 SD97・201・275 出土遺物

は出土していない。

SK04 (Fig. 61) 調査区中央部の BG52 グリッドに位置する。平面形は不整形な円形、断面は皿状を呈する。埋土は単層で遺物は、土師器の把手 (13) が出土している。

SK10 (Fig. 60) 調査区南東部の BL55 グリッドに位置する。SK11 を切る。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈する。埋土は2層で炭化物を含む。遺物は出土していない。

SK11 (Fig. 61) 調査区南東部の BL55 グリッドに位置する。SD220 を切り、SK10 に切られる。平面形は楕円形で、断面形はU字形を呈する。埋土は2層で灰白色粘土ブロックを主体で含む。遺物は2層より土師器甕 (14) が出土している。体部の径に対して口径がやや狭い形状をなす。内外面ともに摩滅により調整が不明瞭である。

5 D区伊場大溝両岸の調査

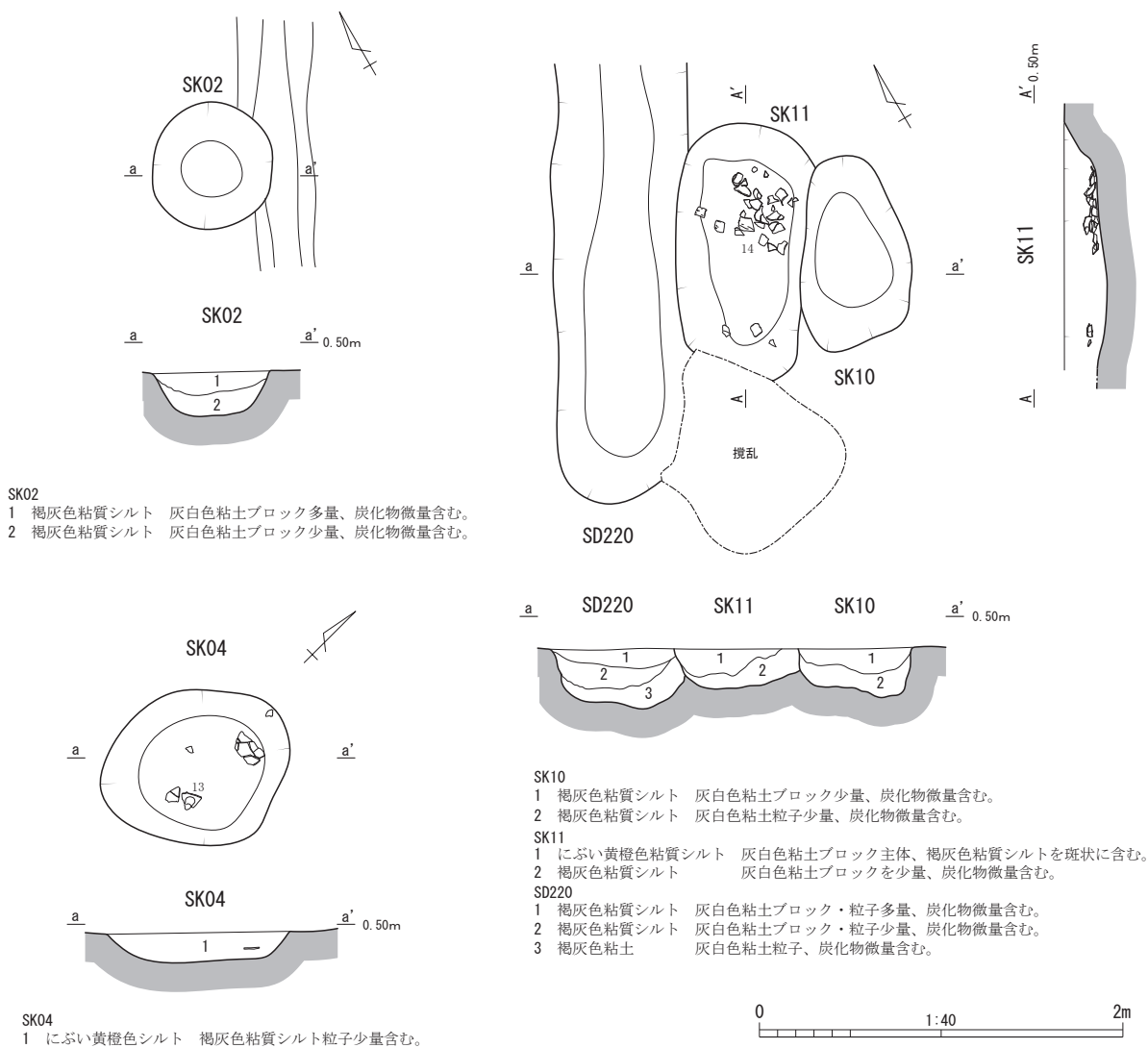


Fig. 60 SD220・SK02・04・10・11 実測図

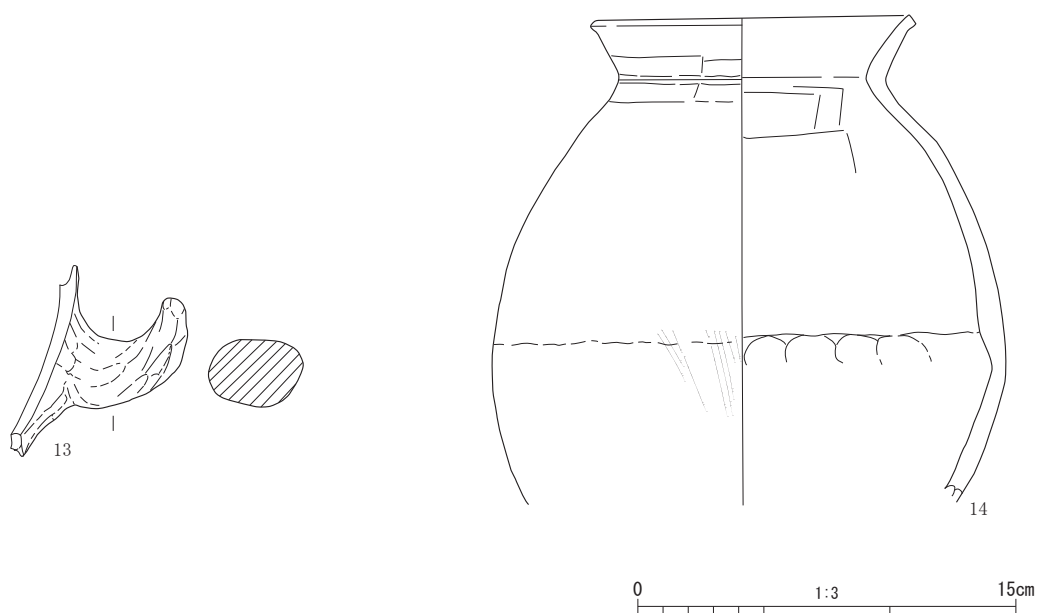


Fig. 61 SK04・11 出土遺物

④小穴

小穴 (Fig. 62 ～ 64) 柱根が残存する小穴のみ図示した。そのうち SP159・SP236・SP238 より出土した柱根は放射性炭素年代測定を行った。

SP12・214 より出土した須恵器・土師器の2点、SP157 (17)・SP159 (18)・SP234 (19)・SP236 (20)・SP238 (21)・SP253 (22) の木製品6点を図示した。SP12 より須恵器の坏身 (15) の破片が出土している。SP214 より土師器の台付甕 (16) が出土している。S字甕の脚部とも考えられる。小穴より出土した木製品は柱材で底部を平坦、あるいは多方向の側面より斜めに削り出している。

⑤遺構外出土遺物

遺構外出土遺物 (Fig. 65) 遺構外より出土した遺物の23～35を示す。須恵器、灰釉陶器、土師器、石製品が出土しており、灰釉陶器には墨書が記されている。

23～26は須恵器である。23は坏蓋である。24は無台碗の底部で、「廣」の1文字が記されている。25は、高坏である。脚部に方形のスカシが3方向あり、坏部に波状文が確認される。26は、壺の口縁部と推定される。27～33は灰釉陶器である。27は、底部に「足」の1文字が記されている。28は、内面に「井」が記されているが、外面の文字の判読はできなかった。29は、側面2箇所に墨書が記されているが、判読はできなかった。30は、底部に墨書が確認できるが判読はできなかった。31は側面に「得」の文字が記されている。32・33は、「足」の文字が記されている。34は土師器の甕である。35は凝灰岩製の砥石で、側面4面を砥面として使用している。

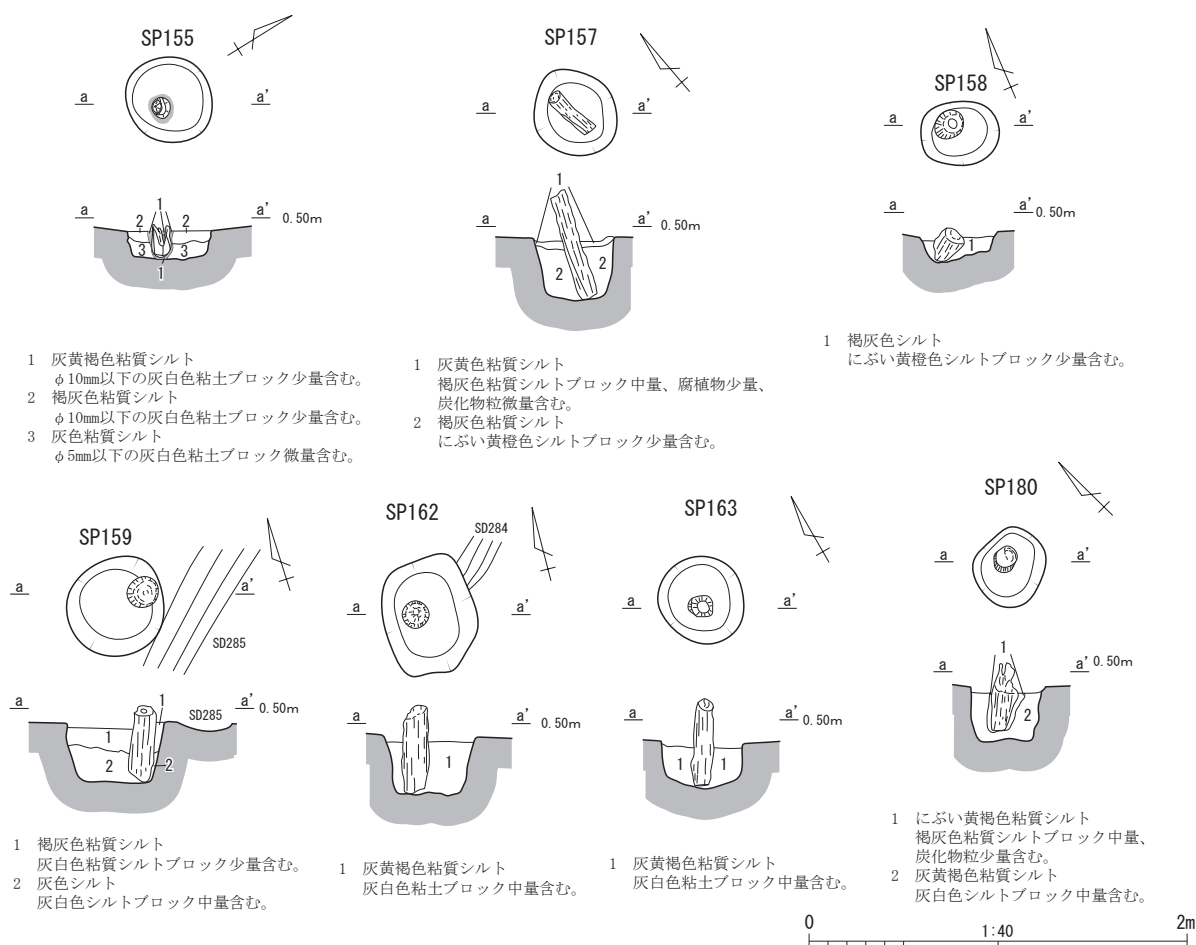


Fig. 62 SP155・157～159・162・163・180 実測図

5 D区伊場大溝両岸の調査

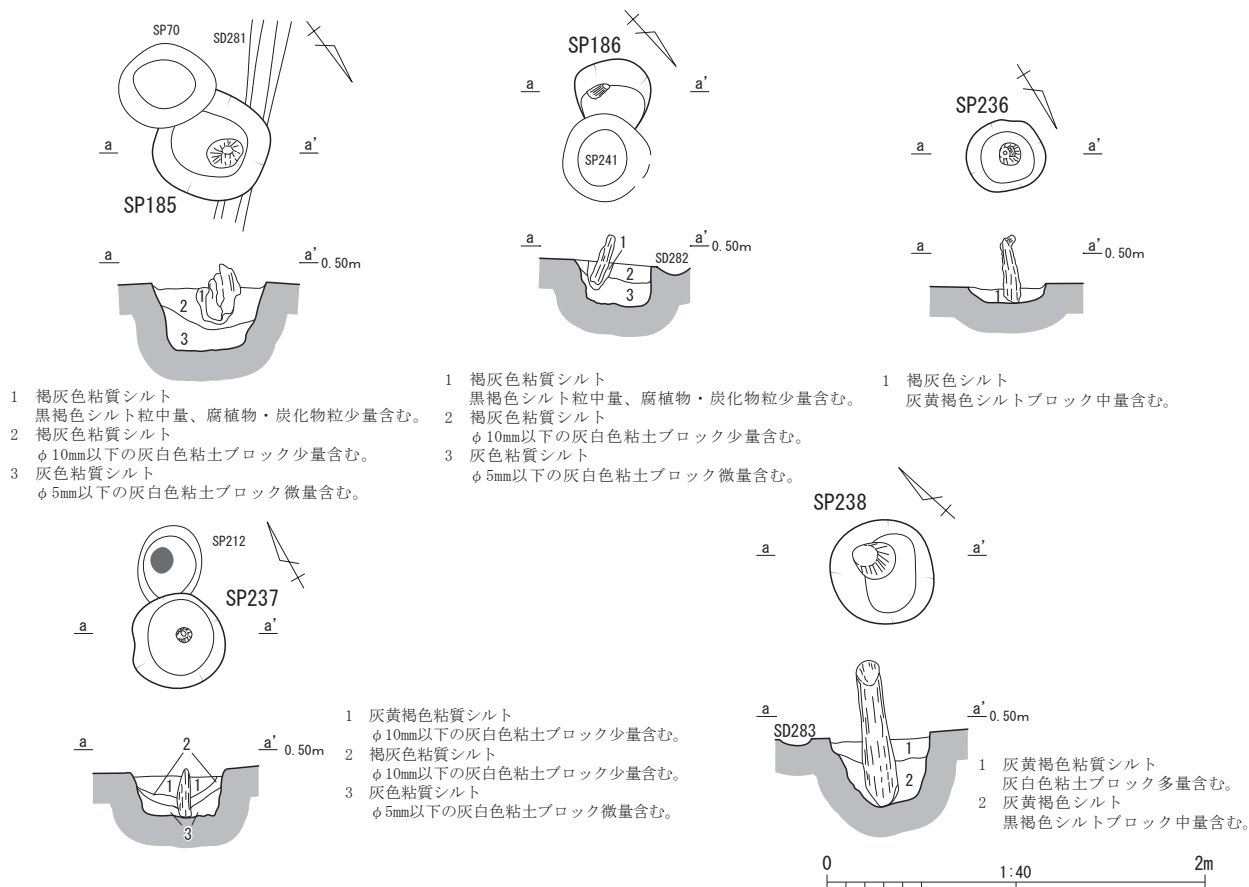


Fig. 63 SP185・186・236・237・238 実測図

(5) 小結

伊場大溝両岸の調査では、下層より溝跡や土坑、小穴を多数検出した。ピート層上面での遺構検出であるが、SD1010・1011は伊場C3層からの掘り込みが確認できることから古墳時代以降に帰属する遺構の可能性がある。また、SD1008・1016などは上層で確認される遺物が出土していることから上層遺構に帰属すると考えられる。それらの遺構に切られる土坑は、灰白色粘土ブロックを多量含み、遺物も出土しない。このような特徴の土坑は、伊場遺跡群内での調査で広範囲に渡って確認される土坑と共通する。遺物が出土していないため帰属時期の判断は困難であるが、検出層位から弥生時代後期の遺構と考えられる。

上層では、掘立柱建物2棟のほか、溝跡、土坑、小穴が多数確認された。南岸において検出された掘立柱建物や小穴などいずれも耕作に関連すると推定される溝跡より新しく、居住域が形成される以前は生産域であったと考えられる。出土した遺物の時期にさほど開きが無いことから耕作に関連する生産域から速やかに居住域へと移行していったと推測される。これらの溝跡は形態や分布状況から、耕作に関連するものと考えられる。溝跡の密集している箇所は畝を作り直した結果、遺構の密度が高くなったと考えられる。伊場大溝北岸では耕作に関連する生産域が持続的に広がっていたことが推測される。

上層の遺構群は、出土遺物、柱根の炭素年代測定の結果を踏まえると伊場大溝Ⅶ層以降（6世紀中葉～7世紀後葉）の遺構群と考えられる。

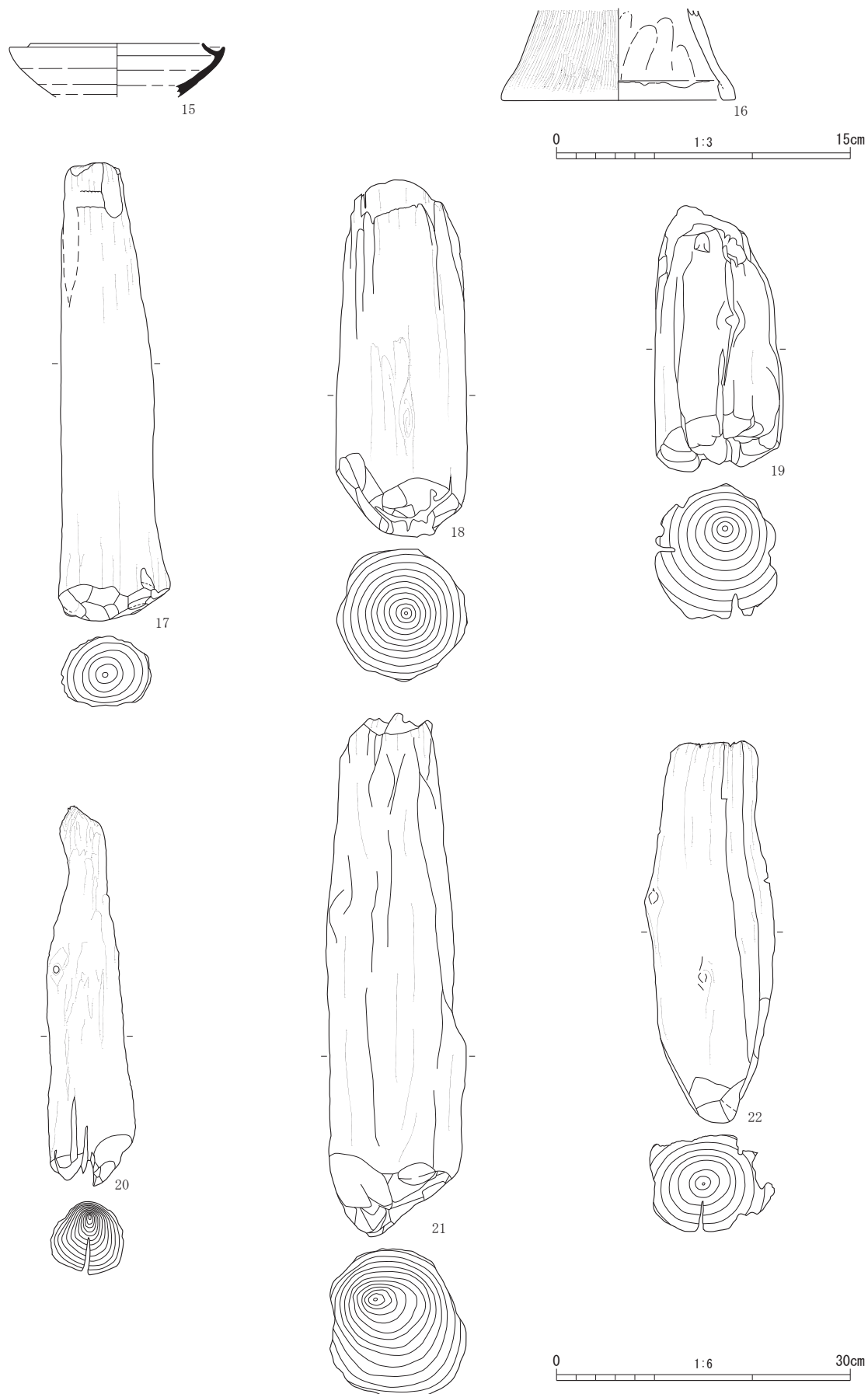


Fig. 64 SP12・157・159・214・234・236・238・253 出土遺物

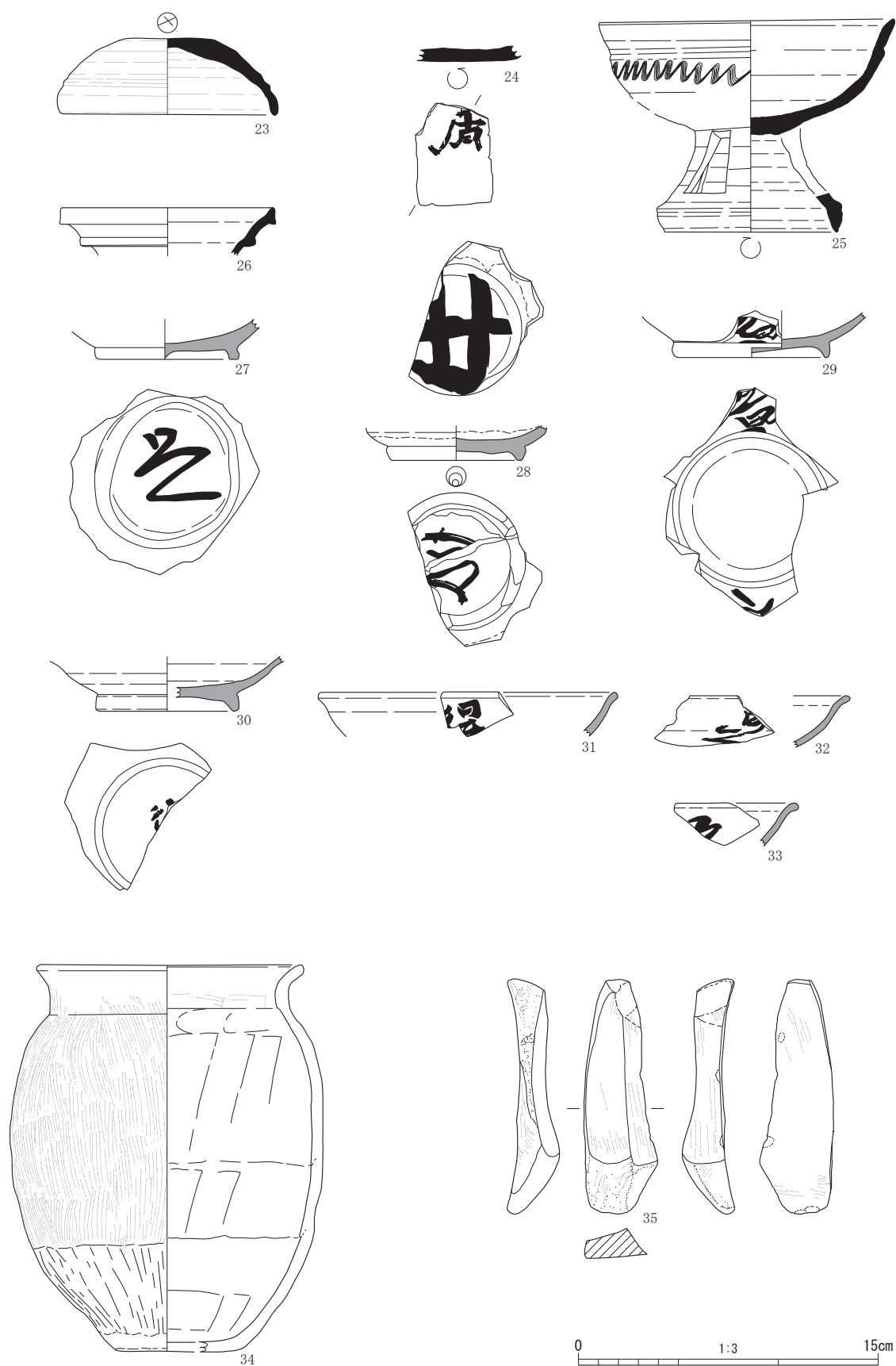


Fig. 65 遺構外出土遺物